

第五十七條
刑期限内更ニ重罪輕
罪ヲ犯シタル者ハ假
出獄ヲ許サス

入獄ノ時ニシテ
中ノ日數ハ減算ニ奉
ニ出獄ノ時ニシテ
罪ヲ犯シタル者ハ假
出獄ヲ許サス

第七節 期滿免除

第五十八條

刑ノ執行ヲ遁レタル
者法律ニ定メタル期
限ヲ經過スルニ因テ
期滿免除ヲ得

○濱田始審廳判事 十五年二月廿七日伺。全年三月十八日付
刑法第一編第二章第七節期滿免除ノ法ハ明治十五年一月一日以
前ニ刑ノ言渡ヲ受ケ其刑ノ執行ヲ遁レタルモノニモ適用シ得ヘ
キ儀哉

指令伺ノ通

○太田治安廳判事補 (十五年三月十六日伺) (全年三月三十一日付)

刑法第五十八條ニ刑ノ執行ヲ遁レタル者期滿免除ヲ得ルノ明文
アリ即チ罰例等ニ依テ處分セシ者罰金ナレハ第五十九條第六項
ニ依リ科料ニ處分セシ者ハ同條第七項ニ依リ勿論ト存候得共治
罪法第十一條ノ公訴期滿免除ニ至リテハ違警罪輕罪重罪ノ期滿
免除而已ニテ刑法ノ如ク科料罰金等ニ至ル明文ナシト雖モ罰金
ノ期滿免除ニ至リテハ其罪素ヨリ輕罪ナレハ治罪法第十一條第
二項ニ依リ可然存候得共科料ニ該ル者ノ公訴期滿免除ハ違警罪
ト見做シ治罪法第十一條第一項ヲ適用シ可然ヤ

指令前項諸法律規則中罰金若クハ科料ノ多數ニ圓未滿ニ該リ
明治十四年第七十二号布告ニ依リ科料ニ處スヘキモノハ伺ノ
通タルヘシト雖モ若シ其多數ニ圓以上ニ在ル者ハ假令其寡數

期滿免除

○福島裁判所檢事(十四年十一月廿五日請訓)
第一條沒收ノ期滿免除ヲ得ルコトニ付(十四年十二月十三日內訓)
賭具財物ノ如キ輕罪ノ用ニ供シタルモノ、ミテ強盜又ハ
謀故殺ニ用ヒタル刀ノ如キハ本刑ノ期滿免除ニ至ラサル内ハ本
條規定ノ期限經過スルモ免除ヲ得ルノ限ニアラスト心得可然哉
内訓刑法中疑義ノ條請訓ノ趣第一條沒收ハ五年ヲ經レハ重罪
輕罪違警罪ヲ分タス其期滿免除ヲ得故ニ強盜又ハ謀故殺ニ用
ヒタル刀ノ如キモ五年ヲ經レハ沒收ス可ラサルモノトス
○福島裁判所米澤支廳檢事(十四年十二月廿二日伺)
第十五條刑法第六十條本條草案第七十一條ニ於テハ剝奪公權停
止公權ハ期滿免除ヲ得ス云々ト有之候處修正ノ際監視ヲモ加ヘ
テ全期滿免除ヲ得ストセラレタリ右剝奪停止ノ兩公權ハ一タヒ
刑ノ言渡ヲ受ルヤ到底犯人ノ身體ニ附着シテ假令何クニ逃亡ス
ルモ終ニ離ルコトナキヲ以テ主刑ノ執行ヲ遂レルカ如ク明瞭ナ
ル者ニ非サレハ之ニ免除ヲ與ヘサル儀ニ可有之哉又監視ハ之ト
其性質ヲ異ニシテ施體ノ刑ニ屬ストセラレタルハ幾分未タ其
人ヲ危ムコトアルノ故ニ可有之哉

第六十條

剝奪公權停止公權及
ヒ監視ハ期滿免除ヲ
得ス
附加ノ罰金ハ主刑ト
共ニ期滿免除ヲ得
沒收ハ五年ヲ經テ期
滿免除ヲ得但禁制物
ハ期滿免除ノ限ニ在
ラス

○松江裁判所檢事

(十四年十二月廿八日伺) 十五年一月廿五日付

第二條第六十二條刑ノ執行ヲ遁レタル者ニ對シ逮捕ヲ命シタル時ハ最終ノ令狀ヲ發シタル日ヨリ期滿免除ヲ起算ス

法文ニ明文ナシト雖モ本條ノ場合ニ於テ令狀ヲ發スルコトヲ即時又ハ數時ノ後若クハ期滿免除ニ至ル迄何時ニテモ檢事ヨリ請求スルコトヲ得ヘキヤ

指令第二條明治十四年當省丙第二十號達ニ依リ逃走ノ後ハ期滿免除ニ至ル迄何時ニテモ檢事ヨリ令狀ヲ發スルコトヲ得

○大坂控訴檢事長 十五年一月廿五日伺。全年二月十四日付既決囚逃亡シタル者ニ對シ發スル令狀ハ其刑ノ執行ヲ爲ス地ノ始審裁判所檢事ヨリ發スル儀ト可心得旨十四年丙第二十號ヲ以テ御達有之候處右ノ場合ニ於テ該檢事逃亡人ノ所在ヲ知ルヲ得サル時ハ之ヲ管轄スル控訴裁判所檢事長ニ申立檢事長ヨリ管内各檢事ニ搜查逮捕ヲ命シ且ツ他ノ控訴裁判所檢事長ヘモ此事ヲ請求スル儀ニ有之候哉又ハ該檢事ヨリ直ニ各控訴裁判所檢事長ニ搜查逮捕ヲ請求スルヲ得ル儀ニ候哉其手續ヲ示スノ明文無之ニ付此段相伺候也

第六十二條

刑ノ執行ヲ遁レタル者ニ對シ逮捕ヲ命シタル時ハ最終ノ令狀ヲ出シタル日ヨリ期滿免除ヲ起算ス

大審院、裁判所、警視廳、府縣(東京府ヲ除ク)十四年司法省丙第二十號達

新法實施後ハ已決囚ノ逃走シタル者ニ對シ發スル刑法第六十二條ノ令狀ハ總テ其刑ノ執行ヲ爲ス地ノ始審裁判所檢事ヨリ

指令明治十四年本省丙第二十號達既決囚ノ逃走シタル者ニ對シ發スル令狀ハ控訴裁判所檢事長ニ關係ナク直ニ始審裁判所檢事ヨリ發スヘキモノトス

○廣島控訴應檢事 十五年二月六日伺。全年二月廿二日內訓已決囚ノ逃走者ヲ處分スル義ニ付テハ本省丙第二十號ヲ以テ御達相成候義ニ有之候處往々管轄外檢事ヨリ人相審ノミニテ令狀ヲ付セス當管内各檢事ヘ逮捕方告達ノ囑托之レアリ其都度逮捕方管内各檢事ヘ告達致シ置候義ニ有之右ハ至ク治罪法第三百二十五條ノ場合ニ准擬諸託候義ニ可有之然ルニ管内檢事ニ於テ令狀ヲ發スル等ノ取扱上疑問モ有之必竟刑法第六十二條ノ令狀ハ己ニ刑ノ言渡ヲ受ケタル囚人ナルヲ以テ檢事執行上ノ點ヨリ發スル命令狀ニシテ未ク有無罪ノ決セサル被告人ニ發スル豫審ノ令狀トハ自ラ差異有之殊ニ其令狀ヲ發スル職權アル相當官吏ノ囑託ヲ受ケ候上ハ右告達ヲ受ケタル各檢事ニ於テ發見次第直ニ令狀ヲ發シ且ツ逮捕ノ上ハ原檢事ヘ送致候義ハ勿論ニ候得共便宜ニ依リ一應原檢事ヘ照會其囑託ヲ受ケ逮捕ノ地ニ於テ逃走ノ處分并ニ刑ノ執行爲致可然哉ニ思料候得共爲念一應相伺候也

發スル儀ト可心得

十五年四月十七日司法省丙第十四號達 大審院、裁判所、警視廳、府縣(東京府ヲ除ク)

既決囚ノ逃走シタル者ニ對シ發スル令狀ノ儀ニ付テハ昨明治十四年丙第二十號ヲ以テ相達置候處始審裁判所々在ノ地ヲ除クノ外ハ現ニ其刑ノ執行ヲ爲ス地ノ警部ニ於テ令狀ヲ發スル儀ト心得ヘク此旨更ニ相達候事

内訓已決囚逃走者處分ノ義ニ付伺ノ趣ハ本年當省丙第六号達ノ通逃走罪ハ豫テ囑託アルモノト看做シ直ニ其裁判所ニ處分ヲ求ム可シ此旨及内訓候也

○水戸始審廳檢事 (十五年一月廿四日請訓) 全年二月廿五日内訓

第二條從來未決已決ノ囚徒逃走シタルキハ其都度地方長官ヨリ司法卿へ届出候手續ニ有之候處右ハ此後共ニ變更無之義ト心得可然哉

内訓第二條已未決囚徒逃走シタルキ地方長官ヨリ司法卿ニ届出ルニ及ハス

○山田始審廳檢事 (十五年一月十五日請訓) 全年二月二日内訓

第十條治罪法ニ於テハ期滿免除ノ期限ヲ中斷スルモ二倍ニ過クルヲ得サルノ明文アリト雖モ刑法第六十二條ニ於テハ最終ノ令狀ヲ發シタル日ヨリ期滿免除ヲ起算スルノ明文アリテ其停期ナキニ依リ數度令狀ヲ發スルキハ終ニ期滿免除ヲ得ルノ日ナキカ如シ果シテ然ラハ刑法第五十九條ハ無用ニ屬スルヲアルヘント雖モ刑法ノ期滿免除ハ單ニ社會其罪ヲ遺忘スルノ一点ニ止ルヲ以テ遺忘スルヲ能ハサルノ手續即チ逮捕ヲ命シタルキハ期滿免

除ヲ得ルノ限リニ非サル乎

内訓第十條法律ノ精神ハ訓示ノ限ニ在ラス

○平始審廳檢事 (十五年七月六日請訓) 全年九月廿六日内訓

第六條刑法第六十二條ニアル最終ノ令狀ヲ出シタル日トハ囑託ニ依リ他ノ檢事カ發シタル令狀ニ記載スル日ニアラスシテ其刑ノ執行ヲ爲ス地ノ檢事ヨリ發シタル最終ノ令狀ニ記スル日ナルヤ

内訓第六條囑託ヲ爲シタル檢事又之ヲ受ケタル檢事ヲ區別セス總テ刑ノ執行ノ爲メ最終ノ令狀ヲ發シタル日ヨリ起算スル義トス

○平始審廳檢事 (十五年九月十四日請訓) 全年九月二十日内訓

第一條刑法第六十二條ノ最終ノ令狀ヲ出シタル日ハ第六條内訓ニ囑託ヲ爲シタル檢事又ハ之ヲ受ケタル檢事ヲ區別セス總テ刑ノ執行ノ爲メ最終ノ令狀ヲ發シタル日ヨリ起算スル義トストアリ然ラハ甲地ノ檢事逃走ノ囚徒ニ對シ九月十日ニ令狀ヲ發シ其囑託ヲ受ケタル乙地丙地ノ檢事ハ九月二十日付又ハ十月一日付ニテ令狀ヲ發シタルキ其最終ノ令狀ヲ發シタル日ハ十月一日ト

期滿免除

スルヤ

若シ十月一日ヲ以テ最終ノ令狀ヲ發シタル日トスルキハ其囚徒ハ何處ニ潛匿スルニ關セス十月一日ヨリ刑ノ期滿免除ヲ起算セラルヘキ者ナリ然ルニ十月一日ニ丙地檢事カ令狀ヲ發シタルハ甲地及乙地檢事ノ知ラサル所ナルヲ以テ區々ノ處分ニ涉ルノ恐レナキ能ハス右ハ如何處分シ可然哉

内訓第一條前項見込ノ通後項甲地若シハ乙地ノ檢事ニ於テ逮捕シタル時ハ丙地檢事ニ照會スレハ其令狀ヲ發シタル日ハ明白スヘシ

前橋始審廳檢事 十五年十一月八日伺。同年同月十七日付第一條刑法第六十二條ニ刑ノ執行ヲ遣レタルモノ云々ト有之候處總テ附加刑モ右ニ包含セル儀ト心得可然哉

指令第一條附加刑ト雖モ法律上逮捕ヲ許スヘキ者ハ皆包含ス

第八節 復權

第六十三條

公權ヲ剝奪セラレタ
ル者ハ主刑ノ終リタ
ル日ヨリ五年ヲ經過
スルノ後其情狀ニ因
リ將來ノ公權ヲ復ス
ルヲ得
主刑ノ期滿免除ヲ得
タル者ハ監視ニ付シ
タル日ヨリ五年ヲ經
過スルノ後亦同シ

第六十四條

大赦ニ因テ免罪ヲ得
タル者ハ直ニ復權ヲ
得特赦ニ因テ免罪ヲ
得タル者ハ赦狀中記
載スルニ非サレハ復
權ヲ得ス
赦ニ因テ復權ヲ得タ
ル者ハ自ラ監視ヲ免
シタル者トス

加減例

第六十五條
復權ハ赦裁ニ非サレ
ハ之ヲ得可カラズ

○宇和島輕罪廳檢事(十五年三月十七日伺)

(全年四月十一日付)

第三條新刑法減刑ノ例ニ一等又ハ二等ヲ減ストアリ本刑ニ二等
ヲ減スル場合ニハ直ニ四分ノ二ヲ減スルカ如キ文法ナリト雖モ
一等ツ、二回減スルヲ以テ正當ナリト思考ス如何トナレハ倘シ
二等ヲ一概ニ減セントセハ輕懲役ニ當ルモノニ等ヲ減スルニ一
等二年以上五年以下ノ重禁錮トナル夫ヨリ四分ノ一ヲ減セサレ
ハ減等ノ方無レハナリ而シテ此レヲ七十條ニ照スニ唯一等ノ加減
例ヲ示セルノミヲ以テ觀レハ了然一等ツ、減スル法意ナラント
存候以上ノ如ク解釋致可然哉
指令第三條一度ニ通シテ二等ヲ減スヘシ

第三章 加減例

第六十六條

法律ニ於テ刑ヲ加重
減輕スヘキ時ハ後ノ
數條ニ記載シタル例
ニ照シテ加減ス但加
ヘテ死刑ニ入ルヲ
得ス

第六十七條

重罪ノ刑ハ左ノ等級
ニ照シテ加減ス

- 一 死刑
- 二 無期徒刑
- 三 有期徒刑
- 四 重懲役
- 五 輕懲役

第六十八條

國事ニ關スル重罪ノ
刑ハ左ノ等級ニ照シ
テ加減ス

- 一 死刑
- 二 無期流刑
- 三 有期徒刑
- 四 重禁獄
- 五 輕禁獄

第六十九條

輕懲役ニ該ル者減輕スヘキ時ハ二年以上五年以下ノ重禁錮ニ處スルヲ以テ一等ト爲ス
輕禁獄ニ該ル者減輕スヘキ時ハ二年以上五年以下ノ輕禁錮ニ處スルヲ以テ一等ト爲ス

第七十條

禁錮罰金ニ該ル者減輕スヘキ時ハ各本條ニ記載シタル刑期金額ノ四分ノ一ヲ減スルヲ以テ一等トナシ其ノ加重ス可キ時ハ又四分ノ一ヲ加フルヲ以テ一等ト爲ス
輕罪ノ刑ハ加ヘテ重罪ニ入ルヲ得ス但禁錮ハ加ヘテ七年ニ至ルヲ得

○安濃津始審廳判事 (十四年十二月廿八日請訓) 十五年一月三十一日內訓

第二條刑法第七十條ニ禁錮罰金ニ該ル者減輕スヘキ時ハ各本條ニ記載シタル刑期金額四分ノ一ヲ減スルヲ以テ一等トナストアリ右ニ依レハ四等ヲ減スル時ハ (例ヘハ禁錮ノ長期五年ナルモノ) 一月ナルモノモ均シク全ク減盡シテ零ヲ得長短多寡ノ範圍ナキモノトナル若シ遞減スル時ハ如斯結果ヲ生スルヲナシ執レヲ以テ解釋ノ當ヲ得タルモノトスルカ

○福嶋裁判所平支廳檢事 (十四年十二月五日請訓) 十五年二月七日內訓

第九條刑法第七十條ニ禁錮ハ加ヘテ七年ニ至ルヲ得トアリ例ヘハ誣告ノ刑ニ二年以上五年以下ノ重禁錮十圓以上五十圓以下ノ附下罰金ナルヲ以テ第三百六十三條ニ依リ二等ヲ加フレハ三年以上七年六月以下ノ重禁錮十五圓以上七十五圓以下ノ附加罰金トナル此犯人ニ再犯加重又ハ宥恕減輕ヲ爲スヘキハ七年六月ヨリ其四分ノ一ヲ加減スヘキ哉又ハ六月ヲ棄捐シ七年ヨリ加減スヘキ哉
內訓第九條禁錮ハ加テ七年以上ニ至ルヲ得サルハ減輕スル

加減例

時ハ最長期七年以上ヨリ減輕ス可シ但再犯ニ係ルト雖モ七年以上ニ加重シテ處斷スルコト得ス

○福島裁判所平支廳檢事(十四年十二月五日請訓) 第十條刑法第七十一條ニ禁錮ヲ減盡シタル時ハ拘留ニ處シ罰金

ヲ減盡シタルキハ科料ニ處ストアリ例ヘハ十一日以上一月以下ノ重禁錮ヲ三等減スルキハ二日以上七日以下トナル此場合ニ於テハ本條ニ依リ二日以上七日以下ノ拘留ニ換ヘ處斷スヘキヤ又ハ禁錮ハ減盡シタリトシテ一日以上十日以下ノ拘留ニ所斷スヘキヤ

内訓第十條後段見解ノ通

(理由)禁錮ヲ減盡ノ勾留ニ下リタル時ハ其勾留ノ一日以上十日以下ノ範圍内ニ於テ裁判官ノ適宜ニ任スヘキモノトス

○米澤始審廳判事(十五年二月十四日伺) 茲ニ竊盜犯アリ該犯ハ事未タ發覺セサル前ニ於テ官ニ自首シ并

赃物ヲ全ク還給セリ如斯ハ刑法第三百六十六條ヲ適用シ自首シ并赃物ノ全部ヲ還給シタルヲ以テ同第八十五條及第八十六條ニ照ラシ通シテ三等ヲ減シ十五日以上一年以下ノ重禁錮ニ處スヘキハ勿論ナルモ該犯ニシテ若シ其所犯ノ情狀ニ於テ最モ原諒スヘキアルキハ酌量減輕ヲ以テ尙ホ一等ヲ減シ無科ト爲スヲ得ヘ

第七十一條

禁錮ヲ減盡シタル時ハ拘留ニ處シ罰金ヲ減盡シタル時ハ科料ニ處ス禁錮罰金ヲ減シテ其短期十日以下寡數一圓九十五錢以下ニ及フ時ハ亦拘留科料ニ處スルコト得

加減例

キ歟又酌量減輕ハ無科トナルヘキ場合ニハ適用スルヲ得ヘカラ
 サルモノ歟若シ果シテ無科トナルヘキ場合ニ適用スヘキモノニ
 非ストモハ何ニ因テ然ル歟律面ヲ通觀スルニ原諒スヘキ狀アル
 モノハ酌量シテ減輕スルヲ得ルノ明文アルモ之ヲシテ無科トナ
 ルヘキ場合ニ適用スルヲ得ストノ明文ナシ明文ナキモノハ素ヨ
 リ法ノ禁スル所ニアラサル權被考疑義難決候
 指令伺之趣事情原諒スヘキコアル者ハ酌量減等スルヲ得ル
 ト雖モ減輕シテ本刑ヲ減盡スルキハ刑法第七十一條ニ依テ處
 分スヘシ

(理由)禁錮ヲ減盡シタル時ハ拘留ニ處スヘキ旨第七十一條

ニ明文アレハ決シテ無科トナルコトナシトス

○延岡治安裁判所 (十五年四月十五日伺
 全年全月十九日付電報)

禁錮ヲ減シテ拘留ニ下リ附加罰金ヲ減シテ科料ニ下ル時ニ科料
 ハ消滅トナシ止タ拘留ニノミ處スヤサレハ仍ホ監視ニ附スヘキ
 消滅スルヤ如何
 指令禁錮ヲ減シテ拘留ニ下ル者ノ儀ニ付伺ハ禁錮以上ノ刑ニ
 處セラル、モノニ非サレハ監視ヲ付加セス

○愛媛縣 十五年二月十八日伺。全年三月九日付
 刑法第七十二條第二項云々科料ハ總テ二圓四十錢ニ至ルヲ得
 減シテ五錢以下ニ降スヲ得スト有之候處本縣違警罪目中共罪
 狀輕キハ豫テ金五錢ノ目安ヲ以テ處分致スモノ往々有之然ルニ
 同様ノ罪ヲ犯シ自首スルカ或ハ年十六未滿ニテ當然減等スヘキ
 場合ニ於テモ該明文ニヨリ之ヲ減等スル能ハサルモノ、如シ然
 ト雖モ其情狀最モ酌量スヘキモノ、如キハ直ニ無罪ノ申渡ヲナ
 スハ妨ナキ義ニ候哉
 指令伺ノ趣減シテ五錢以下ニ降スヘキ者ニ非サルヲ以テ無罪
 ノ言渡ヲ爲スヲ得ス

第七十二條
 拘留科料ニ該ル者加
 減ス可キ時ハ禁錮罰
 金ノ例ニ照シ其四分
 ノ一ヲ加減スルヲ以
 テ一等ト爲ス
 違警罪ノ刑ハ加ヘテ
 輕罪ニ入ルヲ得ス
 但拘留ハ加ヘテ十二
 日ニ至ルヲ得減シ
 テ一日以下ニ降スヲ
 得ス科料ハ加ヘテ
 二圓四十錢ニ至ルヲ
 得減シテ五錢以下

○警視總監 十五年一月廿日伺。同年二月十日付
 刑法第一編第三章加減例違警罪ハ別表ニ比照加重減輕シ可然哉
 指令伺ノ趣ハ別紙改正ノ通心得ヘシ
 別紙改正表

刑本 科料	一日以上		二日以上		三日以上		刑本 拘留	一等	二等	三等
	減	加	減	加	減	加				
壹圓以上 拾五錢以下	減	加	減	加	減	加	短期 長期	短期 長期	短期 長期	短期 長期
	減	加	減	加	減	加				
	減	加	減	加	減	加				
五十錢以上 拾錢以下	減	加	減	加	減	加	短期 長期	短期 長期	短期 長期	短期 長期
	減	加	減	加	減	加				
	減	加	減	加	減	加				
廿錢以上 五錢以下	減	加	減	加	減	加	短期 長期	短期 長期	短期 長期	短期 長期
	減	加	減	加	減	加				
	減	加	減	加	減	加				
拾錢以上 壹圓以下	減	加	減	加	減	加	短期 長期	短期 長期	短期 長期	短期 長期
	減	加	減	加	減	加				
	減	加	減	加	減	加				
五錢以上 五拾錢以下	減	加	減	加	減	加	短期 長期	短期 長期	短期 長期	短期 長期
	減	加	減	加	減	加				
	減	加	減	加	減	加				

第七十三條

禁錮拘留ヲ加減スルニ因テ其期限ニ零數ヲ生シ一日ニ滿サル時ハ之ヲ除棄ス

○姫路始審廳判事 (十四年十二月二日請訓)

(十五年一月十九日内訓)

第七十三條例へハ第四百二十五條ノ犯人アランニ本刑三日以上十日以下ノ拘留ノ處再犯ニ係ルヲ以テ一等ヲ加フレハ三日以上十二日十二時以下トナル

又第三百條第三項ノ犯人アランニ原刑二年以上五年以下ノ重禁錮ノ處其事タル豫謀ニ出テ其再犯ニ係ルヲ以テ一等ヲ加ヘ本刑ト爲シ猶本刑ニ一等ヲ加ヘ三年一月十五日以上七年九月二十二日十二時以下トナル

以上ノ場合ニ於テ宥恕又ハ酌量減輕ヲ爲サントスルハ甲ハ十二日十二時乙ハ七年九月二十二日十二時ヨリ其四分ノ一ヲ減スルヤ

又ハ十二日ハ違警罪ノ加等ノ極數七年ハ輕罪ノ加等極數ナレハ違警罪輕罪ニシテ十二日以上又ハ七年以上ニ涉ルヘキ刑期ノアルヘキ道理ナキヲ以テ若シ其極數ヲ踰ルハ其都度之ヲ極數ニ引直シテ加減スヘキ者ナリヤ

内訓第七十三條末項意見ノ通

○姫路始審廳判事

(十四年十二月二日請訓) 十五年一月十九日内訓

第七十四條例へハ第百五十七條第二項ニ記シタル犯人ノ雇人ニシテ第百五十八條ニ依リ罰スヘキ者アランニ本刑十五日以上六月以下ノ重禁錮五圓以上五十圓以下ノ附加罰金ノ處酌量シテ二等ヲ減スレハ七日以上三月以下二圓五拾錢以上二拾五圓以下ナル此場合ニ於テ第七拾一條ニ依リ九日ノ拘留ニ處スヘキハ附加ノ罰金ハ減盡シタル者トスル歟
或ハ其禁錮ノ短期ハ十日以内ニ入ルト雖モ附加ノ罰金ハ猶ホ二圓以上ニアル時ハ拘留ニ處セスシテ禁錮罰金ニ處スヘキ者ナルヤ

第七十四條
附加ノ罰金ハ主刑ニ從テ加減シ其金額ノ四分ノ一ヲ加減スルヲ以テ一等ト爲ス若シ減盡シタル時ハ止メ主刑ヲ科ス

内訓第七十四條附加ノ罰金ハ減シテ二圓以下ニ至ラサレハ減盡シタリトセス又主刑ノ禁錮減シテ短期十日以下ニ至ルキハ附加ノ罰金二圓以上ニアルトモ拘留罰金ニ處スルヲ得

○福島裁判所平支廳檢事

(十四年十二月五日請訓) 十五年二月七日内訓

第十一條刑法第七十四條ニ附加ノ罰金ハ云々若シ減盡シタルキハ止メ主刑ヲ科ストアリ例へハ十五日以上六月以下ノ重禁錮五圓以上五十圓以下ノ附加罰金 (第百五十七條第二項)ノ處酌量シ

テ二等ヲ減スレハ七日以上三月以下二圓五十錢以上二十五圓以下トナル此犯人ヲ刑法第七十一條ニ依リ九日ノ拘留ニ處スルキ附加ノ罰金ハ減盡シタル者ト做シ之ヲ科セサルヤ
若シ併科スヘキキハ犯人其罰金ヲ納完セサルニ當リ刑法第四十二條ニ依リ輕禁錮ニ換ヘ處斷スヘキ哉

内訓第十一條主刑ハ減シテ拘留ニ下ルモ附加ノ罰金減盡セサルキハ刑法第七十四條ニ依ルヘキ者ニ非ス後項見解ノ通
(理由)主刑ハ減シテ拘留ニ下ルモ附加ノ罰金減盡セサルキハ刑法第七十四條ニ依ルヘキモノニアラス主刑ノ拘留ト附加ノ罰金ト併科スル儀ナレハ後項ノ場合ニ於テハ輕禁錮ニ換ヘサルヲ得サル者トス

○滋賀縣 十五年一月十七日伺。 全年二月七日付

第三條第七十四條附加ノ罰金ヲ減シ其寡數二圓以下ニ及フ時ト雖モ多數二圓以上ニ存スル時ハ二圓以下ニ下ラサル罰金ヲ附加スルヲ得ルカ如シ然レモ多數二圓以下ニ及ヒ其數ヲ存スト雖モ罰金ハ二圓以上ヲ以テ本則ト爲スヲ以テ又減盡シタルモノト爲シ止メ主刑ノミヲ科ヘキ哉

指令第三條伺之通

(理由)第三條附加ノ罰金ハ即チ附加刑ナリ科料ハ附加刑ニ非ス附加ノ罰金ヲ減尽スル時ハ主刑ノ罰金ノ如ク其主刑タル科料ノ刑名ニ從ヒ之ヲ罰セサルヲ以テ刑法第七十四條ノ主意トス故ニ未タ全ク附加ノ罰金ヲ減尽スルニ至ラズ猶ホ幾分ノ金額ヲ存スルニモ罰金ノ範圍以外ニアルヲ以テ伺ノ通減尽シタルヲ以テ處分スヘキ儀ト考量候

○熟田治安裁判所 十五年十月 日。十五年十一月二日回答
第八條刑法第七十四條附加ノ罰金ハ主刑ニ從テ加減云々若シ減尽シタル時ハ止タ主刑ヲ科ストアリ例ハ得遺失物ノ犯罪者ニシテ二十歳未滿ノ者ナレハ十一日以上三月以下ノ重禁錮二圓以上二拾圓以下ノ罰金ヨリ一等ヲ減スヘキモノナリ而シテ主刑ハ短期ヨリ減スルモ十日以下ノ拘留トナルヲ得ルモ罰金ハ二圓ヨリ以下ニ下スヲ得ス如斯ハ多數ヨリ減スレハ未減尽セザレハ寡數ニ依レハ減尽スルヲ以テ二圓ヨリ減スル時ハ本條ニ照シ止タ主刑ノミ科スヘキ哉

回答第八條附加罰金ノ寡數ハ減尽スルモ其多數減尽セザルハ

ハ仍ホ其剩餘ニ就キ相當ノ罰金ヲ科スルモノトス

加減例

○京都裁判所大津支廳 (十四年十二月廿四日伺)

(十五年二月十四日付)

第一條刑法第七十五條第七十六條第七十七條第一項第二項第七十八條第七十九條第八十二條其他各條ニ記載シ其罪ヲ論セストアルモノハ檢事限リ放免致シ起訴ノ手續ニ及ハス候哉
第二條刑法第八十條罪ヲ犯ス時滿十二歳以上十六歳ニ滿タサル者是非ヲ辨別シタルト否トヲ審按スルモ檢事ニ屬シ若辨別ナクシテ犯シタル者ト思料スル時ハ前條ノ如ク處分可致哉
第三條刑法第七十九條第八十條第八十二條但書懲治場ニ留置スルハ檢事ノ公訴裁判官ノ言渡ニ由ラス地方警察官吏ノ處分ニ可有之哉

指令伺之趣事情明白ニシテ刑ヲ全免ス可キ者ハ起訴ヲ爲スニ及ハス但共犯人又ハ附帶ノ犯罪アリテ其審判ヲ要スル時若クハ被害者ヨリ私訴ヲ爲シタル時又ハ懲治場ニ留置スヘキ者ナルハ此限ニ非ラス

(理由) 刑法第七十五條以下其罪ヲ論セサル者ナルヤ否事實ノ審判ハ大要判事ノ職權内ニ在ルヘキカ如シト雖モ其事情明白ニシテ判事ノ判決ヲ要セサルモノハ檢察官限放免シ起

第四章 不論罪及ヒ

減輕

第一節 不論罪及ヒ

宥恕減輕

第七十五條

抗拒ス可カラサル強制ニ遇ヒ其意ニ非サルノ所爲ハ其罪ヲ論セス

天災又ハ意外ノ變ニ因リ避ク可カラサル危難ニ遇ヒ自己若クハ親屬ノ身體ヲ防衛スルニ出タル所爲亦

同シ

訴ヲ爲スニ及ハサル可シ治罪法第百七條末項ハ如此場合ヲ規定シタルモノト考量ス然ルニ若シ他ニ共犯人又ハ附帶ノ犯罪アリテ審判ヲ要スル時若クハ被害者ヨリ私訴ヲ爲シタル時ハ起訴ヲ爲サ、ルヲ得スト思惟セリ其懲治場ニ留置ヘキ者ニ付テハ判事ノ判定ヲ要ス可キ者トス

不論罪及ヒ宥恕減輕

第七十六條

本屬長官ノ命令ニ從
ヒ其職務ヲ以テ爲シ
タル者ハ其罪ヲ論セ
ス

第七十七條

罪ヲ犯スノ意ナキノ
所爲ハ其罪ヲ論セス
但法律規則ニ於テ別
ニ罪ヲ定メタル者ハ
此限ニ在ラス
罪ト爲ル可キ事實ヲ
知ラスシテ犯シタル
者ハ其罪ヲ論セス
罪本重カルヘクシテ
犯ス時知ラサル者ハ
其重キニ從テ論スル
ヲ得ス
法律規則ヲ知ラサル

ヲ以テ犯スノ意ナシト爲スヲ得ス

○山田始審廳論事(十五年一月十五日請訓)

第十四條刑法第七十八條ニ犯罪ノ時知覺及精神ノ喪失ヲタル者云々トアリ謀故殺犯罪人ハ多ク酒力ニ依リ力ヲ得ルモノナリ故ニ該犯罪ヲ遂クル勢力ヲ補助ゼンカ爲メ大酒ヲ飲ミ是非ヲ弁別セサル如キハ本條ノ範圍外ニ置クヘキハ勿論ナリト雖モ若シ飲酒ハ喜悅ノ事ニ起リ遂ニ前後ヲ忘却シ突然鬪毆傷ヲ爲ス者ノ如キハ本條ニ從テ其罪ヲ論スヘキモノニアラサル乎
内訓第十四條實際ノ刑狀ニ依リ一概ニ訓示シカダシ

第七十八條

罪ヲ犯ス時知覺精神ノ喪失ニ因テ是非ヲ辨別セサル者ハ其罪ヲ論セス

不論罪及ヒ宥恕減輕

○松江裁判所檢事 (十四年十二月廿八日伺)

十五年一月廿四日付

第三條第七十九條但以下但滿八歳以上ノ者ハ情狀ニ因リ滿十六歳ニ過キサル時間之ヲ懲治場ニ留置スル事ヲ得
一本條以下ノ留置ハ檢察官ヨリ請求スル事ヲ得ルカ
二又檢察官ノ請求ナシト雖モ裁判所ノ職權ヲ以テ留置ヲ命スル事ヲ得ルカ

指令第三條第一項伺之通第二項既ニ裁判所ニ於テ受理シタル事件ニ係レハ檢察官ノ請求ナシト雖モ裁判官ノ職權ヲ以テ留置ヲ命スル事ヲ得

○福島縣 十五年一月廿八日伺。全年二月十五日付

刑法ニ照シテ不論罪ナル者ハ被告事件罪ト爲ラサル者ニ付檢察官起訴ノ手續ヲ爲サ、ル無論ト存候時其刑法第七十九條第八十條第八十二條ノ場合ニ於テ懲治場ニ留置スヘシト思料スルハ通常ノ規則ニ依リ起訴ノ手續ヲ爲シ公判判事ニ於テ其留置ノ期限ヲ言渡ス儀可有之哉

指令伺之趣事情明白ニシテ刑ヲ全免ス可キ者ハ起訴ヲ爲スニ及ハス但共犯人又ハ附帶ノ犯罪アリテ其審判ヲ要スル時若ク

第七十九條

罪ヲ犯ス時十二歳ニ滿サル者ハ其罪ヲ論セス但滿八歳以上ノ者ハ情狀ニ因リ滿十六歳ニ過キサル時間之ヲ懲治場ニ留置スル事ヲ得

ハ被害者ヨリ私訴ヲ爲シタル時又ハ懲治場ニ留置スヘキ者ナル時ハ此限ニ在ラス

○松山始審廳檢事 (十五年二月廿二日伺)

全年三月八日付電報

生レタル月及日ヲ知ラサル者ノ年齢計算方ハ如何スヘキ哉
指令生年ヲ知テ生月ヲ知ラサル者ハ十二月ヲ以テ生月ト爲シテ計算スヘシ

(理由) 刑法治罪法ニハ其明文ナシト雖モ舊法則ヲ改定律例

ニハ生年ヲ知テ生月ヲ知ラサル者ハ半年ト爲シテ計算ストアリ抑生年ヲ知テ生月ヲ知ラサル者ハ六月以前ノ出生ニ係ルヤ又ハ七月以後ニ出生シタルヤ知ル可カラズ然ルニ舊例ニ依リ之ヲ計算セントスルハ之カ爲メ大ニ幸不幸ヲ生シ不都合ナルニ付十二月ヲ以テ生月ト定メ計算スルヨリ外ナカルヘシ

○岡山輕罪廳檢事 (十五年三月七日請訓)

全年四月十一日內訓

二條刑法第七十九條第八十條第八十二條不論罪ノ者ニシテ其情狀懲治場ニ留置スヘキ者ト思料スルハ治罪法中別ニ條規ナキモ檢察官ニ於テ其處分ヲ判事ニ請求スヘキヤ果シテ然レハ公

不論罪及ヒ懲減輕

延ニ於テ通常ノ規則ニ從ヒ其事由ヲ陳述スヘキヤ

内訓第二條見解之通

○松江輕罪廳檢事 十五年四月七日伺。全年五月廿七日付
第二條刑法第七十九條第八十條第八十二條等ニ依リ裁判官ニ於
テ懲治場ニ留置ノ言渡シタルモノハ何程矯正歸善ノ實効アルト
モ其年限中ハ留置ヲ解ク事ヲ得サルカ

(思考) 重罪輕罪ノ主刑及ヒ監視ニ就テハ假出獄免幽閉免監
視等法アリト雖モ懲治場ニ留置シタル者ニ就テハ假ニモ之
ヲ免スノ明文ナキヲ以テナリ

指令第二條伺之通

○弘前始審廳判事 (十五年五月三十日請訓)
全年六月廿二日内訓

第一條刑法第七十八條或ハ八歳以下ノ者ノ如キ罪犯其不論罪ヲ
ル事一目瞭然ノモノト雖モ必ス公判ニ付スヘキモノニシテ檢察
官又ハ豫審掛ニ於テ直ニ之ヲ棄却ス可キ權ナキ義ニ有之候哉
第二條前條ノ如キモノ若シ公判ニ付スヘキモノトスルモハ刑法
第七十九條及ヒ第八十二條又ハ十二歳以上十六歳以下凡テ辨別
ナクシテ犯シタル不論罪ニ該ル可キモノノ如キハ無論公判ニ付

シ言渡ヲ要ス可キモノナラント思考スレモ本條其罪ヲ論セスト
アルヲ以テ之ヲ觀レハ止メ留置情狀有無ノ一點ノミニ付公判ヲ
要スルカ加ク然ラハ豫審終結言渡ノ如キモ亦右情狀ノ一點
ヲ指的ニテ公判ニ移スノ理アラシク然ラハ豫審判事ハ其ノ
留置ノ情狀アリト思惟シタルモ之ヲ公判ニ移スノ理ナラン果シ
テ然ラハ豫審判事ハ其留置ノ情狀アリト思惟シタルモ之ヲ公判
ニ移スノ言渡ヲ爲サンカ然ラハ其裏面ヲ以テ情狀ナシト思惟セ
ハ無論放免セサルヲ得サルカ如シ左スレハ其情狀有無ノ點ニ至
リテハ暫ク之ヲ不言ニ置キ其決科セサルマテ公判ニ移スノ言渡
ヲ爲サン乎豫審終結言渡ノ規則ニ背戾セルヲ奈何セン其故何ト
ナレハ治罪法第二百廿八條末項ニ於テ前畧其罪ヲ罰スヘキ法律
ノ正條ヲ明示ス可シトアレハナリ夫レ斯ノ明文ニ準據スレハ豫
審判事ハ必ス被告カ公判ニ於テ處斷ヲ受クヘキ法律ノ正條ヲ明
示セサルヘカラサル辨論ヲ費サスシテ明瞭ナリ然ルテ前様漠然
無空ニ終結ノ言渡ヲ爲スカ如ハ治罪上稍其明瞭ヲ失ハシ手
第三條前條ノ者果シテ公判ニ付シ宣告ヲ要スヘキモノトスレハ
公判官ニ於テ其留置ノ日數ヲ定メサルヲ得サルハ勿論ナリトス

不論罪及ヒ宥恕減輕

而ノ刑法第七十九條及第八十條トモ其日數ノ長期ヲ定メタルノ
ニシテ其短期ノ定メナキヲ見レハ無論一日以上ノ短期ニ下ス
モ妨ケナキ義ニ有之候哉將タ其年齡ノ多寡ニ準シテ六ヶ月トカ
又ハ一ケ年トカ豫メ推定致シ置ク可キ義ニ候哉

内訓刑法不論罪ニ該ル者處分方ノ件請訓ノ趣第一條明瞭ナル
者ハ公判ニ付スルニ及ハス第二條豫審判事ニ於テハ免訴ノ言
渡ヲ爲シ檢察官ヨリ別ニ懲治場留置ノ義ヲ公判々事ニ請求ス
ヘキ者トス第三條相當ト思料スル期限ノ言渡ヲ爲ス可シ別段
法律ニ於テ其期限ヲ定メサルモノトス

○小濱治安廳判事補 (十五年六月廿七日伺)
全年八月十六日付

第七條十二歳未滿ノ幼年者ニシテ死亡者ノ跡家督相續ヲ爲シ其
讓受タル地券書換ヲ滿六月テ經過シテ后テ請願スルアリ右ハ明
治八年第五百五十三号布告第二條ニ據リ幼年者ト雖モ科料ヲ科ス
可キ哉又ハ後見人アルキハ其後見人ヲ科ス可キ哉

指令第七條十二歳ニ滿タサル幼者ニハ刑ヲ科セス後見人アル
キハ後見人ヲ罰スヘシ

○濱田始審廳檢事 (十五年十一月十三日請訓)
全年全月二十四日內訓

第一條刑法第七十九條以下ニ懲治場ニ留置スル事ヲ得ルトアル
モノハ同法第一編第二章第一節則主刑附加刑中ニ罪ニナキモノ
ナレハ其留置ハ決シテ刑ニアラサルヘシ付テハ裁判官ニ於テ言
渡ヲナス可キモノニアラサルカ如クナレハ刑法治罪法中明文ナ
シ竊ニ考フルニ佛國ノ檢察官ハ假令被告人罪アリ起訴スヘキモ
ノト雖モ其後來ノ行狀ヲ訓誡スル事アリ今我法律ニ於テ懲治場
ニ留置スルヲ得トアルモノハ是亦其後來ノ行狀ヲ誡ムルニ外ナ
ラサルヘケレハ檢事ニ於テ其期限ヲ定メ直ニ處分スル穩當ナル
カ如シ若シ夫レ裁判官ニ於テ言渡スヘキモノタルハ十二歳以
下ノ幼者又瘖啞者ニシテ其罪ヲ論セサルモノタルト雖モ留置
言渡ノ爲メ裁判官ニ交付セサルヲ得ス如是ハ公訴ニアラス隨テ
訴訟裁判ニモアラサルヘシ依テハ其言渡ノ手續順序ハ如何シテ
然ルヤ且上訴ヲ聽スモノナルヤ

内訓第一條懲治場ニ留置スヘキ者ハ通常ノ規則ニ從ヒ裁判官
ニ交付シ其言渡ヲ受ク可シ若シ法律ニ背キタル言渡ヲ爲シタ
ル時ハ上告ヲ爲ス事ヲ得

不論罪及ヒ懲恕減輕

○福島裁判所米澤支廳檢事（十四年十二月廿二日伺）
第十六條刑法第八十條罪ヲ犯ス時云々辨別ナクシテ犯シタル時

ハ其罪ヲ論セス但情狀ニ依リ滿二十歳ニ過キサル時間之ヲ懲治
場ニ留置スルヲ得ト有之右情狀ニ依リ懲治場ニ留置スル場合
ニ於テハ判官別ニ宣告ヲ用ヒル者ニ可有之果シテ然レハ該宣告
不届ト見込モ固ヨリ行政ノ一部ヲ判官ニ委任セラレタルモノ、
如クナレハ檢事ニ於テハ喙ヲ入ル、ノ限ニアラサルカ

指令第十六條伺之通

○山田始審廳檢事（十五年一月十五日請訓）

第十三條刑法第八十條ニ第二期ノ幼者ハ其所爲是非ヲ辨別シタ
ルト否トヲ審按シ云々トアリ此所爲ノ是非ニ付テハ二種ノ解釋
アリ一ニ曰單ニ道理上ニ於テ是トシ非トスルノ勘別ニ曰社會
ニ對シ妨害ニナルト否ト勘別是ナリ獨リ道理上ノミノ勘別ニ限
ルトセハ犯人ニ向テ嚴烈ニ涉リ社會ノ妨害ト否トノ勘別トセハ
頗ル寛裕ノ處分ニ歸ス之ヲ審按スルニ第二項ノ如ク解釋スルヲ
以テ本條ノ精神ナラント思考致可然哉

内訓第十三條實際ノ形狀ニ依リ一概ニ訓示シ難シ

不論罪及ヒ宥恕減輕

第八十條

罪ヲ犯ス時滿十二歳
以上十六歳ニ滿サル
者ハ其所爲是非ヲ辨
別シタルト否トヲ審
察シ辨別ナクシテ犯
シタル時ハ其罪ヲ論
セス但情狀ニ因リ滿
二十歳ニ過キサル時
間之ヲ懲治場ニ留置
スル事ヲ得
若シ辨別アリテ犯シ
タル時ハ其罪ヲ宥恕
シテ本刑ニ二等ヲ減

(理由) 是非ヲ辨別シタルト否ト知覺精神ヲ喪失シタルト否トヲ審按評量スルハ實際ノ形狀ニ依リ一概ニ論シ難シ

○浦和輕罪廳檢事 (十五年六月十四日付) 全年九月十九日回答

刑法第八十條罪ヲ犯ス時滿十二歲以上十六歲ニ滿クサル者ハ其所爲是非ヲ辨別シタルト否トヲ審案シ辨別ナクシテ犯シタル者ハ云々トアリ然ルニ右ノ幼者ニシテ火ヲ放シテ他人ノ家屋ヲ燒毀シ又ハ牛馬ヲ牽キナカラ之ヲ放失シテ往來人ヲ殺傷シタルカ如キハ元來過失ヲ以テ罪ヲ組織シタルモノカ故ニ被告タル幼者カ其火ノ危險ナル牛馬ノ驚逸シテ人ヲ殺傷スル事ヲ辨別シタル時ハ尙ホ失火及過失殺傷ノ罪ハ免ル、事ヲ得ルカ如シ

(回答) 御實義ノ趣是非ノ辨別アリテ犯シタルモハ刑法各本條ニ照シ第八十條ノ末項ニ依テ處分スヘキ者トス但書面(火ヲ放シテ)トアルハ火ヲ失シテノ誤ニシテ牛馬ヲ放失ト

アルハ誤テ牛馬ヲ逸セシ場合ヲ指サ、ルカト思考致候

○小濱治安廳判事補 (十五年六月廿七日付) 全年八月十六日付

第五條共ニ十二歲未滿ノ者或ハ十二歲未滿ノ者ト十二歲以上十六歲未滿ノ者二人以上通謀シテ共ニ輕重罪ヲ犯スルモ十二歲以

ス

下ノ者ハ到底不論罪ニ歸スル者ナレハ無論刑法第四百四條ノ加等例ヲ比照スルニモ及ハス刑法第七十九條同八十條ニ照シ處分ス可キ義ト心得可然哉

指令第五條伺面明白ナラスト雖モ若シ十二歲以下ノ者ト十六歲以下ノ者ト竊盜罪ノ如キ共犯ニ因リ加重スルトノ旨趣ナルモハ十六歲以下ノ者ハ加重シタル上刑法第八十條ニ依ルモノトス

第八十一條

罪ヲ犯ス時滿十六歲以上二十歲ニ滿サル者ハ其罪ヲ宥恕シテ本刑ニ一等ヲ減ス

第八十二條

瘖啞者罪ヲ犯シタル時ハ其罪ヲ論セス但情狀ニ因リ五年ニ過キサル時間之ヲ懲治場ニ留置スルヲ得

○松江裁判所檢事

(十四年十二月廿八日伺) (十五年一月廿四日付)

第四條第八十二條瘖啞者罪ヲ犯シタル時ハ其罪ヲ論セス

一稟賦又ハ滿十二歲以上ナルモ是非ヲ辨別スルヲ能ハサル時ニ於テ耳聽クヲ得ルモ口言フヲ能ハサルニ至リシ者瘖啞者トスルカ

二滿十六歲ノ後是非ノ辨別アリテ耳聽クヲ得ルモ口言フヲ能ハサルニ至リシ者ハ瘖啞者ト爲スヲ得サルカ

三滿十六歲以上是非ノ辨別アリタル後ト雖モ耳聽クヲ能ハス口言フヲ能ハサルニ至リシ者ハ勿論瘖啞者ト爲ス可キ哉

指令第四條第一項第二項トモ瘖啞者ト爲スヘキモノニ非ス第三項伺ノ通

○仙台始審廳檢事

(十五年一月三十一日質問) (十五年二月十四日回答電報)

刑法第八十二條ノ場合ニハ治罪法第七條四項ニ依リ起訴セサル時被告人ヲ懲治場ニ留置シ又ハ贓物ヲ事主ニ還付スル等ハ何レニテ處分ス可キ哉

回答懲治場ニ留置シ物件ヲ還付スルハ裁判官ノ處分ニ屬ス

不論罪及ヒ宥減輕

第八十三條

違警罪ハ滿十六歲以上二十歲ニ滿サル者ト雖モ其罪ヲ宥恕スルヲ得ス
滿十二歲以上十六歲ニ滿サル者ハ其罪ヲ宥恕シテ本刑ニ一等ヲ減ス十二歲ニ滿サル者及ヒ瘖啞者ハ其罪ヲ論セス

第八十四條

此節ニ記載スルノ外特別ノ不論罪宥恕減輕ハ各本條ニ於テ之ヲ記載ス

○靜岡裁判所檢事 (十四年十二月十七日伺) (十五年一月十三日付)

第三條刑法第八十五條罪ヲ犯シ事未タ發覺セサル前ニ於テ官ニ自首シタル者ハ云々右事發覺トハ其犯罪事件ノ告訴發覺ニ係リタル以上ノ云ヒナルヘシ然レハ被告人ハ發見セスト雖ヒ起訴及ヒ豫審ノ處分ヲ爲スニ因リ是等ノ類ハ減等ノ限ニアラサルヤ將タ事件ノ發覺ニアラス被告人ノ發見ニシテ官未タ誰某タルヲ知ラサル前自首シタルモノナルヤ
同事件ヲ犯シ再ヒ以上自首スルモ法律上明文ナキヲ以テ無論減等スルコトヲ得ヘキヤ將タ再ヒ以上ハ減等ノ限ニアラサルヤ被告人正當ノ事故アリテ自ラ官署ニ至ルコト能ハス依テ其狀ヲ具シ人ヲ遣シテ首スルモノハ固ヨリ自首ノ効アレハ本犯ニ於テ自首スルノ意ナキモ相容認スルコトヲ得ルモノ其犯狀ヲ詳知シ爲メニ告言スルカ如キハ實際間々有之現行法律ニ於テハ是等ノ類モ同シク首免ヲ與フト雖ヒ改正法律ニ依レハ無論自首ノ効ナキモノナルヤ
指令第三條一被告事件ノ發覺シタルモ被告人ノ發覺セサル前ニ於テ自首シタル者ハ減等ス可シ

第二節 自首減輕

第八十五條

罪ヲ犯シ事未タ發覺セサル前ニ於テ官ニ自首シタル者ハ本刑ニ一等ヲ減ス但謀殺故殺ニ係ル者ハ自首減輕ノ限ニ在ラス
司法省ヨリ一殿内訓
刑法第八十五條中ノ發覺トハ其犯人ノ官ニ發覺シタル場合ニ係ハラヌ被害者ニ於テ犯人ノ誰タルヲ確

二再度以上自首スルモノモ亦減等ス可シ
三伺ノ通

○若松始審廳判事 (十五年一月四日請訓) (全年二月六日内訓)

第一條刑法第八十五條ニ罪ヲ犯シ事未タ發覺セサル前ニ於テ官ニ自首シタル者ハ云々ト之レアリ右事未タ發覺セサル前トハ官未タ其犯人ノ誰タルヲ知ラサル前ト云フ義ニ候哉若シ然ラハ失火ノ如キハ多クハ罪蹟明白ニシテ他ノ證明告發ヲ要セサルモノナルヲ以テ社會ニ對シテハ蔽フヘカラサル罪ナリト雖ヒ官未タ其犯人ノ誰タルヲ知ラサル前ニ於テ自首シタルハ未發自首トシ本條ニ依リ減等スヘキモノニ候哉

内訓第一條見解ノ通

第二條右發覺セサル前トハ官ハ勿論社會ニテモ未タ其犯人ノ誰タルヲ知ラサル前ト云フ儀ニ候哉若シ然ラハ失火ノ如キ罪蹟明白ナルモノト雖モ若シ官社會未タ其犯人ノ誰タルヲ知ラサル前ニ於テ自首シタル時ハ矢張未發自首トシ減等スヘキ義ニ候哉
内訓第二條社會ノ知不知ニ關セス官ニ發覺セサレハ本條ニ依リ處分スヘシ

定シタル上ハ官ニ發覺セシト同一ノ者トス此旨爲心得及内訓候也
明治十五年十月四日

第四條右官トハ當路ノ官刑豫審判事檢察官司法警察官ヲ云フモ
ノニシテ其他ノ官衙ハ包含セサル義ト相心得可然哉

若シ然ルモ官吏其職務ヲ行フニ當リ發見シタルモノ則酒造檢査
官檢査ノ際發見シタル酒造犯則民事裁判官審理ノ際發見シタル
犯罪等ノ如キハ豫審判事檢察官司法警察官ニ於テ未タ之ヲ知ラ
スト雖モ已ニ官ニ發覺シタルモノトシ減等ノ限コアラサル義ト
相心得可然哉

内訓第四條見解ノ通但第二項ノ場合ノ如キハ當路ノ官吏ニ發
覺シタルト全視ス可キモノトス

○岡崎輕罪廳判事 (十五年二月廿四日問合)

全年三月十二日回答

第三條刑法第八十五條事未タ發覺セサル前トハ犯事ハ己ニ發覺
スルモ其犯人ハ何人ナルヤ知ラサルニヨリ未タ搜索ヲ爲サハル
場合ヲモ云フモノナルヘシ然ルニ茲ニ夜中現行ノ賭博者三人ア
リ(全夥者其氏)捕吏其二人ヲ縛シ一名ハ現場逃走シタレモ官其
生所氏名ヲ知ラス又容貌ヲ熟知セサルニ付搜索ノ途ナク未タ手
ヲ下タサ、リキ然ルニ其一名數日ヲ經テ悔悟首出スル如キハ本
條ニ依リ未發自首トナスモノナルヤ

回答第三條未發自首ノ限ニアラス

○小倉治安廳判事補

(十五年三月十一日請訓)
全年四月六日内訓

刑法第一編第四章第二節自首減輕ノ法ハ揭ケテ第八十五條以下
ニアリ其自首ト稱スルモノ代首ヲ許スノ明文ヲ視ズ若シ犯罪罪
ノ未發前ニ於テ真心悔悟スルモ躬自ラ出首スル能ハスタメニ親
屬又ハ隣友等ヲシテ官署及ヒ財産ニ對スル罪ニシテ被害者ニ首
服スルカ如キハ自首スル者ヲ以テ論スル勿論ナルヘシト雖モ其
或ハ本犯ノ受託ナキ子孫又ハ妻ノ犯罪ヲ其祖父母父母又ハ夫ヨ
リ復タ祖父母父母夫ノ犯罪ヲ其子孫又ハ妻ニテ代首告言スルカ
如キハ自首ノ効驗ナキモノニ候哉

内訓第二條本人自ラ首出シ又ハ代人ヲシテ首出スルモノハ自
首減輕ヲ聽ス其他ノ場合ハ自首減輕ノ限ニ在ラス

(理由) 第二條ハ疾病其他不得止事故アリ躬自ラ首出スルコ
ヲ得サルノ情狀明白ナルキハ代首ヲ許スモ妨ケナシト雖モ

此他ノ場合又ハ本人受託ナキニ其親屬ニ於テ代首スル如キ
ハ固ヨリ法律ノ精神ニ背クモノトス

○浦和始審廳檢事

(十五年四月六日問合)
全年全月廿一日回答

自首減輕

第四條公判々事又ハ豫審判事若クハ檢事又ハ司法警察官被告人ヲ訊問スルニ當リ被告人未タ發覺セサル罪ヲ白狀シタルキハ自首減輕ノ例ニ照シテ處分スヘキヤ否

回答第四條御見解ノ通

第五條已決ノ囚徒逃走シタル者ハ自首減輕ヲ許サ、ル方當然タルヘキヤ何トナレハ事已ニ發覺スル者ハ其自首ノ効ナキハ法律ニ於テ明カナレハ也

回答第五條罪人ト并發シタルキハ御見解ノ通

○滋賀縣 十五年四月廿二日伺。今年五月二日付

軍人軍屬役限内老疾收贖及ヒ存留養親ノ義ニ付陸軍省ヨリ太政官ヘ伺ニ對シ御裁令ノ旨ニ依リ常人ニ付テモ右ニ照準シ處分スヘキ旨本年丙第十三号ヲ以テ御達相成候右精神ニヨレハ舊法ニ於テ常人罪ヲ犯シ新法實施后自首シタルモノモ全樣其減免法ハ刑法第三條新舊法ヲ比照シ輕キニ從テ處斷スヘキ乎

指令新舊ノ法ヲ比照シ新法ニ依ルキハ新法ノ自首法ヲ用ヒ舊法ニ依ルキハ舊法ノ自首法ヲ用ヒ輕キニ從ヒ處斷スヘキモノトス

○滋賀縣警部 (十五年五月一日質問) (今年全月二日回答)

第三條舊法ノ罪ヲ犯シ新法實施ノ後ニ至リ之ヲ自首スルモノハ尙ホ舊法ニ因リ自首全免ヲ與ヘ可然哉將タ新法ニ因リ自首減輕スヘキモノニ候哉

回答第三條前段御見込ノ通

○山田輕罪廳檢事 (十五年三月十五日請訓) (今年五月廿二日内訓)

第一條地券書換犯則ハ自ラ申出ルニ非サレハ發覺セサル罪ナルヲ以テ從來首免ヲ與ヘサルモノナリト雖モ刑法第五條二項ニ若シ他ノ法律規則ニ於テ別ニ總則ヲ掲ケサルモノハ此刑法ノ總則ニ從フト明記シアリテ首免ヲ與ヘサルノ特例ナキニ依リ地券犯則モ亦自首減輕ヲ與フヘキ乎

内訓第一條見解ノ通

○山形輕罪廳判事 (十五年六月十日請訓) (今年全月廿八日内訓)

第二項全法第八十五條ニ未タ發覺云々トアル其發覺トハ社會ニ發覺スルニアラスシテ行政司法ノ別ナク局長役場ニ至ル迄ヲ官トナシ之ニ發覺スルヲ云ヒタルモノナル哉

内訓第二項見解ノ通但官トハ豫審裁判官檢察官司法警察官ニ

限ル儀ト心得ヘシ

(理由) 第二項ハ其犯罪事件ニ關係スヘキ官ニ限ル者ト定メサレハ不都合ナリ

○秋田始審廳檢事 (十五年四月十八日請訓)

(全年七月廿四日内訓)

第一條刑法第五條ニ曰ク此刑法ニ正條ナクシテ云々各其法律規則ニ從フ若シ他ノ法律規則ニ於テ別ニ總則ヲ掲ケサル者ハ此刑法ノ總則ニ從フトアリ他ノ法律トハ現今行ハル、諸罰則條例規則等總テ刑名ヲ掲ケル單行法律規則ヲ稱スルノ律意ト思考仕候果シテ然ラハ酒類稅則等ニ違背シタル者未タ官ニ發覺セサル前自首スル者アルキハ即チ刑法第五條第二項ニ依リ總則第八十五條第八十九條ニ照ラシ輕減スルハ至當ノ儀ト解釋候得共諸罰則條例規則等ハ大抵加重スヘキモノニアラサルニ依リ特ニ輕減ノニ總則ニ從フハ平衡ヲ得サルモノ、如シ右ハ如何相心得可然哉内訓第一條諸罰則違犯者自首スルキハ刑法ニ照シ輕減ヲ爲ス可キ者トス

(理由) 他ノ法律規則ニ於テ別ニ總則ヲ掲ケサル者ハ刑法ノ總則ニ從フ可キハ刑法第五條ニ載セテ明文アリ舊法ノ自首

ハ免罪ニ歸シタルモ新法ノ自首ハ其罪ヲ免スルニ非スノ只一等ヲ減スルノミナレハ稅則ノ効力ヲ減縮スルニ至ラス却テ之レカ爲メ自首ヲ促シ科稅ノ主意ヲ全フスルニ至ルヘシ

○弘前輕罪廳檢事 十五年七月廿二日伺。全年九月五日內訓

第 條 甲姓ナル者アリ乙姓ヨリ金數百圓ヲ借用シ券書ヲ交付シ然ルヲ該券書ハ印紙ヲ貼付セサルヲ以テ甲姓ヨリ屢々印紙貼用ノ事ヲ請フト雖モ乙姓事ニ托シテ遷延シ後チ甲姓自ラ相當印紙貼用シ裁判所ニ訴出ツルモノアリ如斯モノ或ル舊裁判所例ニ因レハ其依據スル何ノ理由ニ基クテ知ラスト雖モ (舊法自首條) 乙姓ノ如キ其訴出スル者テ不問或ハ免訴ノ言渡ヲ其單ニ甲姓ノミヲ罰スルノ例比ニアリ若シ此不問ニ付スルノ裁判例チシテ適正ノ者ト爲シ乙姓チ不問ニ付スルノ理アリトスルハ何ソ獨リ乙姓ノミナラス併セテ甲姓ニモ及フヘキ者ナリ何トナレハ契約ナルモノハ固ヨリ兩個ノ意旨相ヒ合同スルヨリ成立スルモノナレハ其券書ニ印紙ヲ貼用セサルモ兩個ノ意旨相合同シテ受授スルモノト看做サ、ルヲ得ス是レ其兩個合同スルニアラサレハ違犯スル能ハサルノ體質ニ係ルヲ以テ也如此合同性質ニ係ル者ナル

自首減輕

カ故ニ乙ハ自首スレハ甲モ自首スルト一様ノ効力ヲ有スルカ如ク因テ乙ヲ不問ニ付スル時ハ併セテ甲ヲモ不問ニ付スル儀ト可心得乎

内訓第一條契約者ノ一人自首スルモ他ノ一人ニ其効ヲ及サス但裁判所ニ訴出ツルヲ以テ自首ト看做ヲ得ス

第二條前條乙姓ノ如ク訴出スルモノ果シテ舊法ニ於テ自首ノ恩典ヲ與フルモノナリトモハ新法實施前ニ無印紙ノ證書ヲ受授シ新法實施後ニ印紙ヲ貼用シ訴出スル時ハ刑法第三條第二條ニ因リ其利益アル舊法ノ自首條ニ因ルモノニシテ新法ノ自首條ニ因ラサルモノト可心得乎

内訓第二條證券印紙犯則其印紙ヲ貼用セサル間ハ何時迄モ犯罪消滅セサルニ付新法實施後自首者アルモハ新法ノ自首法ニ依ルヘシ

○新瀉裁判所新發田支廳詰檢事 (十四年九月七日講訓)

第二十六條刑法第三百二十六條以下ニ掲クル脅迫罪其他告訴ヲ竣テ其罪ヲ論スヘキ種類ノ行爲アルモノ其不良ノ所爲タルヲ悔悟シ官ニ自首シタル場合ニ於テハ被害者未タ告訴ナキ時ハ元ヨ

リ其自首ハ無効ノモノナリト雖モ此自首ヲ棄却シタル後ニ在テ被害者告訴シ來ル時ハ前ニ自首シタルヲ以テ犯人ハ自首減輕ヲ與フヘキモノニ候哉又ハ告訴以前ニ爲シタル自首ハ其効ナキモノト相心得可然哉

内訓第二十六條脅迫罪等事已ニ發覺シタルモノハ刑法第八十五條ヲ引用スル限ニアラス

第二十八條刑法第三百八十條ニ掲クル強盜ニ依テ死ニ至ラシメシ者ノ如キ其死ニ至ラシメタル原由全ク謀故殺ニ係ラサルハ自首減輕ヲ與ヘヘキモノト相心得可然哉

内訓第二十八條凡強盜人ヲ死ニ致スモノ謀殺ノ情ナシト雖モ故殺ニ出サルモノ無キニ似タリ伺出中ニ原由全ク謀故殺ニ係ラサル云々有リ今其事實有之タル上詳細更ニ申請スヘシ

○弘前始審廳檢事 十五年九月十九日伺。 全年十月十三日付刑法第八十五條罪ヲ犯シ事未タ發覺セサル前ニ於テ官ニ自首シタル者及ヒ其他各本條中ニモ官ニ自首シタル者ノ明文アリ右官トハ裁判所警察署及ヒ郡區戸長ノ役場其他司法警察ノ事務ヲ行フノ權アル官衙ニ自首シタル者ハ其自首減輕ヲ與ヘラレ或ハ

自首減輕

郵便犯則者ノ郵便局ニ自首シ盜伐木者ノ山林事務所ニ自首シタルカ如キハ其第八十七條中被害者ニ首服シタル者ノ例ニ準シ自首減輕ヲ與ヘラル、ノ効チ有スルモノ乎將タ其自首ノ効チ有スルノ官及ヒ其被害者ト稱スル者ニハ別段ノ制限有之者コ候哉
 指令伺之趣刑法第八十五條ニ官トアルハ豫審判事檢察官司法警察官ヲ謂フ又第八十七條ニ被害者トアルハ刑法第二編第九章第三節及ヒ第三編第二章ニ記載シタル罪ニ因リ害チ受ケタルモノヲ云フ故ニ郵便犯則財產ニ對スル罪ニアラサルニ因リ郵便局ニ首出スルモ第八十七條ニ依リ處分スルノ限ニアラス

○彦根始審廳檢事 十五年四月七日請訓。 全年全月廿七日付
 刑法第八十六條ニ自首シテ其贓物ヲ還給シ損害ヲ賠償シタル時ハ自首減輕ノ外仍ホ本刑ニ二等ヲ減ス云々ト有之右自首ノ際贓物ヲ還給シ損害ヲ賠償シタル者ニ限り減輕スヘキモノナルカ將タ豫審又ハ公判ノ言渡シアル迄ニ還給賠償シタルモノモ本條ニ依テ減輕スヘキモノナルカ

指令伺ノ趣自首ノ際還給賠償シタル者コ限ル但自首ノ際還給賠償ノ約ヲ爲シ被害者之ヲ承諾シタルモノ亦本文ノ通
 (理由) 該條ノ減輕ハ自首ノ際併セテ贓物ヲ還給シ損害ヲ賠償シタルモノニ限ルヘシ裁判言渡前其還給等ヲ爲シタルモノハ只酌量減輕ヲ爲スコト得ルニ止ルノミ抑自首ノ件ニ限リ贓物ヲ還給スル等ノモノニ對シ法律上ノ減輕ヲ與フル所以ノモノハ自首ノ際併セテ還給等ヲ爲スハ其情甚タ原諒スヘク其損害モ亦微ナルニ因ル若シ裁判言渡迄ハ還給等ヲ爲スキハ仍ホ此減輕ヲ與フルノ理アリトセハ事實ニ付テノ確定裁判アルマテハ仍ホ減輕セサル可カラス果シテ然レハ自首ト還償トノ間甚タ相密接セス自首ニ限り法律上ノ減輕ヲ

自首減輕

第八十六條

財產ニ對スル罪ヲ犯シタル者自首シテ其贓物ヲ還給シ損害ヲ賠償シタル時ハ自首減輕ノ外仍ホ本刑ニ二等ヲ減ス其全部ヲ還償セスト雖モ半數以上ヲ還償シタル時ハ一等ヲ減ス

與フルノ理由甚ダ解スヘカラス但自首ノ際被害者ト他日還
給賠償スヘキノ約ヲ爲シタル者ハ亦減等ヲ與フヘキ者トス

○新潟裁判所新發田支廳檢事 (十四年九月七日請訓)
十五年四月廿七日內訓

第十二條刑法第八十六條ニ自首シテ其贓物ヲ還給シ損害ヲ賠償
シタル者ハ自首減輕ノ外尙ホ二等ヲ減スト有之然ルニ例ヘハ人
ヲ傷シテ財物ヲ奪取スル者官ニ自首シ贓物ノ全部ヲ還償セント
スルカ如キ場合ニ於テハ一切自首減等ノ減輕ヲ與ヘサルモノニ
候哉

內訓第十二條刑法第八十六條ハ全ク財産ニ對スル罪ヲ犯シタ
ルモノニ係リ書面ノ如キ財産身体双方ニ對スル犯罪ノ場合ニ
ハ適用セサルモノトス

○總代治安廳判事 (十五年四月十八日請訓)
十五年五月十日內訓

第一條茲ニ財産ニ對スル未遂犯者自首スルモノアラン刑法第百
十二條ニ照ラシ今假リヨ己ニ遂ケタルモノ、刑ニ一等ヲ減スル
モノト做シ自首スルヲ以テ刑法第八十五條ニ從ヒ又一等ヲ減シ
而シテ財産ニ對スル罪ヲ犯シタルモノ自首シテ其贓物ヲ還給シ
損害ヲ賠償シタル時ハ已ニ遂ケタルモノト雖モ仍ホ本刑ニ二等

ヲ減セラル、一ハ掲クテ刑法第八十六條ニアリ況シテ未遂犯ノ
如キ其贓物犯者ノ手ニ入ラサルモノニ於テハ無論同條ニ依リ更
ニ二等ヲ減シ通シテ四等ヲ減スヘキヤ別ニ明文モ無之ニ付聊カ
疑義ヲ生シ候

內訓第一條實際還給スヘキ財物ヲ得サル未遂犯者自首シタル
ト雖モ刑法第八十六條ヲ適用スルコトヲ得ス

○敦賀治安廳判事補 (十五年六月十二日請訓)

刑法第八十七條ニ財産ニ對スル罪ヲ犯シ被害者ニ首服シタル者ハ官ニ自首スルト全ク前二條ノ例ニ照シ處斷スト右財産ニ對スル罪トハ刑法第三編第二章以下ニ記載アル罪ノミヲ指稱シタルモノナル歟果シテ然ラハ全第二編第四章第四節ニ記載アル私印私書ヲ偽造スル罪ヲ犯シ (假令ハ第二節十條ノ權利義務ニ關スル請人トナシ有合ノ印ヲ) (ル即チ借金証書等ニ餘人ノ名ヲ詐リ以テ偽押シタル類) 命品ヲ得タル後被害者ニ首服スルモ八十七條ニ依リ自首減輕ノ限ニ非サル歟

内訓請訓ノ趣刑法第三編第二章以下ニ記載シタル罪ヲノミ指シタルモノニ非ス刑法中財産ニ對スル罪ヲ犯シタル者ハ總テ包含ス但私書偽造ノ罪ハ刑法第八十七條ニ依ル限ニ在ラス

○前橋輕罪廳檢事 (十五年十月廿八日付)

第三條刑法第四百二條第四百五條ノ犯者ノ如キハ單ニ財産ノミ對スル罪ニアラサルモ被害者ニ首服セシキハ仍ホ刑法第八十七條ヲ適用ス可キモノカ
指令第三條伺ノ通

第八十七條

財産ニ對スル罪ヲ犯シ被害者ニ首服シタル者ハ官ニ自首スルト同ク前二條ノ例ニ照シテ處斷ス

第八十八條

此節ニ記載スルノ外
本條別ニ自首ノ例ヲ
掲ケタル者ハ各其本
條ニ從フ

第三節 酌量減輕

第八十九條

重罪輕罪違警罪ヲ分
タス所犯情狀原諒ス
可キ者ハ酌量シテ本
刑ヲ減輕スルヲ得
法律ニ於テ本刑ヲ加
重シ又ハ減輕ス可キ
者ト雖モ其酌量ス可
キ時ハ仍ホ之ヲ減輕
スルヲ得

第九十條
酌量減輕ス可キ者ハ
本刑ニ一等又ハ二等
ヲ減ス

○高知裁判所長判事(十四年五月十八日質問)

第二拾一條刑法第九拾一條先キニ重罪ノ刑ニ處セラレタルモノ
再犯重罪ニ該ル時ハ本刑ニ一等ヲ加フ

全法第九十二條先ニ重罪輕罪ノ刑ニ處セラレタル者再犯輕罪ニ
該ル時ハ本刑法ニ一等ヲ加フ

按スルニ新法舊法(新律改定)ノ別ナク先キニ刑ノ言渡ヲ受ケタ
ル犯罪者ニシテ又罪ヲ犯スモノハ前兩條ニ依テ加等スヘキモノ
、如シ然ルニ舊刑法中未タ罪ニ種類(重罪)アルヲ見ス果シテ然
レハ舊刑法ニ依テ刑ノ言渡ヲ受ケタル罪犯者ハ唯其罪ノ原質假
令ハ強盜ヲ爲シタル者ヲ強盜竊盜ヲ爲シタル者ヲ竊盜罪トシ之
ヲ重罪トモ輕罪トモナサ、ルモノト見解ヲ下シタリ若シ此見解
ナシテ的當ナリトモハ舊刑法ニ依テ刑ノ言渡ヲ受ケ又再ヒ全罪
ヲ犯スモノハ新刑法之ヲ加等セサルノ義乎

回答第二拾一條舊法ニハ重罪輕罪等ノ區別ナキヲ以テ新法實
施ノ時ニ至リテハ必ズ別ニ其區別ノ制定アルヘシ何トナレハ
此區別ヲ定ムルハ獨リ再犯加等ノ時ノ爲メナラス裁判所ノ管
轄ヲ定ムルニ必要ノモノニシテ若シ此區別ヲ定メサレハ新法

第五章再犯加重

第九十一條

先ニ重罪ノ刑ニ處セ
ラレタル者再犯重罪
ニ該ル時ハ本刑ニ一
等ヲ加フ

再犯加重

實施前ノ犯罪ハ竟ニ裁判ヲ爲スル能ハサルニ至ランカ
 ○金澤裁判福井支廳檢事 (十四年十二月廿八日伺) 十五年一月十四日付
 新法第九十一條先ニ重罪ノ刑ニ處セラレ再犯重罪ニ該ル時ハ本
 刑ニ一等ヲ加フトアリ然ルニ舊法重罪ノ刑ニ處セラレタル者新
 法實施ニ至リ再犯重罪ニ該ル時ハ本條ニ依リ加等スヘキノ處舊
 典ニ於テハ輕重罪ノ種類區別無之死刑ヲ除クノ外總テ懲役ニ處
 シ單々刑期ニ長短ノ差アルノミ然レハ則前顯ノ場合ニ於テハ懲
 役何年以上ニ該ル者ハ重罪トナスノ標準無之候テハ新法實施ニ
 臨ミ再犯重罪ニ該ル者加等方差支候右ハ如何相心得可然哉
 指令伺ノ趣新法實施前ニ罪ヲ犯シタル者其實施後再ヒ罪ヲ犯
 スト雖モ本刑ニ加重セス

第九十二條
 先ニ重罪輕罪ノ刑ニ
 處セラレタル者再犯
 輕罪ニ該ル時ハ本刑
 ニ一等ヲ加フ

○熊谷始審廳檢事 十五年一月十一日伺 全年全月廿七日付
 第二條客年賭博ヲ犯シタルモノ新法ノ最下期限ナルヲ以テ重
 禁錮一月ニ處シタル者裁判確定ノ後更ニ賭博ヲ犯シタル時ハ再
 犯ヲ以テ論スヘキ哉果ソ然レハ舊法ニ於テ賭場開張ノ利ヲニ處
 圖ルモノハ犯人ト同罪タルヲ以テ新法ノ重キ三月以上ノ重禁錮
 スルヲ得スノ舊法ノ輕キ懲役八十日ヲ重禁錮八十日ニ換ヘ處分
 セサルヲ得ス是亦更ニ罪ヲ犯シタルキハ再犯ヲ以テ論シ可然哉
 指令第二條新舊ノ法ヲ比照シ新法ノ輕キニ從ヒ處斷シタル者
 及ヒ舊法ノ輕キニ從ヒ處斷シタル者ト雖モ新法實施前ノ犯罪
 ハ新法ニ於テ總テ犯數ニ計ヘス
 ○富山始審廳 十五年二月廿二日伺 全年三月九日付
 此刑法ニ於テ先キニ輕罪ノ刑ニテ罰金ノモノ言渡ヲ受ケ再ヒ禁
 錮ノミ及ヒ罰金ノモノ刑ニ該ル (假令ハ刑法第百九條失火シ
 ラレタルモノカ止裁判確定シテ再ヒ刑) (テ人ノ財産ヲ燒キ罰金ニ處セ
 法第二百五十六條等ノ罪ヲ犯シタル類) キハ該條ヲ適用スルノ
 限ニアラサルヤ
 指令第二條罰金モ亦輕罪ナレハ刑法ニ明文ナシト云フ可ラス

再犯加重

刑法第九十二條ニ依リ再犯ヲ以テ論シ一等ヲ加ヘ處斷スル儀ト心得ヘシ

(理由) 右第二條先ニ罰金ノミヲ刑ニ處セラレタル者ト雖モ罰金ハ即輕罪ナレハ明文ナシト云フ可カラズ第九十二條ニ依リ再犯ヲ以テ論シ可然者トス

○彦根始審廳判事 十五年三月四日請訓 全年四月六日内訓 第三條刑法第九十二條先ニ重罪輕罪ニ該ル時ハ本刑ニ一等ヲ加フハアリ假令ハ重罪ノ刑ニ處セラレ次ニ違警罪ノ刑ニ處セラレ三度ハ輕罪ニ該ル時ハ加等スヘキ明文ナキニ似タレモ猶再犯ト爲シ本罪ニ一等ヲ加フル乎

内訓第三條見解ノ通

○米澤始審廳判事 十五年四月六日伺 全年全月廿日内訓 茲ニ甲乙二人ニテ明治十四年十二月某日竊盜ヲ爲シタル者アリ而シテ甲(平民)ハ再犯ニシテ乙(平民)ハ初犯且ツ從犯ナリ贓金ハ二十圓ト假定ス

右甲乙ヲ處分スルニハ刑法第三條後項及ヒ明治十四年第八十一號布告ニ基キ新舊ノ法ヲ比照シ其輕キニ從テ處斷スヘキモノ也

第一條甲ハ舊法ニ於テハ竊盜贓金二十圓徵役八十日ノ處再犯ナルヲ以テ再犯加等罪例ニ照シ一等ヲ加ヘ徵役九十日新法ニ於テハ竊盜再犯ヲ以テ第九十二條ニ依リ一等ヲ加ヘ又二人ニテ犯シタルモノナルヲ以テ第二百六十九條ニ依リ一等ヲ加ヘ則第二百六十六條ニ一等ヲ加フルヲ以テ二月十五日以上五年以下ノ重禁錮トシ比照スル儀ト心得可然哉

第二條乙ハ舊法ニ於テハ竊盜初犯贓金二十圓懲役八十日ノ處從犯ナルヲ以テ一等ヲ減シ懲役七十日新法ニ於テハ二人コト竊盜ヲ爲シタルモノナルヲ以テ第三百六十九條ニ依リ即第三百六十六條ニ一等ヲ加フルヲ以テ二月十五日以上五年以下ノ重禁錮トシ比照スル儀ト心得可然哉

内訓第一條第二條舊法ヲ犯シタル者ニハ新法ノ再犯加重例ヲ適用スルヲ得ス其他見解ノ通

(理由) 右審按スルニ客年第八十一號公布第十二條ニ新舊法ヲ比照スルニハ各其本法ニ照シ加減シタル者ヲ以テ本刑トナストアレハ新法ニ付テハ再犯加重ヲ爲サ、ル可カラサルカ如クナレモ舊法ニ於テハ重罪輕罪ノ區別ナキヲ以テ加重

再犯加重

ノ法ヲ適用スルニ由ナシ殊ニ客年中ノ犯罪ハ總テ犯數ニ計
ヘストノ先例アリ尤モ本按新舊法比照ノ場合トハ稍異ナリ
ト雖モ其理ハ同一ナルニ付舊法ヲ犯シタル者ニハ總テ新法
ノ再犯加重例ヲ適用スルヲ得サルモノトス其他ノ加重減
輕ハ客年第八十一号公布ニ從ヒ各本法ニ照シ加減ヲ爲シタ
ル上新舊法比照ニ可キ者トス

○米澤始審廳判事 十五年五月三日請訓 全年全月廿日內訓
本年四月六日付ヲ以テ竊盜犯(甲)ニ對シ加重例比照ノ儀相伺候
處四月二十日付第二三五七号ヲ以テ內訓セラレタリ其訓曰「
第一條第二條舊法ヲ犯シタル者ニハ新法ノ再犯加重例ヲ適用ス
ルヲ得ス其他ハ見解ノ通」ト右ハ伺ヒタル旨要ハ特リ再犯加
重例而已ニ在ラスト二人以上共ニ犯シタル者ニ對シテモ加重法
即刑法三百六十九條ヲ適用スルカ否ヤノ点ニ在リト然ルヲ御
內訓ニ由テ考量スルハ特ニ再犯者而已該禮ヲ須ヒスシテ二人
以上共ニ犯シタル者ニ於テハ見解ノ通ナリト相見ヘ候右ハ舊法
ノ首從ト新法ノ正從ト法律上異ナルアルヲ以テ無論等シク加重
スヘキ者ニ在ラサラン平果シテ然レハ御內訓再犯ノ二字蓋シ符

ナラン歟ト思量仕候依テハ舊法ヲ犯シタルモノニ對シテハ凡テ
新法ノ加重例ヲ適用スルヲ得サル儀ト心得可然哉

內訓加重法新舊比照法請訓ノ趣新法ニ付テハ刑法第三百六十
九條其他ノ加重例ニ隨テ各其加重シタルヲ以テ本刑トシ之ヲ
舊法ニ比照シ輕キニ從テ處分ス然レモ舊法ニ於テハ重罪輕罪
ノ區別ナキニ付舊法ヲ犯シタル者ニ新法ノ再犯加重例ヲ適用
スルヲ得ス因テ本年四月廿日附內訓ノ通會得スヘシ

○山田始審廳判事 (十五年四月二十二日請訓)
全年全月廿八日回答

第三條已決罪表中犯數ト區畫ニハ仮令再犯ノ者タリトモ初犯ヲ
以テ論シタル者ハ總テ初犯ト記シ可然哉例ヘハ初メ輕罪ノ刑ニ
處セラレ后又重罪ヲ犯シタルモノハ加等セサルヲ以テ初犯ト記
シ又客年中竊盜ノ刑ニ處セラレ本年中又竊盜罪ヲ犯シタルモノ
ハ總テ初犯ヲ以テ論スルカ故ニ矢張初犯ト記スル類カ

內訓第三條御見込ノ通

○平始審廳檢事、十五年九月九日請訓 全年十月九日內訓
第六條治罪法第七十六條第九十二條第九十三條第二百
九十六條第二百九十七條ニ依テ處斷セラルル又ハ處斷スヘキ者後

再犯加重

ニ他ノ罪ヲ犯シ又ハ前ニ他ノ罪ニ依リ處斷ヲ受ケタル者ト雖モ
刑法再犯加重ノ例ヲ適用セサルヤ
内訓第六條見込ノ通

○福島裁判平支廳 十四年十二月五日付。全年二月七日内訓
第十六條阿責ニ處セラレタル者再ヒ罪ヲ犯シ刑法ニ依リ處斷ス
ヘキト雖モ再犯ヲ以テ論セサルカ
内訓第十六條總テ再犯ヲ以テ論セス
第十七條現行法ニ依リ處罰セラレタル私娼及ヒ全罪ヲ犯シ刑法
ニ依リ處斷スヘキトハ違警罪ノ再犯ヲ以テ論スヘキ哉
内訓第十七條總テ再犯ヲ以テ論セス

第九十三條

先ニ違警罪ノ刑ニ處
セラレタル者再犯違
警罪ニ該ル時ハ本刑
ニ一等ヲ加フ但一年
内再ヒ其違警罪裁判
所ノ管轄地内ニ於テ
犯シタル時ニ非サレ
ハ再犯ヲ以テ論スル
コト得ス

○山田始審廳判事

(十四年十二月十七日請訓)

刑法第三條法律ハ頒布以前ノ犯罪ニ及ホスヲ得スト有之然ラハ則初犯再犯新法實施前後ニ跨ルモノ、如キハ實施後ハ初犯ヲ以テ論スヘキヤ若シ大赦前ノ犯罪并再犯ヲ以テ論スヘカラサル犯罪ノ外ハ總テ再犯加重スヘキモノトセハ舊法ノ懲役ハ何年ヲ以テ輕重罪ノ分界ヲ立テ可然哉

内訓前段見解ノ通

○静岡始審廳檢事

(十五年一月十九日請訓)

從前加重シテ罪ヲ論ス可キ者再犯ノ時前科ヲ包藏シ初犯ト偽リ一旦再犯ノ刑ヲ適レ服役中前科アルヲ發覺シタルハ本犯自首ノ否ニ拘ハラヌ更ニ加重ノ刑ヲ科シ候義ハ實際問々有之候所自今右等ノ者アリテ之ヲ新法ニ照スニ正條ヲ見ス固ヨリ第二百二條數罪俱發例ニ依リ所斷スヘキモノニアラサレハ第二條ノ明文ニ從ヒ初犯トシテ受ケタル裁判確定後ハ不問ニ置クヘキ歟先ニ受ケタル前科ヲ消滅ノ限ニアラス加之再犯加重シテ罪惡ヲ懲戒スル法律ノ精神ニモ悖ル事ニ付不問ニ付タルカ如キ者万無之ト信シテ疑ハズ然レハ檢事ハ何時ヲ問ス發覺スレハ起訴之ヲ更ニ

第九十四條

再犯加重ハ初犯ノ裁判確定ノ後ニ非サレハ之ヲ論スルヲ得

再犯ノ刑ヲ求ムルハ勿論ト相心得候得共其刑ノ適用ヲ求ムルニ當リ刑法何レノ條ニ適用スルモノヤ決兼候付御内訓ヲ仰候内訓再犯ヲ初犯ト詐リ刑ヲ受ケシ者所分方請訓ノ趣ハ更ニ其刑ノ適用ヲ求ムルニ及ハス

(理由)前科ヲ包藏シ初犯ノ刑ヲ受ケタル者ト雖モ其裁判確

定シタル上ハ懸斷スルコトヲ得サルハ勿論也

○彦根始審廳判事

(十五年三月四日請訓)

第四條刑法第九十四條ニ再犯加重ハ初犯ノ裁判確定ノ後ニ非レハ之ヲ論スルコトヲ得スニアリ若シ所犯ノ罪上告ニ係ル時ハ再犯ノ罪ハ初犯ノ罪確定スルニ至ル迄裁判ヲ停止スヘキハ勿論ナルヤ

内訓第四條初犯ノ罪ニ付上告中更ニ犯シタル罪ハ數罪俱發ヲ以テ論シ再犯ト爲ヲ得ス

○仙臺始審廳檢事 (十五年一月六日閣令) 全年一月十日回答電報

逃走シタル懲役終身刑ノ者捕縛シタル時外ニアツテ重輕罪アラハ其重輕罪ハ何ノ名條ニヨリ處分スヘキヤ又終身刑ノ懲役人ハ無期ノ囚徒ト見做シ監獄則第百九條ニヨリ獄吏ニ引渡シ然ル可キ哉

回答逃走シタル懲役終身ノ者外ニ在テ犯シタル重輕罪ト雖モ刑法各本條ニ依リ處分シ直ニ獄吏ニ引渡スヲ得サルモノトス

○熊谷始審廳檢事 (十五年二月七日質問) 全年二月十七日回答

第三舊律中懲役五年以上ノ刑ニ處セラレタル者新法實施ノ後右服役中又ハ五年以上ノ罪ヲ犯シタルハ舊法ニ從ヒ拘役四年ヲ加フヘキヤ又ハ刑法第九十五條ニ從ヒ處分スヘキヤ

回答第三項ハ新法ニ依リ處斷シ服役ノ前後ハ刑法第九十五條ニ依リ處分シ可然ト思考ス

○宮城縣 十五年六月三十日伺。全年八月四日付内務省合議已決囚外役先ニ於テ違警罪ヲ犯シ法衙ニ於テ處刑以言渡ヲ受ケタル罰金ハ該囚所持金或ハ傭工錢ノ内與フヘキ領置金ノ内ヨ

第九十五條

刑期限内再ヒ罪ヲ犯スニヨリ刑ヲ宣告シタル時ハ先ツ其定役ニ服ス可キ者ヲ執行シ定役ニ服セサル者ヲ後ニス若シ初犯再犯共ニ該ル時又ハ共ニ定役ニ服セサル刑ニ該ル時ハ先ツ其重キ者ヲ執行ス
罰金科料ニ該ル者ハ順序ニ拘ハラス各之ヲ徵取ス

リ納完セシメ拘留ノ如キハ有期刑ノ者本刑満期ノ後之レヲ執行セシムル義ニ可有之哉果シテ然ルハ無期刑ノ者ニ於テハ如何取計可然哉

指令書面罰金ハ本犯所持金ノ内ヨリ納完セシムヘシ其他刑法第九十五條ノ旨意ヲ了解シ相當處分可致事

第九十六條
 陸海軍裁判所ニ於テ
 判決ヲ經タル者再ヒ
 重罪輕罪ヲ犯シタル
 時ハ初犯ノ非常律ニ
 從ヒ處斷シタル者ニ
 非サレハ再犯ヲ以テ
 論スルヲ得ス

第九十七條
 大赦ニ因テ免罪ヲ得
 タル者ハ再ヒ罪ヲ犯
 スト雖モ再狀ヲ以テ
 論スルヲ得ス

第九十八條
 大赦ニ因テ免罪ヲ得タル者ハ再ヒ罪ヲ犯スト雖モ再狀ヲ以テ論スルヲ得ス

○滋賀縣 十五年一月十七日伺。全年二月七日付

第六條第十九條大赦ニ因テ免罪ヲ得タル者ハ再ヒ罪ヲ犯スト雖モ再狀ヲ以テ論スルヲ得ス
 然ラハ若シ他日大赦アリテ其已前ニ處斷濟ノ前科モ亦犯數ニ算入スルヲ得ルヤ如何
 但舊法ニ於テ處斷ヲ受ケタル前科アルモ新法ニ併セ犯數モ算入スルヲ得サルヤ
 指令第六條伺ノ趣大赦アリシ後ニアラサレハ豫メ指令ニ及ヒ難シト雖モ何々ノ罪ト指定シテ大赦アリタルハ大赦ニ係ラサル罪ハ勿論犯數ニ計フヘキ儀ト心得ヘシ
 但書大赦ニ因ラサル儀ナレハ伺ノ通

第九十八條
三犯以上ノ者ト雖モ
其加重ノ法ハ再犯ノ
例ニ同シ

○福島裁判所平支廳檢事
十五年二月七日内訓
第十五條刑法各本條ニ記載スル特別ノ加重減輕及ヒ從犯未遂犯
罪ノ減輕等全時ニ爲スヘキハ通シテ減輕スヘキヤ又ハ各自減輕
ス可キ哉
○新案
十五年二月七日内訓
今案二月七日内訓
其ノ旨ニ依リテ
○新案
十五年二月七日内訓
今案二月七日内訓

第九十九條
犯罪ノ情狀ニ因リ總
則ニ照シ同時ニ本刑
ヲ加重減輕ス可キ時
ハ左ノ順序ニ從テ其
刑名ヲ定ム但從犯及
ヒ未遂犯罪ノ減輕等
其各本條ニ記載スル
特別ノ加重減輕ハ其
加減シタル者ヲ以テ
本刑ト爲ス
一 再犯加重
二 宥恕減輕

第六章 加減順序

第九十九條

○福島裁判所平支廳檢事
十五年二月七日内訓
第十五條刑法各本條ニ記載スル特別ノ加重減輕及ヒ從犯未遂犯
罪ノ減輕等全時ニ爲スヘキハ通シテ減輕スヘキヤ又ハ各自減輕
ス可キ哉
○新案
十五年二月七日内訓
今案二月七日内訓
其ノ旨ニ依リテ
○新案
十五年二月七日内訓
今案二月七日内訓

第九十九條
犯罪ノ情狀ニ因リ總
則ニ照シ同時ニ本刑
ヲ加重減輕ス可キ時
ハ左ノ順序ニ從テ其
刑名ヲ定ム但從犯及
ヒ未遂犯罪ノ減輕等
其各本條ニ記載スル
特別ノ加重減輕ハ其
加減シタル者ヲ以テ
本刑ト爲ス
一 再犯加重
二 宥恕減輕

三百首減輕
四酌量減輕

キヤ第三百二條ニ依リ加重シタル刑期ノ四分ノ一ヲ第四百十條ニ依リ加重シ又ハ第三百五條ニ依リ減輕シタル刑期ノ四分ノ二又ハ三ヲ第三百十三條ニ依リ減輕スヘキヤ

内訓第十四條第四百十條ノ加重第三百二條ノ加重ト同時ニ來ル時ハ第四百十條ニ依リ一等ヲ加フルノ上仍ホ第三百二條ニ依リ一等ヲ加ヘ通シテ二等ヲ加ヘ然ルニ第三百五條ノ場合アルキハ同條ニ依リ一等ヲ減スル儀ト心得ヘシ

但シ第三百五條ト第三百十三條ト減輕ハ同時ニ來ルコトナシ

(理由)第四百十條ノ加重ト三百二條ノ加重ト同時ニ來ル時ハ第四百十二條ニ依リ一等ヲ加フルノ上仍ホ三百二條ニ依リ一等ヲ加ヘ通シテ二等ヲ加フルコトナル故ニ期ノ刑二年二月ナレハ三年三月トナル

第三百五條ト三百十三條ノ減輕ハ同時ニ來ルコトナシ故ニ前シ二等ヲ加ヘタル者ヲ三百五條ノミニテ一等ヲ減ズルナルハ三年三月ヨリ二等ヲ減ズ三年三月以下三月十日以上

第四百十二條ニ依リ一等ヲ加フルノ上仍ホ三百二條ニ依リ一等ヲ加ヘ通シテ二等ヲ加フルコトナル故ニ期ノ刑二年二月ナレハ三年三月トナル

第三百五條ト三百十三條ノ減輕ハ同時ニ來ルコトナシ故ニ前シ二等ヲ加ヘタル者ヲ三百五條ノミニテ一等ヲ減ズルナルハ三年三月ヨリ二等ヲ減ズ三年三月以下三月十日以上

第十五條刑法第四百十條第三百五條ノ加重減輕ヲ全時ニ爲スヘキトハ加重ヲ先ニシ減輕ヲ後ニスルヤ又ハ第三百二條ニ依リ減輕シタル刑期ヲ第四百十條ニ依リ加重スルヤ

若刑法第三百二條ヲモ適用シ其加重ヲナスヘキトハ其加重ヲ第一トシ第三百五條ヲ減輕シ第二トシ第四百十條ノ加重ヲ第三トシテ加減スヘキヤ

内訓第五條前條指令ニ依テ會得スヘシ

但第三百二條ニ減輕トアルハ第三百五條ノ誤ナルヘシ

○平始審廳檢事 十五年四月廿日再請訓。全年六月二日內訓

第二條請訓面第十四條內訓但書ニ第三百五條ト第三百十三條トノ減輕ハ全時ニ來ルコトナシトアリ試ニ例ヲ舉ケンニ甲乙ノ兩人アリ人ヨリ自己ノ身体ニ暴行ヲ受ケタルニ依リ直ニ怒ヲ發シ暴行人ヲ毆傷シタリ又晝間故ナシ人ノ住居シタル邸宅ノ門戶ヲ踰越シテ侵入スル者アリ父子又ハ夫妻又ハ雇主雇人各二名ニテ之ヲ防止スル爲メ其犯人ヲ毀傷シタリ是等ハ第三百九條第三百十二條及ヒ第三百十三條ヲ以テ論スヘキ者ナラン然ルニ共毆シテ傷ヲ成スノ輕重ヲ知ル事能ハサルキハ第三百五條ノ減輕ヲ適用

第十五條刑法第四百十條第三百五條ノ加重減輕ヲ全時ニ爲スヘキトハ加重ヲ先ニシ減輕ヲ後ニスルヤ又ハ第三百二條ニ依リ減輕シタル刑期ヲ第四百十條ニ依リ加重スルヤ

若刑法第三百二條ヲモ適用シ其加重ヲナスヘキトハ其加重ヲ第一トシ第三百五條ヲ減輕シ第二トシ第四百十條ノ加重ヲ第三トシテ加減スヘキヤ

内訓第五條前條指令ニ依テ會得スヘシ

但第三百二條ニ減輕トアルハ第三百五條ノ誤ナルヘシ

○平始審廳檢事 十五年四月廿日再請訓。全年六月二日內訓

第二條請訓面第十四條內訓但書ニ第三百五條ト第三百十三條トノ減輕ハ全時ニ來ルコトナシトアリ試ニ例ヲ舉ケンニ甲乙ノ兩人アリ人ヨリ自己ノ身体ニ暴行ヲ受ケタルニ依リ直ニ怒ヲ發シ暴行人ヲ毆傷シタリ又晝間故ナシ人ノ住居シタル邸宅ノ門戶ヲ踰越シテ侵入スル者アリ父子又ハ夫妻又ハ雇主雇人各二名ニテ之ヲ防止スル爲メ其犯人ヲ毀傷シタリ是等ハ第三百九條第三百十二條及ヒ第三百十三條ヲ以テ論スヘキ者ナラン然ルニ共毆シテ傷ヲ成スノ輕重ヲ知ル事能ハサルキハ第三百五條ノ減輕ヲ適用

セサルヲ得サルカ如シ然ルニ内訓ニ依ルキハ如何處斷スヘキヤ
 内訓第二條本年第九百四号内訓第十四條ノ旨趣ハ刑法第四百
 十條第三百二條ノ加重ト第三百五條ノ減輕ハ同時ニ來ルコト
 ルモ第四百十條第三百二條ニ依リ處分スル場合ニ於テ第三百
 五條ノ減輕ト第三百十三條ノ減輕トハ決シテ同時ニ來ルコト
 ナキ義ト心得ヘシ
 ○岡崎始審廳檢事 十五年四月十九日伺。全年五月五日内訓
 第二段刑法第九十九條犯罪ノ情狀ニ依リ總則ニ照シ同時ニ本刑
 ナ加重減輕スルキハ左ノ順序ニ從テ其刑名ヲ定ム但從犯及ヒ
 未遂犯罪ノ減輕其他各本條ニ記載スル特別ノ加重減輕ハ其加減
 シテ應テ以テ本刑ト爲スト抑本條加減順序ノ要ハ各裁判官ニ
 於テ加重減輕スルニ甲ハ減輕ヲ先ニシテ加重ヲ後ニシ乙ハ加重
 ヲ先ニシテ減輕ヲ後ニシテ輕重不同ノ判決アルカ故テ受刑者ハ爲
 スニ不幸ヲ受ケシ是其本條ニテ豫メ加減方法ノ順序ヲ示シタル
 所以ナラン而シテ本條但書中特別ノ加重減輕ハ其加減シタル者
 ナ以テ本刑ト爲スト其本刑對シテ例ハ十六歲以上三十歲未満
 幼者前科輕罪ノ判決ヲ經テ再犯以上三百六十寸六條竊盜ノ罪

ヲ犯シ自首スル者アラハ先ツ二人以上犯シタルヲ以テ特別ノ加
 重トシ二月十五日以上五年以下ノ刑期ヲ本刑トシ又其再犯ニ係
 ルヲ以テ一等ヲ加フルルハ其二人以上共ニ犯シタルニ依リ加重
 シタル二月十五日以上五年以下ノ刑期四分ノ一ヲ加ヘ三月三日
 以上六年三月トナシ其之レヲ減スルハ本犯幼年者ナルト自首
 シタルトニ因リ(贓ノ還給)二等ヲ減シ一月十六日以上三年一月
 十五日以下トナルヘキヤ

内訓第一段見解ノ通

○彦根始審廳判事

(十五年三月四日請訓)
(全年四月六日内訓)

第九條刑法第九十九條ニ犯罪ノ情狀ニ因リ總則ニ照シ同時ニ本
 刑ヲ加重減輕スルキ時ハ左ノ順序ニ從テ其刑名ヲ定ム但從犯及
 ヒ未遂犯罪ノ減輕其他各本條ニ記載スル特別ノ加重減輕ハ其加
 減シタル者ヲ以テ本刑トナス云々トアリ假令ハ茲ニ長期禁錮四
 年ニ該ル罪ヲ犯シタル者アランニ從犯ナルヲ以テ一等ヲ減シ自
 首ヲ以テ一等ヲ減シ酌量シテ又一等ヲ減シ通シテ二等ヲ減スヘ
 キ時ハ之ヲ下文ノ如クスルヲ以テ加減順序ノ當ヲ得タルモノト
 スル乎

加減順序

從犯ヲ特別ノ減輕ニ屬スルヲ以テ先ツ第一ニ等ヲ減シ長期三年ヲナシテ以テ本刑ヲナシ而シテ自首及ヒ酌量ヲ同時ニ三等ヲ減シ長期一年六月ヲ爲スヘキモノナルヤ果シテ如此減輕スルヲ本義トスレバ特別加重及ヒ減輕ハ先ツ同時ニ加減シ通常加減ハ特別加減ヲ爲シタル後更ニ加減スヘキモノナルヤ

○内訓第九條見解之通

但從犯ハ一般ノ減輕ナリ雖ニ減輕ノ方法ハ特別ノ減輕ト

○若松始審廳檢事

西條第一回員會ノ議

十日以下ノ刑ニシテ

○若松始審廳檢事

西條第一回員會ノ議

十日以下ノ刑ニシテ

○若松始審廳檢事 (四年十一月廿二日請訓)

刑法第百條末項ニ單ニ輕罪ノ刑ハ其所犯情狀重キ者ニ從テ處斷ストアレハ右情狀重キ者ニ從フトハ重禁錮ト重禁錮ト共ニ發シ輕禁錮ト輕禁錮ト共ニ發シ罰金ト罰金ト共ニ發シタル場合ヲ示シタルモノニシテ禁錮ト罰金ト俱發シタル時ハ縱ヒ禁錮ハ十一日ニシテ罰金ハ五百圓ナルモ無論禁錮ニ從ヒ處分スル儀ト心得可然哉

又ハ如斯場合ニ於テ裁判官ノ判定ニ任セ其禁錮罰金何レニ從ヒ處分スルモ不苦候哉

内訓刑法第百條末項ノ儀ニ付請訓ノ趣ハ後段見込ノ通

(理由) 該條末項ニ輕罪ノ刑ハ其所犯情狀最モ重キ者ニ從テ處斷ストアレハ禁錮ト罰金ト俱發スル時ニ當リ裁判官ニ於テ罰金ニ該ルヘキ者禁錮ニ該ル可ヘキ者ニ比スレハ其情狀重キ者ト思料スレハ固ヨリ罰金ノ刑ニ處スヘキ者トス

○宇和島始審廳檢事 (十五年一月廿四日伺)

第三條明治十四年第八十一号布告相成候ニ付テハ譬ヘハ舊法ニ於テ竊盜ニ該ル罪ヲ犯シタル者ハ刑法ノ竊盜ノ正條ヘ比較シ其

第七章 數罪俱發
第百條

重罪輕罪ヲ犯シ未タ判決ヲ經スニ罪以上俱ニ發シタル時ハ一ノ重キニ從テ處斷ス重罪ノ刑ハ期ノ長キ者ヲ以テ重トナシ刑期ノ等シキ者ハ定役アル者ヲ以テ重ト爲ス

輕罪ノ刑ハ其所犯情狀最重キ者ニ從テ處斷ス

輕重ヲ定ムル勿論ナリト雖モ若シ舊法ニ於テ數罪俱發シ新舊ノ法律皆正條アルモ其數罪中一ノ重キ刑ヲ定メ新法ニ於テ其數罪ノ中一ノ重キ刑ヲ定メ双方ノ重キ者ヲ比較スル儀ニ候哉
果シテ然ルモハ舊法ハ數罪ノ中竊盜罪贓金多クシテ其刑重ク刑法ニ於テハ毆打ノ罪數罪ノ中ニテ最モ重キモハ罪名ニ拘ハラズ其刑名ヲ比較シテ處斷スル儀ニ候哉

指令第三條伺ノ通

○福島始審廳檢事 (十五年二月六日請訓)

爰ニ金一圓ヲ竊ニ盜ミタル犯者アルニ付刑法第三百六十六條及ヒ第三百七十六條ニ照シ重禁錮二月監視六月ノ處斷相成タリ其裁判確定ノ後同人餘ニ別所ニ於テ金千圓竊ニ盜ミタル罰發覺ス其情重キニ依リ同條ニ照シ重禁錮四年監視二年ニ付スルヲ相當ト認ムルモ該犯ハ已ニ同刑同條ニ依リ處斷ヲ經タルモノナレハ刑法第百二條一罪前ニ發シ己ニ判決ヲ經テ云々等シキモノニ付更ニ論スルヲ經サルモノナル哉
又ハ同條ニ見ユル重シトシテ更ニ論シ前發ノ例ヲ以シ後發ノ刑ニ通算スルヲ得ルモノナル哉

内訓別紙數罪俱發ノ儀ニ付請訓ノ趣ハ後段ニ又ハ同條以下云々トアルハ見込ノ通

○檢事代理福井縣警部 (十五年七月十二日伺)

爰ニ竊盜犯アリ審理ヲ遂クルニ該犯ノ所爲タル新法實施前後ニアリ則新法實施前ノ犯罪タル人ノ所有物ヲ竊盜シ得ル所ノ贓金壹圓亦新法實施后ノ犯罪タル全シク人ノ所有物ヲ竊盜セシ犯罪タリ依テ之ヲ法律ニ照スニ新法實施前ノ所爲ハ舊法ニ照シ懲役五十日之ヲ新法ニ照セハ二月以上四年以下ノ重禁錮ナルヲ以テ舊法ヲ輕シトス亦新法實施后ノ犯罪タル則二月以上四年以下六月以上二年以下監視ニ相當セリ右犯罪タル全罪ナルモ新法實施前后ニ在ルヲ以テ之ヲ法律ニ照セハ自スト二罪ノ如クナリ然レモ其實全罪ナルヲ以テ單ニ新法ニ依リ處斷スヘキヤ將タ全罪ト雖モ照ス處ノ法律上二刑ナルヲ以テ假ヒ二罪ト看做シ新法實施前后ノ罪ヲ分チ數罪俱發條ニ照シ處斷スヘキ哉
指令二罪俱發例ニ依ルヘキ者トス

(理由) 右二罪トモニ新法實施前ニ係ルハ節次合算シテ一罪トナシ處分スヘキモ所犯新法實施前後ニ係ルヲ以テ今日之

ヲ處分スルニハ二罪俱發例ニ因ルノ外手段無之考量候

○滋賀縣 十五年五月三十一日伺。全年六月十三日付
刑法第百一條ニ違警罪二罪以上俱ニ發シタルトハ各其刑ヲ科ス
トアルハ其性質ヲ異ニシタル罪(例ハ規則ヲ遵守セシメテ火
ヲ得スシテ烟火)ヲ二罪以上犯シ(例ハ市街ニ運搬ヲシ及ヒ官許
ヲ製造スルノ類)ニ發シタルトキ各其刑ヲ科
スル義ニシテ其性質ヲ異ニセス同一ノ罪(例ハ一日時場所ヲ異
都度異ナリ一テ毆打創傷シテ疾病ニ至ラサル者ノ類又ハ日時場所
ヲ異ニシテ渡船賃ヲ拂フヘキ場所ニ)ヲ
テ其定價ヲ出サス通行スルノ類)ニ發シタル場
合ニ於テハ第百一條ノ限リニ無之義ト相心得可然哉
指令伺ノ趣同一ノ罪俱ニ發スル場合ト雖モ刑法第百一條ニ依
ルヘキ義ト心得ヘシ。

第百一條

違警罪二罪以上俱ニ
發シタル時ハ各其刑
ヲ科ス若シ重罪又ハ
輕罪ト俱ニ發シタル
時ハ一ノ重キニ從フ

○滋賀縣 十五年五月三十一日伺。全年六月十三日付
刑法第百一條ニ違警罪二罪以上俱ニ發シタルトハ各其刑ヲ科ス
トアルハ其性質ヲ異ニシタル罪(例ハ規則ヲ遵守セシメテ火
ヲ得スシテ烟火)ヲ二罪以上犯シ(例ハ市街ニ運搬ヲシ及ヒ官許
ヲ製造スルノ類)ニ發シタルトキ各其刑ヲ科
スル義ニシテ其性質ヲ異ニセス同一ノ罪(例ハ一日時場所ヲ異
都度異ナリ一テ毆打創傷シテ疾病ニ至ラサル者ノ類又ハ日時場所
ヲ異ニシテ渡船賃ヲ拂フヘキ場所ニ)ヲ
テ其定價ヲ出サス通行スルノ類)ニ發シタル場
合ニ於テハ第百一條ノ限リニ無之義ト相心得可然哉
指令伺ノ趣同一ノ罪俱ニ發スル場合ト雖モ刑法第百一條ニ依
ルヘキ義ト心得ヘシ。

○松江裁判所檢事 (十四年十二月廿八日伺) 十五年一月廿四日付

第五條第百二條後項若シ前發ノ罪ヲ判決スル時未タ發セサル罪再犯ノ罪ト俱ニ發シタル者ハ其再犯ト比較シ一ノ重キニ從ヒ前發ノ刑ヲ通算セズ

前發ノ罪ヲ判決スル時未タ發セサル罪再犯ノ罪ト俱ニ發シタル者ハ先ツ本條前項ノ例ニ照シ後發ノ罪ノ重キ部分(前發ノ罪ト後發ノ罪トト比較シ後)ト再犯ノ罪トト比較シ其一ノ重キニ從テ處斷シ前發ノ刑ヲ通算セサル者ト解スヘキヤ(意見)本項ノ意義ヲ解スルヲ甚タ難シ行文ニ付テ解スル時ハ後發ノ罪ト再犯ノ罪トト直ニ比較スル者ノ如シ果シテ然ラハ左ノ如キ不權衡ヲ生ス可シ例之ハ有期徒刑ニ該ル可キ重罪ヲ二次犯シ一罪已ニ發シテ十五年ノ有期徒刑ニ處セラレ九年十一月ヲ經過シテ再ヒ輕懲役ニ該ルヘキ重罪ヲ犯シ其輕懲役ノ罪ノ發シタルト同時ニ前キニ發ヒサリシ有期徒刑ノ罪發シタル時ハ再犯ノ輕懲役ノ罪ト前キニ發ヒサリシ有期徒刑ノ罪トト比較シ一ノ重キ有期徒刑ニ處セサルコトヲ得ス若シ如斯クナレハ前キニ發ヒサリシ有期徒刑カ前キニ

第百二條

一罪前ニ發シ已ニ判決ヲ經テ餘罪後ニ發シ其輕ク若クハ等シキ者ハ之ヲ論セス其重キ者ハ更ニ之ヲ論シ前發ノ刑ヲ以テ後發ノ刑ニ通算ス但前發ノ刑ニ通算但前發ノ刑罰金科料ニ該ル己ニ納完シタル者ハ第二十七條ノ例ニ照シ折算シテ後發ノ刑期ニ通算ス

發シタル他ノ有期徒刑ト共ニ發シタル時ハ本條前項ノ例ニ照シ各等ニキテ以テ止タ一ノ有期徒刑ニ處セラレ再犯セハ其罪即輕懲役ニ一等ヲ加ヘラル、ニ至ル可キ後發ノ罪ト再犯ノ罪トト直ニ比較スルカ故ニ再ヒ有期徒刑ニ處セラレ、ナリ茲ヲ以テ前項ノ意義ト甚タ同シカラステ被告人ノ不幸トナリ又ハ他ノ場合ニ於テ被告人ノ利益ト爲リ頗ル不權衡ヲ覺フ

指令第五條前發ノ罪ヲ判決スル時未タ發セサル罪再犯ノ罪ト俱ニ發シタル者ハ前發ノ罪ニ拘ハラヌ後發ノ罪ト再犯ノ罪トヲ比較シ一ノ重キニ從ヒ處斷スヘキモノトス

○岡崎始審廳判事 (十五年一月 質問) 十五年一月廿五日回答

第五條刑法第百二條前後ノ罪輕重ヲ論スルハ各本條ニ記載スル刑期ニ依リ之ヲ論シ例セハ(前罪ハ三月以上三年以下)ニ該ル者ナル時ハ後發ノ罪ヲ重シトスルモノナルヤ果シテ然ラハ前後ノ刑ヲ通算スルニ至リテハ之ニ反シ實地言渡ヲ受ケタル(例ハ前罪ハ三月以上三年以下ノ範圍内ニシテ)四月重禁錮ノ刑ニ處シタルモノ已ニ三月ヲ役過シタル際後發罪發シ(四月以上四年以

若シ前發ノ罪ヲ判決スル時未タ發セサル罪再犯ノ罪ト俱ニ發シタル者ハ其再犯ト比較シ一ノ重キニ從ヒ前發ノ刑ヲ通算セズ

下ノ範圍内ニ於テ更ニ之ヲ五月重禁錮ノ刑ニ處スルモノトセ
ンニ役過シ殘ル前發ノ刑一月ヲ以テ後發ノ刑五月ニ通算シ併セ
テ六月ノ重禁錮ヲ言渡スモノナルヤ

回答第五條輕罪ハ刑法第百條第三項ニ依リ所犯情狀ノ輕重ヲ
以テ其輕重ヲ判定ス但引例ノ場合ニ於テ後發ノ罪ヲ重トシ判
定スルルキノ通算方ハ后發ノ刑五月ヨリ已ニ經過シタル前發ノ
刑三月ヲ差引モノトス

(理由)通算ノ方法ハ前發ノ罪ハ禁錮四月ニ處セラレ後發ノ
罪ハ禁錮五月ニ該ルルハ前刑四月ト後刑五月トヲ通算シ後
刑五月ヨリ前決ノ刑四月ヲ扣除スレハ剩ル所一月アリ因テ
前刑滿期ノ後剩ル一月ヲ科スヘク然ルニ該犯人ハ前刑役過
スル二月ニシテ服セサル一月ナルニ付未タ役セサル一月ト
通算シテ剩ル所ノ一月ヲ并テ禁錮二月ニ服セシムヘキモノ
トス

○滋賀縣 十五年一月十七日伺 全年二月七日付
第七條第百二條一罪前ニ發シ既ニ判決ヲ經テ餘罪後ニ發シ其輕
ク若クハ等シキ者ハ之ヲ論セス其重キモノハ更ニ之ヲ論ス前發

ニ刑ニ以テ後發ノ刑ヲ通算スルハ例ニ依リ重罪ノ刑ニ就テ前發
輕禁錮六年ヲ處シ後發輕禁錮四年ヲ該ル罪發覺ス刑罰刑區種
類等ニ於テ輕禁錮八年ヲ以テ重トシ更ニ論スルハ得無キカ
然レ雖輕罪ノ刑ニ該ル時ハ例ニ依リ先ニ輕禁錮一月ニ處セ
レ後所犯情狀重キ者輕禁錮五年ニ該ル罪發覺スル時刑罰刑區
類等ニ依リ重罪所犯情狀重ク且少刑期ヲ長キ罪ハ前發ノ刑ニ以テ
後發ノ刑ヲ通算スルキヤ如何ト云ハ日伺。全頁廿五日付

指符第七條伺之通 十四年九月七日請訓
十五年五月二日內訓

○新潟裁判所新發田支廳請檢事
第十四條刑法第百二條三項若前發ノ罪ヲ判決スル時未發ノ罪
罪再犯ノ罪ニ俱ニ發シタル者其再犯ノ比較シテ重キ者從ヒ
前發其刑ヲ通算セスト有之右例ニ依リ其所爲有期徒刑百該ル
キ罪ヲ輕度犯セタル者其處斷ヲ受クハ例ニ依リ一罪ヲ包藏シ
遂ニ(一)有期徒刑百該ル罪ヲ以テ刑名宣告ヲ受ケ島地ニ在リ僅
ニ同囚禁毆打ヲ以テ所業アリ此時ニ方テ前ニ包藏セシ有期徒刑
百該ル罪一罪發覺シタル場合ニ於テハ再犯即毆打ノ罪ヲ比較
有期徒刑百該ル罪重キ者以テ之ヲ科スル義ト相心得可然哉然ラハ前

言既斷候受案至有期徒刑と刑期と通計略ハ至本年五月廿四日
 四條ニ至ハ其期限ヲ以テ罰金ハ或ハ相成候義此相心得可然哉
 二内訓第四條見解通リ此類ニテ前ニ已識シテ管獄時既
 三(理由)有期徒刑罰該罪可成罪度犯セテ其罰罪法包藏
 四罪ヲ遂行シテ有期徒刑罰處セテ受レ後再々毆打等ノ輕罪ヲ犯シ
 五前發其處斷處受クル際前旨包藏セテ有期徒刑罰該罪可成罪
 六罪再發覺案此以場登リ於テ刑法第百三條若前發ノ罪ヲ判決ス
 七後十一年間味者發案此以罪再犯前罪ト俱ニ發スルモ其再犯
 八○係比較候罪重輕支經前發ノ刑罰通算セテ其再犯
 九罪再發有期徒刑罰處セサルヘカラス
 十○大津始審廳檢事於十五年七月八日伺。全月廿五日付
 十一○流帶ノ罪案犯禁錮刑ニ處セ所限ス者不服ニ於テ上候致以候
 十二○付責付可許更之候處其罪告事件判決未濟申再ヒ禁錮以上刑
 十三○刑ニ該案可輕罪候起訴公訴ニ係候者若禁錮以上刑法第百條
 十四○末項ニ依リ情狀嚴重者ニ從ヒ處斷スルハ勿論ホトモ治罪法第
 十五○廿六條六同時同ニメ被告共對訴新々罪案候ハ附帶候犯罪
 十六○ニ非スニ雖無上等以裁判所併セテ之ニ管轄ス相具ニ被告後犯

又事件ハ大審院ニ送致ス可成者然如ク然候ハ大審院治罪
 後第卅七號以外ノ事件ヲ管轄セズ此場合於テハ後犯以裁判
 所停止候正告ヲ判決ス待テ刑法第百三條第廿項如左處分致ス
 可キ者有候候然ラ後犯ノ罪ニ付他ニ多致其共犯人有之時
 治然ラ既現其正告申ス者ヲ差置テ餘刑黨夥停止テ用獄ス直
 裁關致候候送不置候哉
 一○檢本始審廳判事於十五年七月廿九日伺。全月八月十五日付
 二○此決因明治十四年中逃走明治十五年三至罪逮捕就案之
 三レ判裁判部管獄時(一)檢事ニ於テ大審院ニ上告中又勾留場ヲ逃
 走シ外旨在海兒器携帶シ竊盜ノ罪ヲ犯シ豫審中大審院ニ於テ
 四棒鎖ニ日懲役入洋旨ノ前罪判決相成候而後後犯前罪主
 五告中又ナルキ以テ未決囚徒ヲ逃走シモ管獄也遊此ヲ得テ依テ
 六如此犯罪ハ刑法第百四十四條ニ照シ大審院裁判申渡シテ
 七シテ後犯裁判裁節其重輕ニ從テ處斷スルキモ管獄候裁上告中又
 八犯罪既至大審院ニ於テ前罪裁判先シテ言渡シ後犯ノ裁判
 九ヲ管全同當テ數罪俱發例照シテ處分致可然哉

マ指令同會未段迄通處分可成者ト云々不詳同然也
 罪(理由)上告由未之刑以確定セ共之者ヲ悉以之全テ裁
 ヲ判所裁決裁判スル時ハ後犯以罪ト共ニ刑法第百條ニ依り處
 刑分發スルハ其當然内ニ内離居ニ太審院判決可然且未タ判
 告中決ナクトモ大審院因地方裁判所ト各別ニ裁判又可キ者ト
 判處ル者以爲大審院ノ判決待重而後刑法第百三條ニ從從處分
 去々後可キ義ヲ考量スルハ審判ノ罪トモ裁量中太審院ニ裁
 ヲ用府始審應判事(十五年九月廿九日請訓) 告中ノ以爲裁
 刑法第百三條中十罪前中發者已判判決大審院 餘罪後裁決其輕
 少若然裁量者裁之ヲ論セ其重者以重之及論中裁發
 刑係以爲後發又刑罰通算云々云々其輕トア判ハ前發ノ刑
 禁錮也其後發又刑罰金ニ該ル如キモノニシテ等シキトアルハ
 前後ノ刑重禁錮該ル者ナシ若右本條記載於刑ノ刑期ハ長短
 及ヒ罪名以異判處ト拘於法ニ等シ其重トモ裁量中太審院
 前發刑罰金十圓也其後發刑重禁錮一月該處如裁發者
 係裁將ト其輕重トモ所犯ノ情狀トモ出現台處分ナル所刑罰
 長短判トモ裁量ヲ假分トモ次竊盜ヲ犯以之者ト次罰發發者

月重禁錮四月無監視六月附加刑裁發判決之經ナル後發覺
 一 次又盜罪ハ其情狀最モ重者トモ裁量中太審院其重禁錮四年
 二 監視ヲ附加ト相當ト見認内モ裁量中太審院其重禁錮四年
 三 更ニ之ヲ論前發刑罰通算之餘刑三年中刑罰月重禁錮ニ處
 四 〇年六月以監視ヲ附加然ル可裁
 內罰刑法第百三條請訓輕罪ノ刑禁錮ト罰金トナ問ハス又刑
 期ノ長短金額ノ多寡ヲ論セ大總裁所犯情狀重キ者ヲ重シトス
 〇松江始審應判事(十五年八月五日伺) 今年九月廿五日付
 一 罪前ニ發シ判決シ事件檢察官若クハ被告人其罪上告其判
 決ナキ内餘罪發覺シタル場合ニ於テハ前判決ハ確定セザルヲ以
 テ前後ノ刑ヲ比較スルハ由ナキカ如クト雖刑法第百三條ニ於
 テ前前裁判ノ確定ヲ俟テ後發罪ヲ處斷スルハ明文ナキヲ以テ未
 確定ナル前判決ノ刑ト比較直ニ處斷シテ可然乎又上告事件
 〇判決ヲ俟テ後處斷ス可キ乎 不備要ノ旨請訓
 一 指令前段同ノ通
 〇松江始審應判事(十五年十月廿四日伺) 職令會
 本年八月八日罪前ニ發シ判決セシ事件上告中餘罪發覺シタル

場合ニ於テ刑法第百二條ニ依リ確定セサル前判決ノ刑ト比較
處斷スルニ平又云々ト相伺候處前犯何ノ通ト御指令有之然ル
ニ若シ前發罪則止告中ノ罪大審院ノ判決ニ因リテ無罪ノ言渡ヲ
受テ如キ場合ニ遭遇セハ己ニ不論罪ノ言渡ヲ爲シタル後發罪
即テ輕キ罪ニ之ヲ科スル路ヲキ至ルヘシ然レモ三罪俱罪律
ノ精神ニ於テ數罪各別ニ科セザルノ原理ニ據ルモ之ヲ素ヨリ
輕重ニテ論じザルモ亦之ヲ全免スルノ趣旨ニテ之ヲ故ニ輕キ
罪ヲ執行シ自ラ重キ罪ヲ執行ニ讓ルノ意旨ナルヲ然ラハ前段
ニ陳述スルガ如ク管テ比較ノ對敵ニシテ前發罪カ大審院ニ判
決ニ依リテ無罪ニシテモ後發罪宣告ニ確定シタル上ニ別ニ其刑ノ
宣告ヲ用テ之ヲ輕キ罪ニ執行スル爲メ得テ裁斷セザルモノトス
指帶伺テ越後發罪ニ刑ヲ執行スル爲メ裁斷シ得ルモノトス又原
ノ○偷盜始審廳檢事(十五年十一月九日伺)
爰ニ某甲某於前懲役終身服役中本年三月中旬四六名車申谷セ逃
走シ某甲某同年八月月中旬他管内ニテ捕獲當衙ニ護送ニ相成リタ
ルヲ以テ別罪之ヲ裁斷シテ申認テ刑法第百四半條ニ依リ三
月重禁錮ニ處斷スル然レ處有某甲某等逃走シ途中他管ニ於テ刑

法第二百七十九條ニ揭シル所ノ罪ヲ犯シ其共犯ノ内二名捕ニ就
キ證據充分ナルヲ以テ某重罪裁判所ニ於テ二名ハ對審某甲某ハ欠
席裁判ニテ徒刑十二年ノ刑ヲ受ケ茲ニ某甲某ハ先キニ當衙ニ於テ
處刑ヲ受ケタルヲ相分リタルヲ以テ某裁判所檢事ヨリ其執行ノ
儀囑托相成タルト雖モ即チ數罪俱發ニ係ルヲ以テ先キニ宣告ニ
相成タル重禁錮ノ刑ハ取消サ、ルヲ得ス其處分上ニ於テハ大審
院ニ請求スヘキモノナル乎又ハ當衙ニテ其宣告ニ及ヒタル上執
行政シ可然哉明文無之ニ付疑義ニ涉リ候條仍テ内訓ヲ仰ク
指令伺ノ趣刑法第九十五條ニ依リ先ツ其重キ懲役終身ノ刑ヲ
執行ス可シ但重禁錮ノ刑ハ數罪俱發例ニ依リ取消ニ及ハス當
然其執行ヲ爲サル儀ト心得ヘシ

○偷盜始審廳檢事(十五年十一月九日伺)
爰ニ某甲某於前懲役終身服役中本年三月中旬四六名車申谷セ逃
走シ某甲某同年八月月中旬他管内ニテ捕獲當衙ニ護送ニ相成リタ
ルヲ以テ別罪之ヲ裁斷シテ申認テ刑法第百四半條ニ依リ三
月重禁錮ニ處斷スル然レ處有某甲某等逃走シ途中他管ニ於テ刑

二名ハ現ニ家内ニ入り一名ハ終始宅外ニ在リテ見張ヲ爲シ其目的ヲ遂シ者アリ（被害者ニ於テモ犯者ヲ二名ト認ム）此一名ノ如キハ犯罪ノ地ニ在リシモ實際其所爲ナキモノナレトモ仍ホ正犯ヲ以テ論スヘキモノナルカ

回答貴解ノ通

○福岡始審廳判事

十五年三月三日請訓
全年全月廿九日内訓

第四條刑法第百五條ニ掲グル教唆者トハ佛蘭西刑法第六十條ニ掲グル處ノ贈物約束脅迫擅權奸謀偽計ヲ以テ輕重ノ犯罪ヲ行ハシメ又ハ指揮シタル等ノ所爲ナキ者ハ總テ教唆者ト爲ス可ナラサル乎

内訓第四條刑法第百五條ニ掲グル教唆者トハ贈物約束脅迫擅權奸謀偽計ヲ以テ犯罪ヲ行ハシメ又ハ指揮シタルニ限ラス總テ事ヲ指示シテ犯罪ヲ教唆シタル者ヲ謂フ

○新潟裁判所新發田支廳詰檢事

十四年九月七日請訓
十五年五月二日内訓

第十五條刑法第八章第一節中違警罪ヲ教唆シタル者ハ正犯ト同シク論スルノ論明文無之例ヘハ人ヲ教唆シテ或人ヲ罵詈セシムルカ如キ所爲アリト雖モ元ヨリ微罪タルノ違警罪ナルヲ以テ假令其教唆者ニ對シ共犯トシテ告訴ヲ爲ス者アルモ其教唆者ハ不問ニ置ク可キモノト相心得可然哉

内訓第十五條見解ノ通

（理由）刑法第百五條違警罪ノ教唆者ヲ正犯ト爲サス故ニ不問ニ措クヘシ

第百五條

人ヲ教唆シテ重罪輕罪ヲ犯サシメタル者ハ亦正犯ト爲ス

第百六條

正犯ノ身分ニ因リ別ニ刑ヲ加重ス可キ時ハ他ノ正犯從犯及ヒ教唆者ニ及ホスヲ得ス

第百七條

犯人ノ多數ニ因リ刑ヲ加重ス可キ時ハ教唆者ヲ算入シテ多數ト爲スヲ得ス

正犯

第百八條

事ヲ指定シテ犯罪ヲ
 教唆スルニ當リ犯人
 教唆ニ乘シ其指定シ
 タル以外ノ罪ヲ犯シ
 又ハ其現ニ行フ所ノ
 方法教唆者ノ指示シ
 タル所ト殊ナル時ハ
 左ノ例ニ照シテ教唆
 者ヲ處斷ス

一 所犯教唆シタル罪
 ヨリ重キ時ハ止テ
 其指定シタル罪ニ
 從テ刑ヲ科ス

二 所犯教唆ヲシタル
 罪ヨリ輕キ時ハ現
 ニ行フ所ノ罪ニ從
 テ刑ヲ科ス

第二節 從犯

第百九條

重罪輕罪ヲ犯スルヲ知テ器具ヲ給與シ又ハ誘導指示シ其他豫備ノ所爲ヲ以テ正犯ヲ幫助シ犯罪ヲ容易ナラシメタル者ハ從犯ト爲シ正犯ノ刑ニ一等ヲ減ス
但正犯現ニ行フ所ノ罪從犯ノ知ル所ヨリ重キ時ハ止タ其知ル所ノ罪ニ照シ一等ヲ

○山形始審廳判事 (十五年八月十七日請訓)

同年九月廿二日內訓

茲ニ甲者アリ乙者ト金錢ヲ賭ケ博戯ヲ爲サンコトヲ圖ルモ查吏ノ撞見ニ係ルヲ怖ル、ヨリ丙者ニ托スルニ門外ニ佇立シ查吏ノ至ルヲ見ハ報告ヲ爲ス可ノコトヲ以テシ又ハ店頭等(巡査ノ來ルヲ見ルニ宜シキ所)ニ職業ヲ爲シ居リ巡査來ラハ報知ス可キノコトヲ以テシ然レ後室内ニ潛ミテ現ニ賭博ヲ爲シ居レリ查吏之ヲ探知シ直ニ該場ニ進入セントシ己ニ門外數百歩ノ地ニ至レリ丙者之レヲ視テ忽然大聲ヲ發シ查吏來リシ旨ノ報告ヲ爲シタリ是ニ於テ甲者乙者ハ財物ヲ遺棄シテ現場ヲ逃走シ一時就縛ヲ免カレ獨リ丙者ハ縛ニ就キタリ此場合ニ於テ丙者ヲ斷スルニ從犯ノ罪ヲ以テスヘキ歟刑法第百九條ノ精神ハ決心以後犯罪以前ニ係リシモノニテ丙者ノ所爲トハ雷壤ノ差アルモノトス左スレハ丙者ノ所爲ハ從犯ヲ以テ論ス可キモノニ非サル可シ又丙者ハ犯罪中犯人ノ耳目手足トナリ之ヲ幫助シテ犯罪ヲ容易ナラシメタルモノナルヲ以テ正犯ト爲シ刑法第百六十一條ヲ適用ス可キ歟抑賭博ノ罪タルヤ非現行ヲ罰セサル如キ一種ノ犯罪ナルニ丙者ノ如ク其場ニ臨マス又現ニ手ヲ下タサルモノヲ以テ正犯ト爲シ賭博者ト同一

減ス

ノ罰ヲ科スルモ亦穩當ナラサルヲ覺ユ因テ丙者ノ如キハ犯人ヲシテ心ヲ安ンシ罪ヲ犯サシメタル所爲ト查吏ノ來ルヲ報告シテ隱避セシメタルニ罪ト爲シ刑法第百九條同第百五十一條ニ依リ仍ホ第百條ニ照シ處斷スヘキモノナル哉

內訓請訓ノ趣從犯ヲ以テ論ス可キ儀ト心得ヘシ

第一百十條

身分ニ因リ刑ヲ加重
ス可キ者從犯ト爲ル
時ハ其重キニ從テ一
等ヲ減ス
正犯ノ身分ニ因リ刑
ヲ減免ス可キ時ト雖
モ從犯ノ刑ハ其輕キ
ニ從テ減免スルヲ
得ス

凡そ犯罪ノ時ニ於テ其ノ身分ニ因リ刑ヲ加重ス可キ者ハ其ノ身分ニ因リ刑ヲ減免ス可キ時ト雖モ從犯ノ刑ハ其ノ輕キニ從テ減免スルヲ得ス

第九章 未遂犯罪

第一百一條

罪ヲ犯サンコトヲ謀リ
又ハ其豫備ヲ爲スト
雖モ未タ其事ヲ行ハ
サル者ハ本條別ニ刑
名ヲ記載スルニ非サ
レハ其刑ヲ科セス

第三百十二條

罪ヲ犯サントシテ已ニ其事ヲ行フト雖モ犯人意外ノ障礙若クハ舛錯ニ因リ未タ遂ケサル時ハ已ニ遂ケタル者ノ刑ニ一等又ハ二等ヲ減ス

第三百十三條

重罪ヲ犯サントシテ未タ遂ケサル者ハ前條ノ例ニ照シテ處斷ス
輕罪ヲ犯サントシテ未タ遂ケサル者ハ本條別ニ記載スルニ非サレハ前條ノ例ニ照シテ處斷スルヲ得
違警罪ヲ犯サントシテ未タ遂ケサル者ハ其罪ヲ論セス

○大津始審廳檢事 十五年一月廿三日伺。同年二月九日附
舊法ニ於テ竊盜已得財未得財ト稱スル者譬へハ珠玉貨幣ノ類ニシテ隱藏シ易キ者手ニ入ルレハ則チ已遂トシ器物錢帛ノ類ハ盜所チ離ルト否トヲ以テ區處シ木石重器ハ本處チ移スモ駄載セサレハ猶ホ未遂犯ヲ以テ論スル慣例ニ有之候處新法固ヨリ舊慣ニ泥ム可キニアラス左ノ如ク相心得可然哉

第一條刑法第三百六十六條第三百七十一條ノ竊取シタル者第三百六十八條第三百七十條ノ竊盜ヲ犯シタル者トハ已ニ得テ己レノ自由ニ任スヘキ場合ニ至リシヲ謂フ假令手ニ入ル、モ追逐セラレテ捨ルニ隙ナシ途中迄持去ル如キハ仍ホ已遂犯ヲ以テ論セス
第二條刑法第三百六十七條水火震災其他ノ變ニ際シテハ尋常ノ場合ト同シカラス已ニ盜情アリテ人ノ物品ヲ隱藏シ又ハ提挈及ヒ負擔シタル者ハ已遂犯ヲ以テ論ス

第三條刑法第三百七十二條田野ノ穀類菜葉其他ノ產物ニシテ其苗ヲ拔キ菜ヲ摘ミ若クハ菓ヲ落シタル如キハ盜犯ノ器物ニ入ルト否トチ分タス已遂犯ヲ以テ論ス

第四條刑法第三百七十三條山林ニ於テ竹木ヲ剪伐シ其所チ移サ

サ。者川澤池沼湖海ニ於テ魚鳥ヲ漁獵シ死ニ致シタルモノ又第三百七十四條牧場ニ於テ獸類ヲ撲殺シタル者并盜情アルハ已遂犯ヲ以テ論ス

指令伺ノ趣第一條第二條第三條第四條已遂未遂ノ區別ヲ爲ス如キハ實際ノ景狀ニ因リ之ヲ定ムルニ非サレハ豫メ指令ニ及ヒ難シ

○山田始審裁判所 (十五年二月十三日質問)

第四條竊ニ盜犯アリテ人家ニ忍入り金員ヲ竊取シ門戸ヲ出テントスル際看守人ニ撞見セラレ其贓金ヲ取返サレタル場合ノ如キハ則チ刑法第百十二條ノ未遂犯罪ナラズ果シテ然ラハ他人ノ山林ニ於テ立木ヲ擅代シテ自己ノ居宅ニ運搬スル際看守人ニ認メラレ其目的ヲ遂得スハテ止ム者ノ如キモ亦未遂犯ナラン

同答第四條竊盜ノ未遂ニ遂ノ區別ハ實際ノ景況ニ因リ裁判官ノ信認スル所ニ從ヒ之ヲ定ムルニ非サレハ豫メ確答及ヒ難シト雖モ一應竊取シタル上ハ假令其贓品ヲ直ニ被害者ニ取還セラルモ未遂犯ヲ以テ論スルハ限ニテ然ラズカハ被害者ニ取還セ

○鹿兒島縣 十五年二月九日請訓。同年三月廿四日付

凡ソ重罪ヲ犯サントシテ未タ遂ケサル者ハ刑法第一編總則第九章(第百十二條第百十三條)ノ例ヲ適用スル儀ト解釋罷在候處刑法第三百四十八條(十二歳以上ノ婦女ヲ強姦シタルモノ)及第三百八十一條強盜婦女ヲ強姦シタル者)ノ未遂犯罪ニ付村田保氏ノ註釋ヲ閱スルニ第三百四十八條ニ付テハ云々強姦未タ成ラサル時ハ暴行脅迫ヲ以テ猥褻ノ所行ヲ爲シタルモノトストアリ第三百八十一條ニ付テハ云々強姦ノコニ成ルト成ラザルトテ論セス及ヒ財物ヲ得ルト得サルトヲ問ハズ之ヲ無期徒刑ニ處ストアリ猶他ノ註釋ニ於テモ同意ニ相見ヘ候然ラハ獨リ右兩條ノ重罪ハ第一編第九章ノ例外法ナルモノ、如シ解釋上疑惑ヲ生シ候指令伺ノ趣十二歳以下ノ婦女ヲ強姦セントシテ未タ遂ケサル者ハ刑法第三百四十八條一項ノ未遂犯トシテ及ヒ強盜既ニ財ヲ得テ強姦ヲ爲サントシテ未タ遂ケサル者ハ同法第三百八十一條ノ未遂犯トシテ強盜未タ財ヲ得スシテ強姦ハ已ニ成ル者ハ同條既遂犯ト心得ヘシ

(理由) 伺面刑法第三百四十八條十二歳以上ノ婦女ヲ強姦セントシテ未タ成ラサル者及ヒ強盜財ヲ得テ婦女ヲ強姦セント

未遂犯罪

トシテ未タ成ラサル者ハ未遂犯トシテ論スルハ明子ナレモ
強盗ノ財ヲ得スシテ婦女ヲ強姦シタル者ハ刑法第三百八十
一條ノ既遂犯ナルヤ未遂犯ナルヤニ至テハ議論兩岐ニ涉リ
一定セス因テ試コボアツナリト教師ニ質問スルニ別紙ノ如
キ答議アレモ未タ服セサル所アリ如何トナレハ刑法第三百
八十條ト第三百八十一條トハ立法者ニ於テ同一ノ精神ヲ以
テ編制セシ者ト推考セサルコト得ヌ然ルニ教師ハ第三百八
十一條ハ數罪俱發ノ原則ニ從フ途キモツト云ヒ第三百八十
條ハ己ニ一罪ヲ犯シ之ヲ免レントスル爲メ人ヲ殺シタル者
ナレハ故罪ノ一罪ナルカ如ク説明アレモ此說ハ佛刑法ニ付
テ觀レハ理ニ適スルモノナルヘシト雖モ本邦刑法第三百八
十條ト第三百八十二條ト同様ニ編制アリシ上ハ其解釋モ一
様ナラサルヲ得ヌ抑第三百八十條ノ強盗ト第三百八十一條
ト強盗トハ同一ノ罪質ナリ其罪質上ニ又一ツノ強姦ヲ加ヘ
テ第三百八十一條ノ罪ヲ組成ス三百八十條モ亦然リ然レハ三
百八十條ヲ入ラ死ニ致セハ強盗ノ財ヲ得ルト否トヲ問ハズ
已遂犯トナルナレハ第三百八十二條モ亦其理ニナリトス且

又教師ノ言ノ如ク其罪ヲ免レシ爲メ二人ヲ故殺スルトモハ
刑法第二百九十六條ニテ已ニ足レリ然ルヲ立法者故ラニ三
百八十條ヲ設ケシハ強盗ニ原因スルキハ人ヲ故殺スルノミ
ナラス闘毆殺モ亦主刑ニ處スルヲ主意ナリトス蓋シ強盗ノ
人ヲ殺ス決シテ其罪ヲ逃レシ爲メノミコアラヌ初ヨリ謀殺
シ財ヲ奪フ者(是ハ謀殺罪トシテ論アルニモセヨ)或ハ財ヲ強奪
セントスルニ事主固ク之ヲ拒持シテ肯セス因テ殺シテ之ヲ
奪ヒ又ハ傷シテ之ヲ取リ其傷ノ爲メニ死スル如キ必シモ罪
ヲ免レシ爲メノ所爲ニ非ス然レモ此所爲ハ強盗ノ目的ヲ遂
ル爲メニ出シ者ナレハ教師モ數罪俱發トハ論セラレサルヘ
シ若シ強盗財ヲ得テ後其家ヲ婦女ヲ強姦セシトシ之ヲ拒
スルヲ以テ毆傷死ニ致スモノ、罪ハ如何處分スヘキヤ論者
ハ之ヲ二罪俱發トセンコト鄙考コテハ原ト強盗ト同時ニ犯セ
シ罪ナルヲ以テ第三百八十條ニ該ル者トス必竟三百八十條
ト三百八十一條ハ舊律強盗人ヲ殺ストアル罪名ト盜ニ因テ
姦ストアル罪名ニ胚胎シテ刑法ヲ成立タル者ナレハ佛律等
トハ少シク原理ヲ異ニスル所アリ舊律ハ其暴惡ノ極ヲ揚ケ

未遂犯罪

タルモノナレハ姦ト殺人ノ結果アレハ強盗ノ遂未遂ハ問ハサル也刑法モ是ト其趣ヲ異スル所ヲ覆見スルヲ能ハサル也

ボツソナト教師ヘ左ノ件ヲ質問

問

刑法第三百八十一條ノ場合ニ於テ強盗若クハ強姦ノ罪未遂ナルキハ如何ナスヘキ乎仍ホ本條ニ依テ之ヲ罰ス可キ乎

答

日本刑法ニ於テハ數罪俱發重キニ從テ處斷スルヲ以テ一般ノ原則ト爲セハ明ニ其反對ヲ示ス場合ノ外ハ總テ一般ノ原則ニ從テ可キナリ刑法第三百八十一條ヲ見ルニ強盗強姦共ニ已遂罪ナル場合ニ適用ス可キモノトシテ未遂罪ニ適用スヘキモノニ非ス故ニ強姦強盗ノ中一ノ罪未遂ナルキハ一般ノ原則ニ從テ處斷スヘキ也

問

然ラハ附帶ノ犯罪ノ場合ニ於テハ如何例ヘハ強盗其罪ヲ免カレンカ爲メ人ヲ殺ス罪ニ付強姦若クハ故殺ノ罪未遂ナルキト雖モ仍ホ第二百九十六條ノ刑ヲ適用スヘキ乎

答

右ノ場合ニ於テハ強盗ノ罪未遂ナルト否トヲ問ハス第二百九十六條ノ刑ヲ適用ス可シ何トナレハ此場合ニ於テハ其免カレント欲スル所ノ罪重罪ナルト輕罪ナルト已遂ナルト未

遂ナルトヲ問ハス之ヲ免レンカ爲メ犯シタル故殺ハ之ヲ死刑ニ處スルモノナレハ也然レモ故殺ノ罪未遂ナルキハ未遂

罪ノ例ニ照シテ之ヲ減輕セサヘカヲサル也

問

何故ニ第三百八十一條ノ場合ト第二百九十六條ノ場合トノ間ニ右ノ差異アル乎

答

第三百八十一條ノ場合ニ於テ強盗ト強姦トハ全ク關係ナキ罪ナリ故ニ右ノ條ハ數罪俱發重キニ從テ處斷スル變法ニシテ其強盗ト強姦ノ罪ヲ合セテ死刑ニ處スルモノナリ決シテ強姦ノ罪ノミヲ死刑ニ處スルニ非ス又強盗ノ罪ノミヲ以テ死刑ニ處スルニアララス反之第二百九十六條ノ場合ニ於テ其罪ヲ免カレント欲セシ罪ト故殺ノ罪トヲ合セテ死刑ニ處スルニ非ス罪ヲ免カレントカ爲メ行ヒタル故殺ノミヲ以テ死刑ニ處スルモノナリ故ニ右ノ差異アリ

○奈良始審廳檢事 (十五年十月廿三日質問)

第十條私書ヲ偽造シテ未タ行使セサルモノハ既ニ其犯罪ニ着手

シタルモノトシテ未遂犯罪ノ刑ニ依リ處斷スヘキヤ

回答第十條私書偽造ハ行使シテ始メテ罪ト爲ルモノナルカ故

ニ偽造己ニ成リ行使セントシテ遂ケサルモノハ未遂犯ナリト雖モ其未タ行使スル以前ニ係ルモノハ不問ニ措クヘキモノトス

○新瀉裁判所新發田支廳詰檢事 (十四年九月七日請訓) 十五年五月二日內訓
第十六條第十四條親屬例中妾ノ名義無之候得共例ヘハ妾腹ノ子ナル者其嫡母ノ兄弟姉妹及ヒ是等ノ配偶者ハ元ヨリ親屬ナリト雖モ又生母(則父)ノ兄弟姉妹及其配偶者モ等シク親屬ニ所有之然ルニ假令一子ヲ舉グルモ父ト妾トノ間ニ於テハ親屬外ノ義ト相心得可然哉

第十章 親屬例

第百十四條

此刑法ニ於テ親屬ト稱スルハ左ニ記載シタル者ヲ云フ
一 祖父母父母夫妻
二 子孫及ヒ其配偶者
三 兄弟姉妹及其配偶者
四 兄弟姉妹ノ子及ヒ其配偶者
五 父母ノ兄弟姉妹及其配偶者
六 父母ノ兄弟姉妹ノ

○磐井始審廳檢事

(十五年三月二日質問) 十五年三月廿八日回答

刑法中他人ト稱スルハ自己ヲ除クノ外ヲ概稱スルヤ父母及ヒ子孫等ノ親屬ハ他人ニ非スシテ自己ノ部内ニ入ルヘキ因果シテ入ルトセハ第百十四條親屬例中第何項迄ヲ云フヤ例ヘハ權利義務ニ關スル證書ヲ記スルニ當テ私擅ニ父ノ姓名ヲ記載シ之ニ其實印ヲ盜用シタルカ如キ第二百八條第二項ニ問擬スルノ限ニアラサルヤ

回答第四項中他人ト稱スルハ自己ヲ除クノ外ノ總稱スル者トス

○新瀉裁判所新發田支廳詰檢事 (十四年九月七日請訓) 十五年五月二日內訓

第十六條第十四條親屬例中妾ノ名義無之候得共例ヘハ妾腹ノ子ナル者其嫡母ノ兄弟姉妹及ヒ是等ノ配偶者ハ元ヨリ親屬ナリト雖モ又生母(則父)ノ兄弟姉妹及其配偶者モ等シク親屬ニ所有之然ルニ假令一子ヲ舉グルモ父ト妾トノ間ニ於テハ親屬外ノ義ト相心得可然哉

內訓第十六條妾子ニシテ其子ヨリ妾(生母)ノ兄弟姉妹ニ對シテハ親族ノ例ニ非ス父ト妾トノ間ニ於テモ生子ノ有無ニ關セ

ス同様ナリトス

○中村始審廳檢事 (十五年五月三十一日請訓)

茲ニ甲戸主死亡シ家ニ相續スヘキ子弟ナキヲ以テ親屬協議ノ上
不得止甲ノ妻乙相續ヲ爲シ一旦戸主トナリタリ其後乙ニ丙ヲ迎
ヘ之カ妻トナシ相續ヲ讓リ現今丙戸主ノ位置ヲ占ム如斯場合乙
ハ一旦甲ノ跡相續ヲナスト雖モ假リノ相續ナレハ丙ハ乙ノ相續
人ニ非スシテ甲ノ相續人トシ甲ヲ指シ養父ト尊稱シ甲ノ父母若
クハ他家ニ甲ノ兄弟姉妹等アラハ刑法第四百十四條第一第五ノ親
屬ト稱スヘキヤ或ハ右ノ如キ變則ノ相續ナレハ丙ハ只其家名ヲ
相續ニ止マリ甲ヲ指シ先代ト稱スル迄ニテ甲ノ父母兄弟姉妹等
ニ對シ親屬ノ名稱無之哉

内訓精訓ノ趣丙ト甲ノ父母トハ養親子ノ縁義アリ又甲實子ナ
レハ丙ト甲ノ兄弟姉妹トノ縁義ハ刑法第四百十五條末頃ニ依ル
相續上ニ於テハ甲乙共ニ先代ノ戸主ト稱ス

右内務省ヘ照會同省回答十五年九月一日

中村始審裁判所檢事菊地重威請訓ノ義ニ付御照會ノ趣承知致候
戸籍上ニ於テハ甲乙共ニ先代ノ戸主ト稱シ丙ト甲ノ間柄ハ更ニ

子

七配偶者ノ祖父母父

母

八配偶者ノ兄弟姉妹

及ヒ其配偶者

九配偶者ノ兄弟姉妹

ノ子

十配偶者ノ父母ノ兄

弟姉妹

親族ノ縁義無之候得共其家ニアル甲ノ父母即チ丙ノ養父母ニ有
之他家ニアル甲ノ兄弟姉妹ハ甲實子ナレハ丙ニ於テ親族ノ縁義
有之慣例ニ候

○滋賀縣十五年一月十六日伺。全年二月十日付

第一條第百十五條中ニ云フ庶子トハ妾腹ノ子ノミニ止リ其子孫ハ親屬外ト爲シ可然哉如何

指令第一條庶子ノ子孫モ親屬ナリトス

○五所川原治安廳檢事代理警部(十五年九月十二日請訓)
(全年十月十六日内訓)

刑法第百十五條中子孫ト稱スルハ庶子曾玄孫外孫同ト有之候所右ハ其條例第百十四條第二項ニ子孫トアル二字ノ解法ニテ其二字ニ包括シタルモノヲ枚擧分明ニ掲載相成タル義ニテ而シテ庶子トハ正妻ヨリ妾腹ノ子ニ對シタル稱呼ニ可有之然レハ庶子トアレハ其妾腹ノ子ノミニ止リ庶子ノ子孫マテヲ包括シタルモノニ無之義ト解釋シ可然哉

内訓親屬例解釋請訓ノ趣ハ見込ノ通

第百十五條

祖父母ト稱スルハ高曾祖父母外祖父母同シ父母ト稱スルハ繼父母嫡母同シ子孫ト稱スルハ庶子玄孫外孫同シ兄弟姊妹ト稱スルハ異父異母ノ兄弟姊妹同シ
養子其養家ニ於ル親屬ノ例ハ實子ニ同シ

○松江裁判所檢事

(十四年十二月廿八日伺)
(十五年一月廿四日付)

刑法第百十六條 天皇三后皇太子云々天皇トハ今上ヨリ順次溯リテ上皇ヲ奉稱カ又三后トハ皇后皇太后太皇太后ノミチ奉稱カ指令天皇ト奉稱スルハ伺ノ通三后ト奉稱スルモ亦皇后ヨリ順次溯リテ奉稱スルノ意義ナリトス

第二編 公益ニ關スル重罪輕罪

第一章 皇室ニ對スル罪

第百十六條

天皇三后皇太子ニ對シ危害ヲ加ヘ又ハ加ントシタル者ハ死刑ニ處ス

第三百十七條

天皇三后皇太子ニ對シ不敬ノ所爲アル者ハ三月以上五年以下ノ重禁錮ニ處シ二十圓以上二百圓以下ノ罰金ヲ附加ス皇陵ニ對シ不敬ノ所爲アル者亦同シ

十五年十月 日賀疑
全年十一月二日回答

○名古屋始審廳判事
第二條刑法第十七條第二項「皇陵」トハ山陵并皇后御陵ノミチ指シタルモノニテ皇妃并皇族ノ御墓ハ本條ヲ以テ論スルノ限リニ在ラサル乎

(參考) 明治七年太政官達第百二号ニ山陵并皇后御陵皇妃(國母ニシテ立后ナキヲ云フ) 皇子皇女御墓云々トアリ

回答第二條退テ御答ニ及フヘシ
○札幌始審廳檢事 (十五年九月十八日伺 同月廿二日付電報)

風俗ヲ害ス可キ猥褻ノ寫真ト共ニ主上御寫真ヲ道路ニ展出販賣セリ警察官取押ヘ送致ス訊問中主上ノ御寫真タルコトヲ知り買賣シタルコトヲ供出ス猥褻ノ寫真ハ刑法第四十三條第一項ニヨリ沒收スルモ主上ノ寫真ヲ應禁シタルノ明文ナシ然レトモ被告ニ下ケ渡スハ不都合ニ覺ユ處分方至急御指揮ヲ仰シ
指令主上ノ御寫真ヲ販賣スルモ刑法ノ問フ所ニアラサレハ該品ハ取上可キ者ニアラス但其懸下ニ於テ兼テ販賣ヲ禁シタルニ於テハ該品取上ケ宮内省ニ納還ス可シ

第三百十八條

皇族ニ對シ危害ヲ加ヘタル者ハ死刑ニ處ス其危害ヲ加ヘントシタル者ハ無期徒刑ニ處ス

第一百十九條

皇族ニ對シ不敬ノ所
爲アル者ハ二月以上
四年以下ノ重禁錮ニ
處シ十圓以上百圓以
下ノ罰金ヲ附加ス

皇族ニ對シ不敬ノ所
爲アル者ハ二月以上
四年以下ノ重禁錮ニ
處シ十圓以上百圓以
下ノ罰金ヲ附加ス

第一百二十條

此章ニ記載シタル罪
ヲ犯シ輕罪ノ刑ニ處
スル者ハ六月以上二
年以下ノ監視ニ付ス

第二章 國事ニ關ス

ル罪

第一節 内亂ニ關ス
ル罪

第二百一十一條

政府ヲ顛覆シ又ハ邦
土ヲ僭竊シ其他朝憲
ヲ紊亂スルヲ目的
ト爲シ内亂ヲ起シタ
ル者ハ左ノ區別ニ從
テ處斷ス
一 首魁及ヒ教唆者ハ
死刑ニ處ス
二 群衆ノ指揮ヲ爲シ

其他樞要ノ職務ヲ
爲シタル者ハ無期
流刑ニ處シ其情輕
キ者ハ有期流刑ニ
處ス

三 兵器金穀ヲ資給シ
又ハ譚般ノ職務ヲ
爲シタル者ハ重禁
獄ニ處シ其情輕キ
者ハ輕禁獄ニ處ス
四 教唆ニ乘シテ附和
隨行シ又ハ指揮ヲ
受テ雜役ニ供シタ
ル者ハ二年以上五

年以下ノ輕禁錮ニ
處ス

二百二十八條ノ規定ニ依リテ
内亂ヲ起スル者ハ已ニ
刑ニ同シ

第二百二十九條

内亂ヲ起スノ目的ヲ
以テ兵器彈藥船舶金
穀其他軍備ノ物品ヲ
却掠シタル者ハ已ニ
内亂ヲ起シタル者ノ
刑ニ同シ

第二百二十三條

政府ヲ變亂スルノ目的ヲ以テ人ヲ謀殺シタル者ハ兵ヲ擧ルニ至ラスト雖モ内亂ト同ク論シ其教唆者及ヒ下手者ヲ死刑ニ處ス

第二百二十四條

前三條ノ罪ハ未遂犯罪ノ時ニ於テ乃チ本刑ヲ科ス

第二百二十五條

兵隊ヲ招募シ又ハ兵器金穀ヲ準備シ其他内亂ノ豫備ヲ爲シタル者ハ第二百二十一條ノ例ニ照シ各一等ヲ減ス

内亂ノ陰謀ヲ爲シ未タ豫備ニ至ラサル者ハ各二等ヲ減ス

内亂ノ豫備又ハ陰謀ヲ爲スト雖モ未タ其事ヲ行ハサル前ニ於テ官ニ自首シタル者ハ本刑ヲ免シ六月以上三年以下ノ監視ニ付ス

第二百二十六條

内亂ノ豫備又ハ陰謀ヲ爲スト雖モ未タ其事ヲ行ハサル前ニ於テ官ニ自首シタル者ハ本刑ヲ免シ六月以上三年以下ノ監視ニ付ス

○白河始審廳判事 十五年五月廿四日請訓 同年六月二日內訓
 內亂ノ情ヲ知テ犯人ニ集會所ヲ給與シタル者ハ二年以上五年以
 下ノ輕禁錮ニ處ストアリ又第百二十六條內亂ノ豫備云々官ニ自
 首シタル者ハ本刑ヲ免シ云々トアリ茲ニ甲者アリ内亂ノ情ヲ知
 テ甲者(犯人)ニ集會所ヲ給與シタル後甲者其目的ヲ遂ケル能ハサ
 ルヲ察シ其事ヲ行ハサル前ニ於テ乙者ト共ニ官ニ自首セシ時ニ
 方リ乙者ニ於テハ第八十五條ニ照シ本刑ニ一等ヲ減スル者ニ該
 レリ然ル時ハ其情狀重キ者ハ全免シ其輕キ者ハ僅ニ一等ヲ減ス
 ルニ止リ權衡穩當ナラサルモノ、如シ如此場合ニ於テハ乙者モ
 仍ホ百二十六條ニ依リ全免セシムルヲ得ヘキ乎
 內訓請訓ノ趣乙者ハ一等ヲ減スルニ止リ全免スルノ限ニアラ
 ス

第二百二十七條

內亂ノ情ヲ知テ犯人
 ニ集會所ヲ給與シタ
 ル者ハ二年以上五年
 以下ノ輕禁錮ニ處ス

第二百二十八條

內亂ニ乘シテ人ノ身
 體財產ニ對シ内亂ノ
 目的ニ關セサル重罪
 輕罪ヲ犯シタル者ハ
 通常ノ刑ニ照シ重キ
 ニ從テ處斷ス

第二節 外患ニ關スル罪

第二百二十九條

外國ニ與シテ本國ニ抗敵シ又ハ外國ト交戰中同盟國ニ抗敵シ其他本國ニ背叛シテ敵兵ニ附屬シタル者ハ死刑ニ處ス

第三百十條

交戰中敵兵ヲ誘導シテ本國管内ニ入ラシメ若クハ本國及同盟國ノ都府城塞又ハ兵器彈藥船艦其他軍事ニ關スル土地家屋物件ヲ敵國ニ交付シタル者ハ死刑ニ處ス

第三百三十一條

本國及同盟國ノ軍情機密ヲ敵國ニ漏泄シ若クハ兵隊屯集ノ要地又ハ通路ノ險夷ヲ敵國ニ通知シタル者ハ無期流刑ニ處ス敵國ノ間諜ヲ誘導シテ本國管内ニ入ラシム若クハ之ヲ藏匿シタル者亦同シ

本國管内ニ人々
於陣中竊取シテ
第三百三十條

第三百三十二條

陸海軍ヨリ委任ヲ受ケ物品ヲ供給シ及ヒ工作ヲ爲ス者交戦ノ際敵國ニ通謀シ又ハ其賂遺ヲ收受シテ命令ニ違背シ軍備ノ缺乏ヲ致シタル時ハ有期流刑ニ處ス

第三百三十條
第三百三十一條
第三百三十二條

第三百三十三條

外國ニ對シ私ニ戰端ヲ開キタル者ハ有期流刑ニ處ス其豫備ニ止ル者ハ一等又ハ二等ヲ減ス

第三百三十四條

第三百三十四條

外國交戦ノ際本國ニ於テ局外中立ヲ布告シタル時其布告ニ違背シタル者ハ六月以上三年以下ノ輕禁錮ニ處シ十圓以上百圓以下ノ罰金ヲ附加ス

第三百三十五條

此章ニ記載シタル罪
ヲ犯シ輕罪ノ刑ニ處
スル者ハ六月以上二
年以下ノ監視ニ付ス

以下ノ罪ニ處スル者ハ
六月以上二年以下ノ
監視ニ付ス
一、
二、
三、
四、
五、
六、
七、
八、
九、
十、
十一、
十二、
十三、
十四、
十五、
十六、
十七、
十八、
十九、
二十、
二十一、
二十二、
二十三、
二十四、
二十五、
二十六、
二十七、
二十八、
二十九、
三十、
三十一、
三十二、
三十三、
三十四、
三十五、
三十六、
三十七、
三十八、
三十九、
四十、
四十一、
四十二、
四十三、
四十四、
四十五、
四十六、
四十七、
四十八、
四十九、
五十、
五十一、
五十二、
五十三、
五十四、
五十五、
五十六、
五十七、
五十八、
五十九、
六十、
六十一、
六十二、
六十三、
六十四、
六十五、
六十六、
六十七、
六十八、
六十九、
七十、
七十一、
七十二、
七十三、
七十四、
七十五、
七十六、
七十七、
七十八、
七十九、
八十、
八十一、
八十二、
八十三、
八十四、
八十五、
八十六、
八十七、
八十八、
八十九、
九十、
九十一、
九十二、
九十三、
九十四、
九十五、
九十六、
九十七、
九十八、
九十九、
一百、
一百一、
一百二、
一百三、
一百四、
一百五、
一百六、
一百七、
一百八、
一百九、
二百、
二百一、
二百二、
二百三、
二百四、
二百五、
二百六、
二百七、
二百八、
二百九、
三百、
三百一、
三百二、
三百三、
三百四、
三百五、
三百六、
三百七、
三百八、
三百九、
四百、
四百一、
四百二、
四百三、
四百四、
四百五、
四百六、
四百七、
四百八、
四百九、
五百、
五百一、
五百二、
五百三、
五百四、
五百五、
五百六、
五百七、
五百八、
五百九、
六百、
六百一、
六百二、
六百三、
六百四、
六百五、
六百六、
六百七、
六百八、
六百九、
七百、
七百一、
七百二、
七百三、
七百四、
七百五、
七百六、
七百七、
七百八、
七百九、
八百、
八百一、
八百二、
八百三、
八百四、
八百五、
八百六、
八百七、
八百八、
八百九、
九百、
九百一、
九百二、
九百三、
九百四、
九百五、
九百六、
九百七、
九百八、
九百九、
一千、
一千一、
一千二、
一千三、
一千四、
一千五、
一千六、
一千七、
一千八、
一千九、
二千、
二千一、
二千二、
二千三、
二千四、
二千五、
二千六、
二千七、
二千八、
二千九、
三千、
三千一、
三千二、
三千三、
三千四、
三千五、
三千六、
三千七、
三千八、
三千九、
四千、
四千一、
四千二、
四千三、
四千四、
四千五、
四千六、
四千七、
四千八、
四千九、
五千、
五千一、
五千二、
五千三、
五千四、
五千五、
五千六、
五千七、
五千八、
五千九、
六千、
六千一、
六千二、
六千三、
六千四、
六千五、
六千六、
六千七、
六千八、
六千九、
七千、
七千一、
七千二、
七千三、
七千四、
七千五、
七千六、
七千七、
七千八、
七千九、
八千、
八千一、
八千二、
八千三、
八千四、
八千五、
八千六、
八千七、
八千八、
八千九、
九千、
九千一、
九千二、
九千三、
九千四、
九千五、
九千六、
九千七、
九千八、
九千九、
一萬、
一萬一、
一萬二、
一萬三、
一萬四、
一萬五、
一萬六、
一萬七、
一萬八、
一萬九、
二萬、
二萬一、
二萬二、
二萬三、
二萬四、
二萬五、
二萬六、
二萬七、
二萬八、
二萬九、
三萬、
三萬一、
三萬二、
三萬三、
三萬四、
三萬五、
三萬六、
三萬七、
三萬八、
三萬九、
四萬、
四萬一、
四萬二、
四萬三、
四萬四、
四萬五、
四萬六、
四萬七、
四萬八、
四萬九、
五萬、
五萬一、
五萬二、
五萬三、
五萬四、
五萬五、
五萬六、
五萬七、
五萬八、
五萬九、
六萬、
六萬一、
六萬二、
六萬三、
六萬四、
六萬五、
六萬六、
六萬七、
六萬八、
六萬九、
七萬、
七萬一、
七萬二、
七萬三、
七萬四、
七萬五、
七萬六、
七萬七、
七萬八、
七萬九、
八萬、
八萬一、
八萬二、
八萬三、
八萬四、
八萬五、
八萬六、
八萬七、
八萬八、
八萬九、
九萬、
九萬一、
九萬二、
九萬三、
九萬四、
九萬五、
九萬六、
九萬七、
九萬八、
九萬九、
十萬

第三章 靜謐ヲ害スル罪

第一節 兇徒聚衆ノ罪

第三百三十六條

兇徒多衆ヲ嘯聚シテ
暴動ヲ謀リ官吏ノ說
諭ヲ受クルト雖モ仍
ホ解散セサル者首魁
及ヒ教唆者ハ三月以
上三年以下ノ重禁錮
ニ處ス附和隨行シタ
ル者ハ二圓以上五圓
以下ノ罰金ニ處ス

第三百三十七條

兇徒多衆ヲ嘯聚シテ官廳ニ喧鬧シ官吏ニ強逼シ又ハ村市ヲ騷擾シ其他暴動ヲ爲シタル者首魁及ヒ教唆者ハ重懲役ニ處ス其嘯聚ニ應シ煽動シテ勢ヲ助ケタル者ハ輕懲役ニ處シ其情輕キ者ハ一等ヲ減ス附和隨行シタル者ハ二圓以上二十圓以下ノ罰金ニ處ス

第三百三十八條

暴助ノ際人ヲ殺死シ若クハ船屋船舶倉庫等ヲ燒燬シタル時ハ現ニ手ヲ下シ及ヒ火ヲ放ツ者ヲ死刑ニ處ス首魁及ヒ教唆者情ヲ知テ制セサル者亦同シ

○姫路始審廳判事

(十四年十二月二日誦訓
十五年一月十九日內訓)

第三百三十八條此場合ニ於テ首魁及ヒ勢ヲ助ケタル者人ヲ毆打創傷シ因テ癱篤疾ニ致シタルノ刑ハ第三百三十七條ニ記スル如ク首魁ニ付テハ重懲役勢ヲ助ケタル者ニ付テハ輕懲役ノ刑ノ中ニ包含シタル者ト解釋スヘキヤ又ハ二罪俱發ノ例ニ依リ處斷スヘキヤ

內訓後段意見ノ通

(理由)本條ニハ人ヲ毆打創傷シ因テ癱篤疾ニ致シタル等ノ所爲ヲ包含セス是等別ニ刑法ニ正條アレハナリ

第二節 官吏ノ職務

ヲ行フヲ妨害スル
罪

第三百三十九條

官吏其職務ヲ以テ法
律規則ヲ執行シ又ハ
行政司法官署ノ命令
ヲ執行スルニ當リ暴
行脅迫ヲ以テ其官吏
ニ抗拒シタル者ハ四
月以上四年以下ノ重
禁錮ニ處シ五圓以上
五十圓以下ノ罰金ヲ
附加ス

暴行脅迫ヲ以テ其官
吏ノ爲ス可カラサル
事件ヲ行ハシメタル
者亦同シ

第四百十條

前條ノ罪ヲ犯シ因テ
官吏ヲ毆傷シタル者
ハ毆打創傷ノ各本條
ニ照シ一等ヲ加ヘ重
キニ從テ處斷ス

第四百十一條

官吏ノ職務ニ對シ其
目前ニ於テ形容若ク
ハ言語ヲ以テ侮辱シ
タル者ハ一月以上一
年以下ノ重禁錮ニ處
シ五圓以上五十圓以
下ノ罰金ヲ附加ス
其目前ニ非スト雖モ
刊行ノ文書圖畫又ハ
公然ノ演說ヲ以テ侮
辱シタル者亦同シ

○姫路始審廳判事

(十四年十二月二日請訓
十五年一月十九日内訓)

第四百十一條一ヶ所又ハ數ヶ所ノ街衢ニアル牆壁等ニ文字圖畫
ヲ掲記シ又ハ之ヲ紙片等ニ記シ(刊行ニ)テ其牆壁ニ貼付シ或ハ
之ヲ街衢ニ榜示シタル如キ其文書圖畫ハ刊行ニアラスト雖モ本
條第二項中ニ包含シタル者ト解釋スルヲ得ヘキヤ

内訓本條第二項ニ包含セス

十五年十月十九日改正内訓見込ノ通

○愛媛縣 十五年三月廿二日伺。全年四月七日付

從來甲村中ニ郡役所アリテ事務取扱處該村ハ郡ノ僻陬ニアリ
テ萬般不便尠カラサルニヨリ更ニ中央ナル乙村ニ移轉セラレシ
トテ上申セン爲メ郡内各村總代(凡ソ百)縣官巡回ノ際面會ヲ乞
ヒ其所ニ集合シ縣官并ニ該郡長郡吏各戸長列席其席ニ於テ右惣
代人中ノ一人突然縣官ニ向テ我ハ自由ヲ主義トスル者ナリ若シ
郡役所ヲ我乙村ニ移轉セラルトキハ是迄率先衆ヲ自由ノ佳域
ニ至ラシメシ萌芽モ忽チ官權黨ノ爲メニ壓セラレ或ハ郡吏ヲ尊
敬スルノ極卑屈ニ陥リ諂諛等ヲナスモノアルニ至ラハ實ニ遺憾
トスル處ナリ此郡役所ハ惡魔ナリ惡魔ノ郡役所ハ僕素ヨリ忌避

官吏ノ職務ヲイフヲ妨害フル罪

スル所ナリ雖然全郡ノ實益ト其便利ト衆望ノ歸スル處トナリ以テ見レハ僅々一二ケ村ノ自由ハ水泡ニ歸スルモ亦止ムヲ得サルナリ又公益ノ爲メニハ一身ノ忌避ハ捨置カサルヲ得サルナリ依テ移轉ヲ望ム云々ト述ヘタリ右郡役所ヲ指テ惡魔ト云フハ郡長ノ職務ニ對スルノ言語ニ止ルノミナラス現ニ郡長目前ニ於テ之ヲ侮辱シタル者ナルヲ以テ無論刑法第百四十一條ニ該當スル者ト相見込候得共爲念相伺候也

指令伺ノ通

(理由)官吏ノ職務ニ對シ云々トアルノミニンテ官署ニ對スル明文ナシト雖モ刑法草案第百七十一條ニ官署ニ對シ侮辱シタル罪ヲ揭ケアリシヲ故ラニ刪除シタルヲ以テ觀レハ官署ニ對シテ犯シタル時ハ勿論百四十一條官吏ノ職務ヲ侮辱シタル者ヲ以テ處分スルノ趣意ナルヘシ

○兵庫縣 十五年五月廿九日伺。全年六月廿三日付。客年三月内務省乙第十五號御達中分課例押丁ノ部ヲ闕スルニ囚徒監房出入ノ際其身体衣服ヲ搜檢シ服役者ヲ督促シ控繩戒護等ニ從事ストアリ由之觀之ニ同シシ備人トハ難ヒ押丁ハ他ノ教誨

師警師授業手等ト異ナリ戒護上看守ニ及ハサルモ又其一部分ノ責任アルハ論ヲ俟タサル儀ト存候依テ其職務ヲ行フニ當リ職權ノアル處左ニ相伺候

茲ニ被告人某甲公判法庭ノ召喚ニヨリ押丁乙某ヲ控繩押送セシメタルニ當日審判已ニ終リテ告ケ退庭ノ時(判事檢事共ニ當リ傍聽ノ群聚中或ル一人ノ者)後ニ被告人ノ(退席ノ後)ニ弟タルヲ知ル(某甲ニ對シ談話ヲ試ムルニ某甲ハ之ニ應答スルヲ以テ乙某ハ之ヲ制止ナスモ何分群聚雜沓ノ中ニ付闕入ル、模様ナシ故ニ乙某ハ其中間ニ立入り某甲ヲ引除ケントセシニ某甲ノ辨護人丙某ハ之ヲ自辯スルヤ否馳走來リ乙某カ某甲ヲ毆打シタリト主張シ刺ハ大聲ヲ發シ乙某ハ現行犯罪人ナリ斯ノ如キ暴行人速ニ捕縛アレト法庭ニ詰合ノ巡査ニ告ルモ乙某ニ於テハ素ヨリ斯ル所爲アラサルコトニ付甲某ヲ囚人扣所ノ方ニ引致セントスルニ復丙某ハ乙某ノ胸部ヲ支サヘテ曰ク何處ニ去ルヤ將ク逃レントスルカ又曰押丁如キノ徒ハ逃逸スルノ憂アリト然ルモ巡査ニ於テハ素ヨリ乙某カ毆打ノ所爲アリシヲ見認メサルノミナラス某甲某モ毆打セラレシコトナシト陳フルヲ以テ敢テ之ニ關與セサリシ而ルニ尙ホ丙某ハ乙某

官吏ノ職務ヲ行フヲ妨害スル罪

ニ尾行シ終ニ囚人扣所迄ニ至リ種々之ヲ罵詈シタリ
右ニ陳ル事實ニ據レハ乙某ハ職務上ニ就キ甲某ガ他人ト私語ス
ルヲ制止シ且退庭引致セントスルモノタリ然ルヲ丙某ハ疎暴ニ
モ無實ノ事ヲ以テ乙某ニ迫ルノミナラス公衆ノ前ニ於テ之ヲ侮
辱シ且乙某ガ被告人甲某ヲ引致セントスルヲ妨ケ亦乙某カ甲某
ヲ毆打シタリトノヲ上告書ニナシ之ヲ檢事ニ上申セリ抑始メ
丙某ガ乙某ニ對シ人ヲ毆打シタルノ犯人ナリト巡查ニ告ケ又檢
事ニ上申セシハ固ヨリ違警事件タルヲ以テ其告發ノ効力ナカ
シトハ雖モ乙某ノ職務ヲ行フニ當リ斯ル無實ノ事ヲ以テ之ヲ侮
ルヘ辱シ且ツ妨害ヲ爲スハ甚タ不當ノミナラス將來囚徒ノ戒護
上ニ於テモ多少影響ヲ及ストノ憂ナシトセス之ニ由テ一應忠考
スルニ押丁ナルモノハ刑法各條中記載ノ官吏ヲ以テ論シ難キカ
故丙某ノ所爲ハ刑法第四百一十一條ノ犯罪トシテ訴フルヲ得サ
ルモノ、如シト雖モ尙ホ之ヲ再思スレハ押丁ノ職掌タル前記内
務省乙某十五號御達ノ明文ニヨルモ緊要ノ職務ニシテ看守長及
ヒ看守ニ亞キ他ノ教誨師授業手等ト日ヲ同フシテ論スヘカラス
若シ將來頻リニ斯ル侮辱ヲ受クルハ囚徒戒護上差支ヲ生シ其

患者診ケナラス然レハ則チ丙某ノ所爲ヲ不問ニ付スル理ハ萬々
アルヘカラス儀ト自信致候然レモ他ニ正條ナキヲ以テ右ノ場合
ニ於テハ尙ホ官吏職務ヲ行ラキト同シク刑法第四百一十一條ノ犯
罪トシテ法司ニ訴ヘ其處分ヲ要求スルヲ得ヘキヤ若シ刑法第
百四十一條ニヨルヘカラサルモノトセハ乙某一己ノ資格ヲ以テ
第四百二十六條ニヨリ違警罪裁判所ニ告訴シ得ルハ勿論ナレモ
右檢事ニ上申シタル廉ハ其棄却シタルト否トニ拘ハラヌ仍ホ認
告トシ訴フルヲ得ヘキヤ

指令末項伺ノ通

(理由) 別紙參照(之)

十四年内務省乙第十五号達ニ據ルニ押

丁ハ傭人ニシテ官吏ニ非サルカ故ニ伺面引例ノ場合ニ於テ丙
者ノ所爲ハ刑法第四百一十一條ニ依リ官吏ノ職務ヲ侮辱シタ
ル者トナスヲ得ス抑違警罪ハ告發ヲ許サ、ルノ先例アリト

雖モ同法第三百五十五條ニ依リ認告トナスヲ至當ト考量ス

○嶋根縣 十五年七月廿四日伺。全年全月廿七日付電報

刑法第四百一十一條第二項ニアル其目前ニ非スト雖モ云々トハ官
吏ヲ指名セス唯政府ト云フガ如キモ含蓄スルヤ電報ニテ御指令

官吏ノ職務ヲ行フヲ妨害スル罪

アレ

指令右ハ官吏ヲ指名セスシテ唯政府ト云フカ如キモ官吏ノ職務ニ對スル侮辱ト認ム可キ者ハ總テ刑法第四百一條ニ合著シタル者ト心得ヘシ

○松江始審廳檢事 十五年七月廿七日伺。全年八月十五日付第四條新聞雜誌雜報等ニ外國政事ノ得失ヲ論シ毫モ我國ノ政事ヲ言ハスト雖モ暗ニ我成法ヲ誹毀スルカ文ハ官吏ノ職務ニ對シ侮辱スルノ意ヲ寓スル者ト認メタルハ刑法若クハ新聞條例ニ依テ罰セラル可キ哉

指令第四條伺ノ通

(理由) 第四條名テ何事ニ託ズルモ我成法ヲ誹毀シ官吏ノ職務ヲ侮辱スルノ意ヲ寓スル者ハ新聞條例及ヒ刑法ニ依リ處分スヘシ

第五條前條ノ如キ論文刑法若クハ新聞紙條例ニ觸レスト雖モ國安ヲ妨害スルノ恐れアリト認メタル特別段地方官ニ報告スルニ及ハサルカ

指令第五條國安ヲ妨害スルノ恐れアリト認ムル者ハ地方官ニ

通報ス可シ

(理由) 第五條本條伺ハ充分ノ了解ニ非サレハ發行ヲ停止シ若クハ禁止スヘキモノト認メタル者ヲ地方官ニ報知スルニ及ハサルヤト謂フヲ伺フタル者ト思考セリ地方官檢事ハ同シク行政官ナルヲ以テ如此事件アルニ臨メハ互ニ通報シテ治務ヲ助ク可キ者ト考量ス

○石川縣 十五年七月廿七日伺。全年九月廿二日付電報縣會議場ニ於テ縣令ヨリ付シタル議案ヲ審議スルニ當リ縣令ノ施政如何ニ論及シ之ヲ侮辱シ又ハ所屬官吏ノ職務ニ對シ侮辱スル者アルハ府縣會議規則ニ依リ處分スルノ外臨席警部ニ於テ現行犯ノ處分ヲ爲スヘキ哉

指令伺之通
(理由) 內務省合議ノ上

官吏職務ヲ行フヲ妨害スル罪

三百五十五

○滋賀縣 十四年十一月廿一日質問。全年十二月六日回答
 刑法第四百二十二條以下ニ已決ノ囚徒逃走シタル者及ヒ他人ノ罪ヲ免カレシメシコトヲ圖リ其罪証トナルヘキ物件ヲ隠蔽シタル者ノ刑名アリ違警罪ノ勾留人逃走シ及ヒ違警罪ノ罪証ヲ他人ノ爲メ隠蔽シタルモノモ同様ノ義カ
 回答見解ノ通

(理由) 第二條刑法第四十二條ニ既決ノ囚徒トアルハ重輕罪及ヒ違警罪ノ已決ノ囚徒ヲ云フ他人ノ罪ヲ免カレシメシコトヲ圖リ其罪証トナルヘキ物件ヲ隠蔽シタル者(刑法第五十二條)ハ其他人ノ已決未決ニ拘ハラズ既ニ發覺シタル罪人ヲ隠匿スルヲ云フ是亦重罪輕罪違警罪ヲ分タサルコト猶已決ノ囚徒ニ異ナルコトナキヲ以テ違警罪ノ拘留人(即チ已決囚徒)逃走シタル者ハ第四百二十二條ニ照シ違警罪ノ罪証ヲ隠蔽シタル者ハ第五百十二條ニ照シ處分スヘキモノトス

○滋賀縣 十五年一月十六日伺。全年二月十日付
 無期徒刑ニ處セラレタル囚徒逃走シタル時ハ第四百二十二條ニ依リ裁判宣告シ仍ホ獄司ニ於テ監獄則第百九條ニ依リ處分ス可ヤ

第三節 囚徒逃走ノ

罪及ヒ罪人ヲ藏匿スル罪

第四百二十二條

已決ノ囚徒逃走シタル者ハ一月以上六月以下ノ重禁錮ニ處ス若シ獄舎獄具ヲ毀壞シ又ハ暴行脅迫ヲ爲シテ逃走シタル者ハ三月以上三年以下ノ重禁錮ニ處ス

司法省ヨリ十五年五月廿二日内訓

指令伺之通

○長崎縣 十五年二月二日伺。全年三月二日付

第一條舊法新律綱領改定律例ニ依リ禁獄及ヒ懲役終身ノ刑ニ處
セテタル者逃走又ハ重罪輕罪ヲ犯ス者如何處分可相成哉

指令新法實施以前逃走并ニ他ノ罪ヲ犯シタル者原刑懲役終身
ナレハ尙ホ棒鎖ニ處シ原刑禁獄ナレハ新舊ノ法ヲ比照シ輕キ
ニ從テ處斷ス

○白河輕罪廳判事 十五年三月十七日伺。全年四月六日付

第一條刑法第四十二條已決ノ囚徒逃走スル者ハ云々トアリ右
ハ無期徒刑ヲ除キ他ノ已決囚徒ヲ處分スル法律ノ如シト雖無
期徒刑ノ者押解ノ途中又ハ外役先キヨリ逃走シタル者ノ如キハ
裁判官ニ於テ仍ホ該條ニ照シ刑名ヲ宣告スルニ止ルヘキヤ將タ
刑法第五條ニ照シ監獄則ヲ他ノ法律規則ト見做シ該則第百九條
ニ依リ懲罰スル旨ヲ宣告スヘキヤ

指令前段伺ノ通

(理由) 刑法第四百二十二條ハ刑ノ無期有期ニ拘ハラヌ總テノ
犯則ニ適用スヘキ者トス監獄則ノ懲罰ハ獄司ノ權内ニ屬ス

無期徒刑ノ囚徒又罪ヲ
犯シタル時ハ裁判所
ニ於テ刑法各本條ニ
依リ裁判宣告ヲ爲シ
タル後仍ホ司獄官吏
ニ於テ監獄則ニ依リ
懲罰スル義ト心得ヘ
シ此旨及内訓候也

ル者ニシテ裁判官ノ干渉スヘキ者ニアラス

第二條無期徒刑ノ者押解ノ途中又ハ外役先ニ於テ重罪輕罪違警
罪ヲ犯シタルハ刑法各正條ニ照シ第一條第二項ノ如ク相心得
可然哉

指令伺ノ通

○弘前始審廳檢事 (十五年三月廿四日請訓)

(全年四月十一日内訓)

第一條懲役終身服役中明治十四年十二月三十一日以前ニ逃走シ
同日以前外ニ在テ又懲役終身以下ノ罪ヲ犯シタル者十五年一月
一日以後ニ至リ捕ニ就ク時之ヲ新法ニ照スニ無期徒刑ノ者又罪ヲ
犯シタル時ノ處分法ナキカ故ニ新舊比照ヲ爲ス能ハス又監獄則
ニ於テモ頒布以前ノ犯罪ニ及ホスコト能ハサル者ト存候故右等ハ
毫モ罰スヘキ法ナク總テ不問ニ置クヘキ等ニ候哉

第二條明治十四年第八十一号新舊比照法第十三條ニ舊法ニ於テ
棒鎖ニ當ル者ハ仍ホ棒鎖ニ處スト有之候ハ、前條ノ如ク新法ニ
於テ處分法ナキモノモ仍ホ舊法ニ照シテ棒鎖ニ處スヘキ特別ノ
法ト心得可然哉

内訓請訓ノ概第一二條其逃走ノ罪ハ刑法第四百二十二條以下ノ

囚徒逃走及罪人ヲ藏匿スル罪

刑ニ該リ外ニ在テ又罪ヲ犯シタル者ハ刑法ノ各本條ニ從ヒ初
犯トナシ新舊ノ法ヲ比照スルヲ得ヘシト雖モ其外ニ在テ犯シ
タル罪新舊法ニ於テ共ニ死刑ニ當ル時又ハ舊法ニ於テ死刑ニ
新法ニ於テ無期刑以下ニ該ル時ノ外ハ明治十四年第八十一号
布告第十三條ニヨリ仍ホ棒鎖ニ處ス但新法ニ於テ無期刑ニ處
セラレタル者再ヒ罪ヲ犯シタル時ハ刑法第九十一條以下ニ從
テ處斷シ第九十五條ニ從ヒ其執行ヲ爲サシムヘキ儼ト心得ヘ
シ

○岡山縣 十五年三月三十日伺。全年四月十二日付

刑餘并不論罪懲治者親族情願等ニ係ル懲治人獄則違犯者處分ノ
義ハ監獄則第五百五條ノ明文モ有之候得共逃走未遂犯已遂犯等處
分ノ儀ハ刑法治罪法共正條不相見刑法第四百四十二條ヨリ第四百
十五條迄ノ明文有之候得共右ハ全ク已未決囚ニ關スル正條ニシ
テ懲治人ニ適要ス可カラサルハ言ヲ待タス尤モ從來ハ違警罪ヲ
以テ處分致來候得共是又少シク穩當ナラサル様被考候ニ付前條
沙犯者照例ニ照準處分シ可然哉
指令洞ノ趣懲治人ノ逃走ハ刑法ノ問フ處ニアラス

○岡崎始審廳判事

(十五年三月六日請訓
全年四月十三日內訓)

明治十四年第八十一号布告第十三條ハ例ヒハ十四年中懲役場逃
走囚徒ヲランニ之ヲ新舊法ニ照シ假令新法輕キモ仍ホ舊法ノ
棒鎖ニ處スルトノ趣意ヲランカ然ルニ其囚徒外ニ在テ竊盜ヲ爲
シタル時ハ新法ニ於テ其竊盜罪ト逃走罪ト二罪俱發トシ竊盜ノ
狀重キ時ハ一ノ重キ竊盜罪ノミニ從フモノナルヤ又ハ竊盜罪ノ
上仍ホ十三條ニヨリ棒鎖ヲ加フルモノナルヤ

内訓棒鎖ニ處スヘキ逃走罪ト竊盜罪トヲ比較シ數罪俱發ノ例
ニヨリ重ニ從テ處斷ス

○天師 治安裁判所判事 (十五年三月廿五日伺
同年四月十五日付)

茲ニ懲役終身ノ囚アリ新法實施以前外役先キヨ。逃走シ未タ其
斷決ヲ經サル内新法實施後再ヒ脱監逃走シ外ニ在テ持兇器強盜
ヲ爲セリ右ハ刑法第四百四十二條(第一項)第三百七十九條及ヒ明治
九年第二十二号布告懲役人逃條例ヲ適用スヘキ罪ヲ犯シタル者
ナルヲ以テ豫審掛ニ於テ重罪裁判所ニ移スノ言渡ヲ爲シ同衙ニ
於テ數罪俱發ノ例ニ照シ一ノ重キ強盜罪ヲ以テ論シ重懲役ニ處
スヘキ所前ニ懲役終身ニ處セラレタルヲ以テ其刑ノ加フ可ラサ

囚徒逃走及罪人ヲ藏匿スル罪

旨ヲ言渡之ヲ典獄ニ交付シ典獄ニ於テ無期徒刑ノ囚徒ニ準シ監獄則第三章第九條ニ照シ處分スヘキ者カ

指令伺ノ趣重懲役ヲ宣告シ別ニ其刑ノ加フ可カラサル旨ヲ言渡ニ及ハス

前條懲役終身ノ囚無期徒刑ヲ犯シタル時ハ重罪裁判所ニ於テ更ニ無期徒刑ノ宣告ヲ爲スヘキヤ

指令伺之通

○三重縣 十五年一月廿四日伺。全年二月七日付

刑法第二編第三節ニ囚徒逃走云々トアリ右囚徒トハ未決ニ在テ

ハ豫審判事ヨリ収監狀ヲ發シタル者ヲ指ス乎又ハ既ニ拘留狀ヲ發シ拘留シタル者ハ収監狀ヲ發シタル者ト同シク囚徒ト云フ儼

ニ候哉

指令囚徒トハ非現行犯ニ於テハ拘留狀ノ執行ヲ受ケタルモノ

ト云フ現行犯ニ於テハ拘留狀ヲ受ケタル者ト否トヲ問ハス逮

捕地ヲシタル者ヲ云フ儼ト心得ヘシ

○新潟裁判所新發田支廳詰檢事 (十四年九月七日請訓) (十五年四月廿八日內訓)

第十七條治罪法第二百十二條ノ規定ニ從ヒ保證金ヲ納メ出廷ヲ

証シ保釋ヲ許サレタル者逃走シタル場合ニ於テハ只其保證金ヲ没入スルニ止ル者ニ候哉又ハ刑法第四百二十三條囚徒逃走條ニ照シ其罪原犯ヨリ重キ時ハ逃走ノ罪ヲ以テ問攝スヘキ者ニ可有之哉

又保釋人召喚ニ應シ必ス出庭セシム可キ者ヲ保證シタル者又ハ被告人ヲ責付セラレタル者ノ如キハ其被告人逃亡シタル時ハ刑法第五百十條囚徒ヲ看守スル者怠忽ヨリ逃走ニ至ラシメタルノ罪ヲ科スヘキモノト相心得可然哉

內訓第一項第二項共ニ刑法ニ照シ處罰スルノ限ニアラス

(理由) 刑法第四百十四條ハ囚徒入監中逃走シタル者ヲ罰スルニ止マリ保釋中ノ被告人ニ及ホスヲ得ス又其第五百十條ハ看守又ハ護送者囚徒ノ逃走ヲ覺ラサル者ニ付キ其刑ヲ定ムルニ過キス而テ其看守者護送者ト云フハ皆官ノ俸給ヲ受ケ公務トシテ其事ヲ行フ者ニ限ル故ニ被告人ノ出庭ヲ保證シ又ハ其責付ヲ受ケタル者ハ被告人ノ逃走ヲ覺ラスト雖モ該條ニ依テ處斷スルヲ得ス

○三重縣 十五年五月 日伺。全年七月廿二日付

囚徒逃走及罪人ヲ藏匿スル罪

刑法第四百二十二條以下ニ囚徒ノ文字アリ右囚徒トハ違警罪ヲ犯シ拘留ノ刑ニ處セラレタル者ハ含有セサル儀ニ候哉若シ合ンテ其内ニ在リトモハ刑法第二十條第二十七條ニ照シ科料ヲ換ヘテ拘留ニ處スル者モ囚徒トシ又現行犯ニテ治罪法第百二條第二項末段ニヨリ引致スル際逃走シ護送者其逃走ヲ覺ラサル者ノ如キモ同シク囚徒トシ刑法第百五十條ノ罪アル儀ニ候哉
指令違警罪ノ刑ト雖モ現ニ拘留ヲ受クル者ハ總テ囚徒ト稱ス其他ハ伺ノ通

○弘前始審廳檢事 (十五年四月廿一日請訓)

懲役終身ノ囚人明治十四年十二月三十一日以前ニ逃走シ明治十五年一月一日以後捕ニ就クキ逃走ノ罪如何處斷スヘキ儀ニ候哉右ハ本年三月廿四日付請訓ニ四月十一日付御内訓ノ趣了解仕兼候ニ付更ニ請内訓

内訓懲役終身ノ囚年中ニ逃走シ本年ニ至リ捕ニ就キタル者ハ事件ニ付先キニ内訓ニ及候趣意ハ右逃走ノ罪ハ明治十四年第八十一号布告第十三條ニ照シ新法ニ依ラスシテ舊法ニ徒ヒ棒鎖ニ處スルヲ云フ

○熊本始審廳 (十五年四月廿六日伺。 全年五月十五日付)

懲役終身ノ囚人新法實施以前逃走シ實施以後又重罪輕罪ヲ犯シ(實施後逃走シテ又重罪輕)タル時ハ死罪ヲ犯シル者ヲ除クノ外都テ監獄則第百九條ニ依リ處分スヘキ者ナルハ勿論ナリト雖モ檢事ニ於テハ法律ニ從ヒ治罪ノ手續ヲナスヘキヤ又獄則ニ依テ處分スヘキ者ニ限リ檢事ヨリ直ニ監獄署ニ付シ其署ノ處分ニ任スヘキ者ナルヤ

若シ檢事ヨリ豫審ヲ求メタル場合豫審掛ニ於テ終結ノ際之ヲ相當ノ裁判所ニ移スノ言渡ヲ爲スヘキヤ將テ監獄署ニ移スノ言渡ヲナスヘキヤ

指令伺ノ趣懲役終身ノ囚人再ヒ重罪輕罪ヲ犯シタルキハ治罪法及ヒ刑法ニ從テ刑ノ言渡ヲ爲シ其執行ヲ爲シ得ヘキ日ニ至ルヲ俟ツヘキ者ニ付監獄則ト并行シテ相觸レサルモノトス

但新法實施以前ノ逃走罪ハ明治十四年第八十一号布告第十條ニヨリ處分スヘシト雖モ他ノ重罪輕罪ト共ニ發覺シタル時ハ刑法數罪併發ノ例ニ從カワサル可カラス

○開拓使殘務掛 (十五年五月廿七日問合) (全年六月廿六日回答)

囚徒逃走及罪人ヲ藏匿スル罪

三六六
樟戸集治監ノ囚人罪ヲ犯シ輕罪以下ニ該ル者ハ司獄官吏ニ於テ
裁判シ云々ノ儀本年太政官第十六号公布ノ趣モ有之處右ハ集治
監内外ヲ論セス其囚人カ犯シタル輕罪以下ヲ裁判スル儀ニ可有
之ヤ

回答御見込ノ通

前條果シテ然ラハ全監囚人逃走シ他ニ在テ重輕罪等ヲ犯シ司法
警察官ニ於テ逮捕候節直ニ該犯ヲ集治監ヘ送付シ司獄官吏ニ於
テ裁判可致義ニ候ヤ又ハ司法警察官ヨリ當地檢察官ヘ送致同官
ヨリ集治監ヘ送付スヘキ手續ナルヤ
回答監囚人他ノ裁判管轄内ニ逃走シ罪ヲ犯シタル時ハ通常ノ
規則ニ從テ處分スヘキ儀ト存候

○弘前始審廳檢事

十五年八月廿四日請訓
全年九月十一日內訓

第一條刑法第四百二十二條初項已決ノ囚徒逃走シタル者云々トア
リ右ハ門戸墻壁ヲ踰越シ(損壞)若シハ鎖鑰ヲ開キ(損壞)逃走シ
タル者又ハ外役前(遙ニ看守ノ見張居者)ヨリ逃走シタル者ト看
守護送者等ノ懈怠ニ乘リ又ハ獄舎ノ開クニ際シ逃走シタル者ト
ノ區別ナク單ニ逃走ノ態ヲ以テ處罰スヘキ儀ニ候哉

内訓見込ノ通

○前橋輕罪廳檢事 十五年九月十八日伺。全月廿七日付

刑法第四百二十二條二項獄舎トアルハ囚徒ヲ句致スル所ノ檻リト
稱スル者ヲ單ニ指シタルモノニテ監獄ノ外圍即失來塀ノ如キヲ
破毀シテ逃走セル者ノ如キハ本項ニ依リテ論スルノ限リニアラ
サル儀ト心得可然哉

指令刑法第四百二十二條第二項ニヨリ處分ス

(理由)監獄ノ外圍即失來塀ヲ破毀シテ逃走シタル者ハ仍ホ

刑法第四百二十二條第二項ニヨリ處分スヘキモノトス

○平始審廳檢事 十五年九月十四日請訓。全月卅日付

無期流刑ノ囚徒逃走シ若クハ獄舎獄具ヲ毀壞シ又ハ暴行脅迫ヲ
爲シ其他重罪輕罪ヲ犯シタル時或ハ再ヒ重罪ヲ犯シタル時及ヒ
無期徒刑ノ囚徒違警罪ヲ犯シタル時ノ處分法ハ明治十四年
第八十一号太政官御達監獄則中ニ無之右ハ如何處分可然哉
内訓無期徒刑ノ囚徒及ヒ罪ヲ犯シタル時ハ刑法各條ニ照シ
其刑ヲ宣告シ同法第九十五條ニ從ヒ執行スヘシ獄則ニ於テ之
ヲ罰スルト否トニ關係セサル者トス

囚徒逃走及罪人ヲ藏匿スル罪

○滋賀縣 十五年一月十六日伺。同年二月十日付

未決ノ囚徒入監中裁判所へ押解セラル、途中ニ在テ逃走シ又ハ
令狀ニ依リ押解セラル、途中逃走スル時ハ入監中ト同シノ第百
四十四條ニ依リ處分スヘキヤ

指令未決ノ囚徒入監中裁判所ニ押解スル途中ニ在テ逃走シタ
ル者ハ第百四十四條ニヨリ處分ス令狀ニヨリ押解シ未タ入監
セサル者ハ本條ニヨルノ限ニアラス

(理由) 一旦令狀ヲ受ケ押解スル以上ハ別段入監シタルモノ
ト區別チ立ツヘキモノニ非サルカ如シト雖モ本條ニ於テ入
監ト明記シタルヲ以テ未タ入監セサル中ハ本條ニ依ルノ限
ニアラス

○新潟縣 十五年四月十四日伺。同月廿九日付

昨年十月第五十九号布告ニヨリ茲ニ豫審判事ノ囑托ヲ受ケ警察
官留置場ニ入置キタル被告人ハ看守人ノ隙ヲ窺ヒ該場ヲ破壊逃
走シタル者アリ右ハ未決ノ囚徒ト見做シ刑法第百四十四條ニ論
スヘキモノナルヤ

指令伺之通

第百四十四條

未決ノ囚徒入監中逃
走シタル者ハ第百四
十二條ノ例ニ同シ
但原犯ノ罪ヲ判決ス
ル時ニ於テ數罪俱發
ノ例ニ照シテ處斷ス

囚徒逃走ノ罪及ヒ罪人ヲ藏匿スル罪

(理由) 監獄則第一條ニ依レハ留置場モ亦監獄ノ一ト爲シタルヲ以テ該場ヲ逃走シタル者ハ本條ニ依リテ論ス

○富山始審廳檢事(十五年十月廿一日請訓)

昨年太政官第四十六号布告及本年丙第七号御達トニ據ルヲ得ス事故アリテ囑托ヲ要セス正管轄ニ送致スル時(一面豫審ヲ求メ置キ入監中ノ者)未決ノ囚徒途中ニ於テ逃走スル時ハ刑法第百四十四條ニ依リ適用ヲ求メ可然哉ト相考候得共明文無之ニ付仰内訓候也

内訓請訓ノ趣其見解之通

第四百四十五條
 囚徒三人以上通謀シテ逃走シタル時ハ第百四十二條ノ例ニ照シ各一等ヲ加フ

第四百四十一條

囚徒ヲ逃走セシムル
爲メ兇器其他ノ器具
ヲ給與シ又ハ逃走ノ
方法ヲ指示シタル者
ハ三月以上三年以下
ノ重禁錮ニ處シ二圓
以上二十圓以下ノ罰
金ヲ附加ス囚徒囚徒
ノ逃走ヲ致シタル時
ハ一等ヲ加フ

第四百四十七條

囚徒ヲ劫奪シ又ハ暴
行脅迫ヲ以テ囚徒ノ
逃走ヲ助ケタル者ハ
一年以上五年以下ノ
重禁錮ニ處シ五圓以
上五十圓以下ノ罰金
ヲ附加フ
若シ重罪ノ刑ニ處セ
ラレタル囚徒ニ係ル
時ハ輕懲役ニ處ス

○名古屋始審廳判事(十五年十月日發裁)

第三條刑法第四百四十七條第二項同第五百十條第二項ニ若シ重罪ノ
刑ニ處セラレタル囚徒ニ係ル時ハ云々トアリ然ルニ其囚徒舊法
ノ懲役人ニ係ル時ハ何年以上ヲ重罪トスル乎
回答第三條刑法第四百四十七條一項第五百十條一項ニ依リ處分
ス

○福島縣 十五年二月三日伺。同年同月十三日付
刑法第四百十八條及第五百十條護送者云々ト之レアルハ自然押
丁ノ如キモ含蓄セシ義乎

指令伺之通

○松江始審廳檢事 十五年四月十三日伺。同年五月十日付
囚人ヲ護送セシムル場合巡查看守押丁等ニ止ムヲ得サル差支ア
ル時ハ通常人民ヲシテ護送セシムルモ妨ケナキヤ若シ妨ケナシ
トセハ其者刑法第四百十八條又ハ第五百十條ニ記載シタル罪ヲ
犯シタル時ハ巡查看守押丁等ト同シ論セラル可キヤ

指令通常人民ヲシテ護送セシムルヲ得ス

(理由)凡ソ囚人ハ其情常ニ逃走ヲ企ツルモノ多キヲ以テ囚
人ヲ看守護送セシムルニハ宜ク其責任アルモノヲ以テセ
サル可カラス故ニ刑法第四百十八條第五百十條ニ看守護送
者ヲ罰スルノ正條ヲ制定セラレタルナラン然ルニ伺面ノ如
ク通常人民ヲシテ囚人ヲ護送セシムルコトヲ許サハ囚人ノ
護送ハ殆ント一般人民ノ義務トナルガ故ニ人民ハ余儀ナク
護送ノ責ニ當ラサルヲ得サルノミナラス若シ懈怠ニ因リ囚

第四百十八條
囚徒ヲ看守シ又ハ護
送スル者囚徒ヲ逃走
セシメタル時ハ亦前
條ノ例ニ同シ

徒ノ逃走ヲ覺フサリシ時ハ刑法第五百十條ニ依リ罰セラル
ヘシ此ノ如キ所大ナル責任ヲシテ人民ニ負擔セシムルハ正
當ニアラサルノミナラス人民ノ迷惑亦甚クシト言フヘシ
○弘前始審廳檢事 (十五年七月十八日詰訓)
刑法第四百十八條ノ場合ニ於テ囚徒ヲ逃走セシメタル者繩取人
ナル時ハ第四百十六條第四百十七條ニ依ルヘキ儀ニ候哉
内訓看守護送ノ責任アル者ハ第四百十八條ヲ以テ處分スヘキ
者トス
(理由)第四百十六條第四百十七條ハ普通ノ者ノ囚徒ヲ逃走
セシメタル時之ヲ罰スルノ法ニシテ苟モ看守護送ノ責任ア
ル者ハ其何ノ名稱アルヲ問ハス第四百十八條ヲ以テ論スヘ
キ者トス

囚徒逃走ノ罪及ヒ罪人ヲ藏匿スル罪

第四百十九條

前數條ニ記載シタル
輕罪ヲ犯サントシテ
未タ遂ケサル者ハ未
遂犯罪ノ例ニ照シテ
處斷ス

第五百十條

看守又ハ護送者其懈
怠ニ因リ囚徒ノ逃走
ヲ覺ラサル時ハ二圓
以上二十圓以下ノ罰
金ニ處ス
若シ重罪ノ刑ニ處セ
ラレタル囚徒ニ係ル
時ハ三圓以上三十圓
以下ノ罰金ニ處ス

○甲府始審廳判事 十五年一月廿二日伺。全年二月一日付
訴訟口詰ノ者警察官ヨリ現行犯者ヲ請取リタル後疎虞懈怠ニ因
リ犯者ノ逃走ヲ覺ラサルハ囚ヨリ看守ナルヲ以テ刑法第百五
十條ニ從ヒ處罰スヘキ儀ト存候得共爲念伺フ

指令伺之通

○滋賀縣警部 十五年五月一日質問。同月三日回答
看守人外役先ニ於テ囚徒ノ逃走スルヲ覺リ直ニ追跡スルモ森林
等ニテ遂ニ見失ヒ逃走セシメタルモノ、如キハ其注意行届クモ
一名ニテ數名ヲ看守シカラ及ハスシテ逃走ニ至ラシムルモノニ
テ疎虞懈怠ニ出ルモノニ非サレハ無論刑法ニ問フヘキモノ無之
儀ト相心得可然哉

回答御見込ノ通

○三重縣 十五年二月十六日伺。全年三月四日付
刑法第百五十條看守又ハ護送者其懈怠ニ因リ囚徒ノ逃走ヲ覺テ
サル時云々トアリ仮令爰ニ護送者囚徒ノ捕縄ヲ取り護送ノ途中
囚徒其捕縄取方ノ緩ナルヲ窺ヒ逃走スルヲ以テ護送者直ニ之ヲ
追跡スルモ遂ニ逮捕ヲ得サル者ノ如キハ其逃走ノ際ハ護送者ノ

囚徒逃走ノ罪及ヒ罪人ヲ藏匿スル罪

解怠ニ因ルト雖直ニ之ヲ覺知シ追跡逮捕セントスルモ力ノ及ハサルモノナレハ此條ニ適用セサル義ト相心得可然哉

指令伺ノ趣果シテ護送者ノ解怠ニ因リ囚徒ノ逃走ヲ致シタル者ハ仮令其護送者ニ於テ直ニ之ヲ覺知シ追跡スルモ終ニ捕獲シ得サル時ハ刑法第百五十條ニヨリ處分スヘキ儀ト心得ヘシ

○長崎縣 十五年三月九日伺

看守押丁囚徒ノ逃走ヲ不覺時ハ刑法第百五十條ニ因リ相當處分セラレ候處其解怠ニアラサル者仮令ハ一身以テ多囚ヲ看護スルニ當リ各囚戒具ヲ絶テ東西ニ逃走スル如キハ其一ヲ追捕セリ自他ニ力ノ及ハサルヤ當然ナリ如斯ハ刑法ヲ以テ處斷スルノ限リニアラスト思惟スルヲ以テ殊更ニ裁判官ノ處分ヲ要セス可然哉
内務省ヨリ協議

別紙長崎縣令ヨリ伺不覺失囚ノ件伺ノ通可及指令見込ニ付御省御意見如何

内務省へ回答 十五年四月十七日

囚徒ノ逃走看守押丁ノ解怠ニ原由スルコト非サレハ刑法第百五十條ノ問ヲ所ニ非サルヲ以テ異存ナキ回答アリ

○愛知縣 十五年三月廿四日伺。 全年四月廿六日付

巡查ニシテ看守又ハ護送中失囚スル者其事實幾分ノ粗漏又ハ不注意アルコト止リテ直ニ之ヲ解怠ト目ス可カラサル者ハ巡查懲罰例ニ據リ處分不苦哉或ハ幾分ノ粗漏不注意モ推シテ解怠ノ一部トシ刑法第百五十條ニ照シ問罪可相成筋ニ候哉

指令伺ノ趣巡查看守護送中失囚スル者解怠ト認ム可キ事實アレハ解怠ノ大小コ拘ハラス刑法第百五十條ニ照シ處分スヘキ儀ト心得ヘシ

○福岡縣 十五年四月七日伺。 全月廿七日付

刑法第百五十條看守又ハ護送者其解怠ニヨリ囚徒ノ逃走ヲ覺ラサル云々ト有リ右囚徒トハ相當官吏即豫審判事檢事司法警察官ノ令狀ニヨリ逮捕シタル犯罪人等ヲ指シタルモノニシテ巡查或ハ一般人民ニ於テ逮捕シ未タ相當官吏ノ手ニ渡ラサルモノハ囚徒ノ名稱ヲ下サハル儀ニ候哉

指令刑法第百五十條ニ記載シタル囚徒トハ巡查ノ逮捕シタル被告人ヲモ含蓄ス
(理由) 囚徒トハ官吏ト人民トヲ論セス犯罪アリタルニヨリ

囚徒逃走ノ罪及人ヲ監禁フル罪

逮捕シタル被告人ハ皆囚徒ト言フヲ得ヘシト雖モ刑法第百五十條ニ於テハ其懈怠ニ依リ囚徒ノ逃走ヲ覺ラサル者ヲ罰スヘキニ付右ノ如ク論シ來レハ常人ニ懈怠アルキハ仍ホ本條ニ依リ罰セサルヲ得サルニ至ルヲ以テ職務ヲ以テ逮捕ノ處分ヲ行ラタル者則チ豫審判事檢察司法警察官及ヒ巡査等ノ逮捕シタル者ニ限ルチ正當ナリトス

○宇和島始審廳海事 十五年四月廿五日伺。全年五月十日付刑法第百五十條ニ囚徒ノ逃走ヲ覺ラサル時ハ二圓以上三十圓以下ノ罰金ニ處ス其第二項ニ若シ重罪ノ刑ニ處セラレタル囚徒ニ係ル時ハ三圓以上三十圓以下ノ罰金ニ處ストアリ右初項ハ第二項ヨリ推スキハ單ニ己決輕罪ノ刑ニ處セラレタル囚徒ヲ指スカ如シト雖モ本條初項ハ唯囚徒ノ逃走ヲ覺ラサルトノミアルニ付己未決ノ囚徒皆含蓄スルモノト解シ其未決囚ナル時ハ己決ノ輕罪ノ刑ニ處セラレタルモノト同ク第百五十條初項ニ照シ處斷スルモノニ候哉

指令伺ノ通
○新潟縣 十五年六月一日請訓。全月十三日內訓

第一條茲ニ拘留人アリ其看守者該拘留所ニ鎖鑰ヲ施スヲ忘レ爲メニ囚人ハ看守者ノ透テ窺ヒ逃走シタル時其看守者ハ刑法第百五十條ニ依リ處分スヘキ歟或ハ其鎖鑰ヲ施スヲ忘レタルハ全ク不注意則チ疎虞ナルヲ以テ官吏懲戒例ニヨリ處置シ可然哉

內訓前段伺ノ通
第二條囚人護送ノ途中手鎖或ハ縛繩等ヲ窃ニ逃シ逃走シタルキ其護送者ハ前條同様執レニ據ルヘキ哉

內訓實際ニ於テ看守者ニ懈怠アリト認ムル時ハ刑法第百五十條ニ依リ處分スヘシ

第三條未決ノ囚徒護送中ニ逃走シタルキ之ヲ罰スルノ明文ナシト雖モ第百四十四條未決ノ囚徒入監中逃走云々トアルニ依リ處分スヘキモノナルヤ

內訓一應入監シタル者ニ係ルハ見込ノ通

第四條前條若シ第百四十四條ニ據ルノ限ニ非ストモ豫審判事ノ發シタル勾引狀ヲ以テ捕獲シタル被告人引致ノ途中ニ於テ逃走シタル時モ同様罰スルノ限ニ無之哉

內訓見込ノ通

囚徒逃走ノ罪及罪人ヲ藏匿スル罪